第七章　リオ・デ・ジヤネイロ及サン・パウロ

一、市中散見

雑仕鳥帽子山（パンダシユカール）――長鳥帽子峯（コルコヴアド）――夢幻山容――王宮――コパカヴアナ海岸――ニイマイエル海岸道――チジユカ山の瀑瀑――舊都ペトロポリス――連轎――植物園

此處へは八月廿五日に著いて九月三十日に引上げ、そしてアルゼンチン國ブエノスアイレスに向つた。八月中に大體見當がつくだけの必要な見學見物をし、サンパウロ市に赴き、再びリオに歸り、今度はゆつくりと見學見物を繰りかへしたのである。リオ並にサンパウロの一般の事は日本に相當知られてゐるし、又邦文書册に隨分紹介せられてあるから成るべく省畧して、主に著者個人の體驗で面白かつた事柄を記し度い。

この市、卽ち港の入口からして已に突飛な、他の都には比べられない物がある。三百九十五米の高さの、烏帽子樣の形をした而も全體が岩からなるパン・ダシユカール山がにょきりと突立つてゐる。尙少し離れて、長い淸正公の烏帽子然たる、前者の倍以上も高く見えるコルコヴアド峯（頂上七〇四米）が聳えて、その後見をしてゐる。その先きには、チジユカの奇峯、その他形狀の一々違つ

ペトロポリスより上山轎山を望む

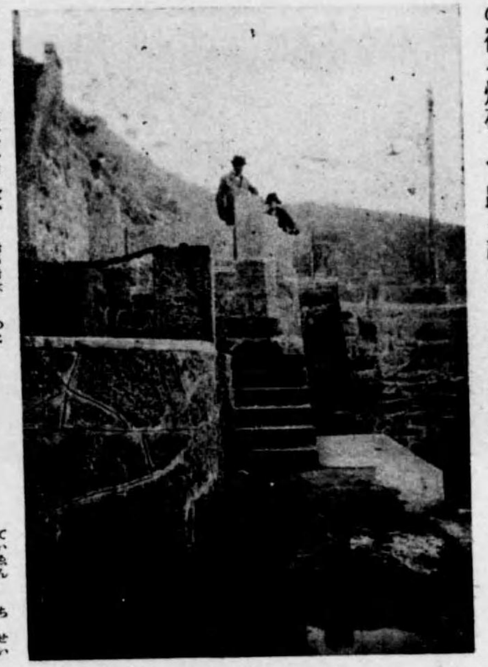
た巖の連山が參差圍繞してゐる事である。英書などに山々の形狀を形容し兼ねてか、それ等を「ファンタスチク」といつてゐる。東洋人は寧ろ支那風南畫中のあらゆる山容を一望に纏めた絶景に包み惠まれた都であると云ひたい。

この灣、港内は奥深く曲入し、都はその殆大部分を灣水に擁せら

マンゲツ通りロヤールパルムル並樹街夜景

れ、其間に又所々に陸の突出があり、卽ち港の内に又幾つかの小灣が造られてゐるのである。

市内には諸々に丘がある。それを切り下げ、又港岸を埋めて町が形られてゐる。現在も岩石の小山の裾を爆破して路を設け、又港岸を埋め立てゝゐる。陸と小島との間を埋立てゝ陸續とした處、岩山の上に住宅地を設けた町もある。サンタ・テレサ町の如きがそれで、市の中央にあつて眺望最も良く、電車が通じてゐる。



アヴエニダニイマイエル（モレライ氏夫妻）

市の面積六十平方哩、人口百五十萬と云ふ。ブラジル共和國の首都たる關係は、他國では北米合衆國の首都ワシントンと同じである。

既に獨立百年を經た共和國であるが、その前の帝攻時代の宮居が殘つてゐて、その庭園は地勢を良く利用して立派に造られてゐる。北米の都市に缺けてゐた種類のものもこゝにはある。バレースは現在國立博物館として使はれてゐる。

その他の公園、廣場公園に孔雀の放し飼、並樹路、南國情緒にふさはしいロヤール・バルム並樹通

り等、見るに目覺ましいものだ。銅像などにも立派なものがあり、官廳、劇場、寺院等も勿論缺けてはゐない。リオの銀座とも云ふべきアヴエニダ・リオ・ブランコの數町の間は、綺麗で、賑かで、市内の電車は大抵そこを中心に集まる。その裏通り、横通りには、古い立派な店舗が多い。オーヴィドール街は伯林のフリードリヒ街に比すべきか、日本人がよくお土産に買ふブラジル寶玉、蛇紋樹ステッキ、不老長壽藥ガラナ、小鳥の標本、蝶の裝飾品等々が皆この邊で商はれてゐる。

郊外の遊覽地は、恐く他の大都市には珍しいものと思はれる。トンネルを拔けてコパカヴァナ海濱、七里濱十江の島と呼んだアヴエニダ・ニイマイエル海岸、チジユカ山三千尺の飛瀑と、山腹の溪流と洞窟。殊にボア・ヴイスタの絶景は箱根に比敵する。舊都ペトロポリスへは今登山鐵道の便があつて、リオから二時間、うち約三十分間はアプト式で急勾配を登る。山巔の舊都には、ブラジル獨立當時のドンペドロ一世の離宮（一八二三年）がある。

ペトロポリス山上の散歩道

黄熱流行時代には外國公使館は此處にあつたと云ふ。當時の日本公使館であつた建物もその儘に見られる。先づ盛夏の輕井澤と云つた所で、富豪の立派な別莊がある。ホテルも、レストランも、珈琲もいい。公園は、九月初旬であつたが、恰も日本の五月の氣候で、一面にツツジ、コスモス、ダリア、金仙花、薔薇の盛りであつた。熱帶花卉は見當らなかつたが、郊外の森あり川あり濕布ありといつた所は、風涼しく夏外套が欲しい位。

ヴイウアヴ岡とパンダンシヤ山ルーカユ

インデペンデンシアの涯の上に立てば市の方面が望まれる。彼方に遠く淡く、近く濃く、南畫姿の連巒を指呼すべく、眺望の絶佳は形容の辭を知らない。市に近いコルコヴアド峯は、高さ二千三百二十九尺、こゝへは山巔近くまで電車で登れる。電車を降りた所で寫眞を撮らせると恰度下りかけに渡して呉れる、上手で安い。山上の眺望臺から望めばリオ市は箱庭か盆景、全く巧を盡した遠近の山容、此處へは一度ならず登る價値がある。

庭と見える。外海の白沙、濱に寄せる白波、

空中電車——中央は兵舍彼方白濱に沿へるはコパカバナ

ブライア・サウダーデ内海岸通り、そこには精神病院があり、ジユリアノ・モレイラ院長の官宅がある。それを過ぎて醫科大學がある。舊博覽會場であつた建物が要塞兵舍用になつてゐる。その傍にパン・ダシユカール山に登る空中電綱發車所がある。

モレイラ博士の好意で諸處を見物したが、——モレイラ氏には敬意を表して入場券を要しないのみならず何處でも所長が出て挨拶する。——この電綱に吊り下げられた函に乘り四百米の山に引上げられる時はいさゝか危ぶんだ、綱は二重になつてゐるが。綱の箱は發車するとグン〳〵上つて下の醫科大學も要塞兵舍も小さくなつてしまふ。五百尺のウルカ山に達し、函を出てホツト一呼吸、又函を換へてパン・ダシユカールに上る、全體で十二三分かゝる。ここは港の入口に聳えてゐてコルコヴアト程高くはないから眺めは廣くはないが、上から山の半腹を蔽ふ熊がゐたと云ふ深い森林の容姿は素晴らしい。

山頂には珈琲店、土産物店があつて、一憩できる。又、麓から徒歩道があつて、若い人達が急阪を喘ぎつゝ上つて來る。世界で初めてのこのシュウエーベ・バーン（獨語）は、サクソニアの首都ドレースデンであるが、其處のは僅かの阪道の上を空中へ引上げられるに過ぎない。

リオ植物園入口の並木

リオ植物園は市の裏で、外海に面してゐる。市から電車が通じてゐる。園内は非常に廣いから、熟く見るには一日は少くとも要る。植物、花卉の集められたる種類五萬を超えると云ふ。大多數は國内産であるが、他の熱帶地からの移植もある。椰子の母と云ふ大バルム群があり、百年を超えた樹だと云ふ。園の入口からの並樹も仲々大きい

此處にも研究室があつてその報告が出版されてゐる。

リオも暑中隨分熱い事があるさうだが、若し一日の清遊に熱さを忘れ、身神の疲勞を癒し得られる天然の風景を持つた南米の都會はと問はれるなら、著者はリオを以て其の尤と推したい。滯在中、清

遊の歡を盡し得たのは南條、關根、小島の諸君とモレイラ氏等の賜であつた。

二、醫事關係事項

1綜合制の醫科大學＝沿革——端麗なる室——獨逸醫學との關係——細菌學教授——放射線科部　**2國立精神病院**＝なつかしやの濱——オスピシオ——外科と眼科　**3癩並に花柳病豫防檢査所**＝寄附行爲による創設——最新醫學施設——クンニヤ博士　**4オスワルド・クルース研究所**（マンギニヨス研究所）＝一般の參觀を薦む——故クルース博士——**リオ黄熱流行小史**——巴奈馬黄熱退治との對照——伯國實驗醫學の創設者——伽藍式建築——研究部と知名の學者——ルツ老博士——附屬病院——**トリパノソーマ患者**——日本に稀有絶無の熱帶病——獨逸醫界との往來——標本陳列室——**シャガース博士の研究事蹟**——特殊傳染風土病——病原體發見——媒介昆蟲——宿主穿山甲獸——ネイヴア博士の研究——研究所漫談　**5國立博物館**＝王宮變じて博物館——學理的親日家ピント博士——人類學研究室　**6國立圖書館**と聯邦府立**化學試驗所**　**7內科外科學協會**＝グルゼル教授——歡迎會

リオ醫科大學。已にバイヤ醫科大學の項に述べた通り、リオの醫科大學は一八〇八年の創立で、初めは、解剖外科及治療醫學校と云ふのであつたが、後醫科大學と稱し、更に一九二〇年に既存のリオ工業學校及リオ法科大學とを合して一の綜合大學となつたのである。（リオ醫科大學紀要第四年、一九二〇年）。モレイラ氏の案內で參觀した。

國立精神病院を過ぎて、パン・ダシュカール山の麓に近い所に在つて、四階建の堂々たるものであ

り、十年前に建築され、内部も立派なものである。病院は附いてなくて、歴史あるサン・タカサ病院その他を利用する事になつてゐる。それらは市内にあるから、臨床講義は遠く市に行かねばならぬ、電車の往復には便利だが。學生は此處で主に理論的の講義を聞き、又日本で云ふ所の基礎醫學の實習をする設備である。特別の研究室と云ふものは見當らない。

建物の特徴と見受けたのは、日本的に見て醫科の各專門科教室が此大きい一つの建物に纏められてゐる點、又、日本流に見て貴賓室とか、學長室とか云ふものが頗る念入に設計せられ、美事に飾つてある點である。就中、注意されたのは、獨逸諸醫科大學がリオ大學と精神的親密を謀るべく務めてゐる事であつた。當大學に何かの記念すべき、祝福すべき機會のある時には、諸醫科大學から、美麗に飾られた額縁の付いた祝文が學長の名に於て贈呈されてゐる。大學と大學との交際は、種々な意味で大に務むべき事と感じた。外國の學者の來訪に對しては大學の名譽稱號、その銘記又はメダールなどの制度を整へ、之を授與するなどは、吾國に於ても學問に國境なしの理由上より務め度いとの感を深くした。

この大學では、豫定の細菌學教授候補者として若いドットウールが獨逸留學中で、ブルーノ・ルボ氏が細菌學教授の位置にあつた。細菌學教室も相當立派に設備せられてゐて、參觀當時には、恰も學生に黴毒スピロヘーテの實習中であり、助手が頻りに暗視野裝置にかかつてゐた。

この大學には、一九一八年四月開所の放射線研究所が特設せられてゐる。サンタ・ルシア通りの元のフランシスコ・デ・カストロ館を利用したもので、間口十五間奥行四間位の二階建である。ベレームの記事で述べておいたサンタ・カサ病院は、リオにもあつて大學の臨床講義に利用されてゐる。

醫科大學紀要は學長内科教授アロイシオ・デ・カストロ氏其他の教授が編輯者となり、一九一七年以來出版してゐる。學長は在職長く一九二六年にも尙ほ此カストロ氏が勤めてゐた。

國立精神病院。院長モレイラ氏の案内で參觀した。病院の所在地の名はPrais Saududeなつかしき海濱と云ふ。なんと感傷的な響の名よ！　前は通りを距てゝ内灣の白沙の濱で、遠近には先の夢幻的な山々を眺める勝地である。病院は、市内では「オスピシオ」と云ふ以前の名が分りいゝが今は「オスピタール」と云ふ。輪奐の大は日本に見られないものである。設備の特に異つてゐると感じた點は、外科と眼科の兩部を設け、助教授級の主任に置いて、精神病患者に必要な診療を行はせてゐる事である。各主任に紹介されてその仕事を見たが、吾が邦の制度と對比して興味を惹いたことであつた。

癩病竝に花柳病豫防檢査所。これはリオ醫學界に於ける最新の施設であつて、玆に記述を逸してはならぬものと思ふ。リオの醫人亦悉く、必ず見學せよと勸めて吳れたのであつた。

場所は國立精神病院に近く、コパカヴアナのトンネル通りの角にあり、參觀した時は、開所後間もない折であつた。癩と花柳病との兩部に分たれ、花柳病の方が特に興味を惹いた。建物は瀟洒たる平屋で、檢査室診察室等の設備は皆新式で、機械器具も立派なものであつた。外來患者は可なり多い。入院は裏の別棟の平屋で、庭園をもつた庇やヴエランダもいとも涼しさうな建物だ。この檢査所に於ては研究も相當出來るやうに設備してある。從て試驗動物も豐富で、圖の如く試驗用の兎飼養だけでも裏手にその運動場がある程、至れりの設備である。此處の主任は醫科大學教授クンニヤ氏で、この人は、黴毒は初めから心臟を侵すといふ意見で、それがエレクトロ・カルデイオグラムに取れてゐるのと、患者の病歴錄と對照して數々示して呉れた。その點は充分突込んで質問するだけの資格はなかつたが、兎に角、面白かつた。此處は醫科大學に利用し得る組織で、ブラジルの千萬長者ガツフレイ及グインレ兩氏の寄附行爲によつて創

癩花柳病研究所入口

設せられたと云ふ。癩及花柳病は伯國が豫防撲滅に特に力を入れてゐる病類である事の、一證左でもある。

著後三日目、邦船で日本に出帆したフオンセカ君見送の船上で知合になつたオスワルド・クルース研究所員ベテード氏の案内で參觀したが、リオを訪問する醫學者は一度參觀する價値があると感じた。

研究用兎舍

オスワルド・クルース研究所。この研究所の事を記述するのは、或は蛇足かも知れぬと思ふほど、それほど世界的に知られた研究所である。著者は折角ブラジルに來たから、ブラジルに有名な睡眠病患者及其病原の研究、又、同國に多くて日本に稀な、プラストミコーゼ病の研究を見度いと切望してゐた。幸に患者も收容してあつたので、見學を遂げ得たのを喜んだのであるが、唯、特別に興味深く思つた點だけを述べる。

この研究所はリオ市の中央から自動車で四十分かゝるマンギイニョースと云ふ所に在る。それで又マンギイニョス研究所とも云つてゐる。ここは醫學に關係のない外國旅行者でも見學するし、また參觀すればブラジルの醫學研究所が如何に進歩してゐるかが略分かるから、吾が同胞旅行者の訪問をお勸めする。リオ市内から通ふには、プライア・フォルモーサ驛から汽車に依る。朝夕は近郊勞働者の往復で込合ふが、頻繁に發車し、二等車も付いてゐる。研究所の傍の驛からは、研究所專用の乘合自動車で三四分位の坂道を上る。市内に住居を有する研究所幹部員は、所長は別だが、その他は毎朝自動車で集めて研究所に送り、夕刻は又送り返へす。

研究所の附近は餘り人家のない未墾地が多い。本館は高所に建てられてゐるから遠くからも見え、其處からリオ市の一端を望み得られる。

ブラジル醫界の偉人、故ドットール・オスワルド・コンサルヴエス・クルースの壯年からの切願努力で出來上つた大研究所である。ブラジル人は此學者を尊敬追慕して措かざる所である。若し、この人なかりせば、この大研究所も或はなかつたかも知れないと思ふ。此の研究所があつて、ブラジル醫學研究も面目を發揮し得、又得つゝあると思ふ。天景と地勝に惠まれたリオ市も、恐るべき黄熱の慘毒の爲めには、大伯國の首都たる價値を失ひ、外國便臣も舊都ペトロポリス山都に難を避けて住まねばならなかつた。外國貿易も黄熱の爲めに阻まれて損害を蒙つた。そこに此の偉人が出て、醫學上の

強固な確信を以て豫防撲滅事業に努力し、當時の大統領ロドリゲス・アルヴエス氏も、全くその人物に信頼して難事業の遂行を援けたのだと云ふ。

今は大部分良くなつたが、尚ほ市の小部分には昔の非衛生的な家屋、狹隘な小路が見られるが、黄熱の爲には斷然たる家屋の破壞移轉、市區改正などの大事業をも企圖敢行した。巴奈馬などの到底日を同うして語り得ない所である。住民の利己的反對も押し切らねばならなかつた。患者の隔離、家屋の消毒なども徹底的にやらなければならなかつた。これらはオスワルド・クルースの人物人格の力によつて成し就げられたと思はれる。

一八四九年リオに黄熱侵入以來絶滅せず、一九〇三年（明治卅六年）オスワルド・クルースが聯邦衛生院長になり、一九〇八年に至つて黄熱を撲滅し得たのである。著者は一九一一年の春、獨逸ドレースデン萬國衛生博覽會に差遣せられ、そこのブラジル館で大部の黄熱撲滅作業の活動寫眞を見た。その主なる部分は、病毒保有蚊（エーデス・カロプス）の撲殺と、蚊の子子の退治とであつた。大きい家の屋根から、大きなズツク袋を被ひ垂らして蚊の遁路を塞いでおいて、室を燻蒸する作業がそれである。無論その前に患者送院などの部分もある。

子子退治法の中で面白かつたのは、小魚マトピリを澤山養殖し、それを手頃の容器に入れて携行し、前以て探索隊が發見した排水し得ざる水溜に放つ。容器から水と共に水溜へ、瀧の如く移

される時の小魚の姿、水溜の子子を追うて貪喰する有樣までよく撮映してあつて、リオの現場に臨觀したかの感があり甚だ印象深いものであつた。序に、一九一一年と云へば古いやうでもあるが、活動寫眞は既に普及してゐて、獨逸では小學校の教育にさへ之を利用してゐた位である。リオは歐洲に近く、一航海十三四日、アルゼンチンのブヘノス迄漢堡から十八日で著した位だから文明の利器は常に日本よりは早くリオに達する。

閑話休題、ここに、オスワルド・クルースの黃熱退治の功績を間接に飾るべき他の話がある。巴奈馬運河は周知の如く始め佛人が開鑿に當つたのであるが、當時同地には黃熱があつて、多くの工夫吏員が斃れた。確かな話に、佛人は一八八一年から一八八九年までに二萬二千百八十九人を失つた。そして、それが毎年人口千人に對して二百四十人を失ふ計算になると云ふ。佛蘭西の初代の社長は妻子五人連れで來て、六ヶ月以内に妻子四人を失つて自分一人殘つた。又或技師は十七人の壯年を同伴して來て、一ヶ月にして自分の外皆死んだ。又鐵道監督が三人の姉妹を連れて來て、一ヶ月内に全滅した等、一々枚擧し難い程實に慘憺たるものであつた。佛人は黃熱に對して科學的な豫防に努力しなかつた爲、この事業に失敗したのだと云はれてゐる。

玖馬國ハバナのドクトル・フインレイが、始めて蚊が黃熱を媒介するものであると首唱した事は有名なる事實である。而して、科學的精確さを以て、アノフエレス蚊がマラリアを媒介する事

實を發見したのは(一八九七)ロッス氏である。換言すれば佛人が運河事業を始めたのは此發見前であつたから、學術的に云つて、佛人の事業計劃に蚊の撲滅を等閑に附した事を責める事は多少酷であるかも知れぬが、フインレイの說を充分に重要視しなかつたのは惜むべきであつた。

因に、アメリカでも充分難儀な思をしてゐる。一九〇〇年アメリカの黃熱委員はステゴミア蚊が黃熱を傳播する事を發見してゐる。そしてこの頃、コロネル・ゴルガスの(一八九九——一九〇〇)ハバナに於ける黃熱撲滅の豫防衛生の經驗が著しく目に著く。一方、巴奈馬に於ける米人の罹病は慘憺たるもので、一九〇〇年總督府の役人が何人も黃熱で死んでゐる。アメリカが巴奈馬へ工夫を始めて入れたのは一九〇四年の七月であつた。しかし、その年になほ黃熱が流行し、十二月に六名、その後の三ヶ月に十九名、十四名、十一名と發生した。一九〇五年四月に、米國巴奈馬委員の執務所となつてゐた佛政廳建物内の米人六名が罹つた時には、米人間に大恐慌を來した。其處で毎日三百名の米人が執務してゐたが、三名が死亡するに及んで、使雇級の人々は大に危惧し、大勢が汽船に逃げ込むやうな騒動が起きたと云ふ。

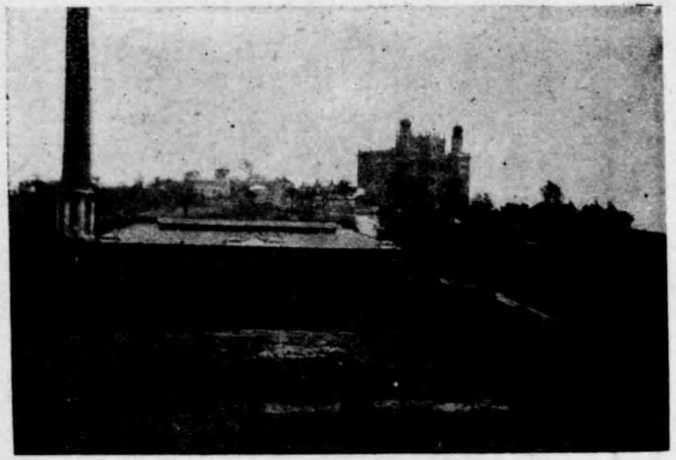
一方、一九〇五年の三月から九月迄、巴奈馬の街に燻蒸隊が活動し、市内を區分し、區毎に度度燻蒸し、終には全市を一舉に燻蒸したり、其間燻蒸ガスが巴奈馬の天空に漲るといふ壯觀であつたと云ふ。

一九〇五年の終に効果は明に認められた。傳染源は絶滅せられ、十一月十二日に最後の患者、地峡の大西洋側なるコロンの患者は一九〇六年五月十七日で最終だつた。

後に巴奈馬を訪うた記事はあるが、巴奈馬では現況を述べるに止まるから、黄熱豫防事業の略史をリオの序にこゝに記るしたのである。

伯國大統領がオスワルドを信用したのと米國大統領ルーズヴエルトがゴルガスを信用し兩方共相前後して事業に成功したのは興味ある事歴と謂ふ可しだ。

要するにオスワルド・クルースは巴奈馬に於ける・アメリカの黄熱撲滅事業と並行してやつたのであるが、リオの方が制度上、土地柄上、實行に困難であつたことは想像される。撲滅は少し遅れたとは云へ多年黄熱の巣窟と見られたリオが、名實共にブラジルの首都たる面目を獲たのは、一面彼の人格に負ふとも云へる。



病院より本館を望む

オスワルド・クルースは一九一七年四月十一日年五十九歳で沒した。伯國學術界に對する此學者の特績を伯國學者が記載して、『氏は伯國實驗醫學の創建者である』と。蓋し最も簡單適切の辭であらう。

オスワルド・クルース研究所の建築は歐米諸醫學研究所に比すれば外觀上甚だ異つた特徴がある。アラビヤ式と云ふさうだが、正面屋上左右に塔があり、遠くからはお寺かと思はれる。地階上に天井の高い四階がある、その一二三階が主なる研究室であつて、最上階には標本室や圖書室などがある。地階にワクチン製造室包裝室其他がある。少し小高い所の別棟に、ペスト研究室、化學研究室、動物室などがある。三百米位離れて少し低い所に病院がある。かうしたとても廣大な建物であるから、一度や二度の參觀では、何處で如何な研究をしてゐるのか一寸わからない。此の研究所は仕事の内容から比較すれば、先吾國の傳染病研究所と大同小異と云つてよからう。付屬の病院は伯國の傳染病患者を入れて研究に供してゐる。一

本館の一角——立てるは事務長

ケ年の經常費二千コントス（邦貨六十萬圓）で、その八百コントスを血精ワクチンの製造費に當て、其餘は研究費其他に用ひてゐる。

研究は色々に別れてゐる。血液學、昆虫學、原蟲學、寄生蟲學、細菌學、病理解剖學、化學療法等等。特に興味を持つたのは病的芽生菌病的絲狀菌の研究、又ブラジル熱帶病亞弗利加の睡眠病に對する南米トリパノゾーム病等である。それ等は日本に於ては研究材料の稀有な、或は絶無なものである。寄生蟲の研究もなか〳〵盛んである。

所長研究室

この研究所にラウロ・トラヴアソスと云ふ學者がゐて、一九一三年頃から研究し始め、不撓不屈の研究を續けて居、研究業績も、百を超える程の勉強家である。尙此の人のほかにセサール・ピントーと云ふ若い學者がゐる。トラヴアソス氏に次ぐ勉強家で、寄生蟲に關する業績が多數に上つてゐる。病的芽生菌の研究に對しても其專門家と云つていい學者がゐる。アレア・レ

アン氏がそれである。又病理學方面は多年ガスハール・ヴィアナ氏が研究してゐる。

研究室では、付屬病院の入院患者から珍しい——著者には珍らしい——試驗材料を得て來て研究してゐるのを羨ましく思つた。又、常に毒蛇、蠍、トリパノゾーム病媒介昆虫に關する研究などが行はれてゐるなど、羨むべき、研究材料に惠まれた國とも云へる。

現所長シャガース氏は、當時聯邦衞生局長を兼ね、又大學の教授としての講義もしてゐて忙しいが、研究所にアドルフ・ルッと云ふ老大家が居て、研究の指導統制をやつてゐる。此人は純學者肌の人で、多年に亙る種々の研究が枚擧し難い位ある。英佛獨語共非常に達者らしい。研究に關しては非常に熱心であり、外來の學者に對しても親切な人である。

病院が約三丁許離れた所に在るのは不便であるが、本館がその邊の最も高い所に建てられて、地面に乏しい爲めかく離したのであらう。しかし小綺麗な新しい病院が、熱帶地方向きに設計せられ、涼しく出來て居る。一部分二層になつてゐるが、その地階の方に試驗室があつて便利に設備してある。一階は病室、診察室、事務室などである。病院主任エオリコ・ヴィリダ氏の案内で參觀した。

豫て期待してゐた南米トリパノゾーム患者が七名入院してゐたが、一名は神經型他は心臟型であつた。神經型の患者は一見十二三歳の娘と思つたが、實は三十七歳だと云ふ。これは病氣の爲めに身體の發育が阻害せられた結果である。身體のみでなく智力の發達も同樣で、殆んど白痴の程度である。

子供の時に罹病し慢性に經過したものである。心臟型と云はれた患者六名は、皆大人であつて、慢性のものであつた。動けばすぐ脈搏が結滯する。此病氣は伯國では主にミナス・ゼラエス州に有る。（後述參照）

芽生菌による患者一名は、頸部の淋巴腺が腫脹し、已に破潰してゐたしまた重態であつた。膿汁を取つて顯微鏡檢査をしたら、生きた芽生菌が澤山見えた。ペニード氏がそれを培養してゐた。此芽生菌病は死亡率が大變に高いさうだが、治療の方法がない。病院では他の患者と隔離し、深甚な注意を以つて傳染を豫防してゐた。他の熱帶地に蔓延してゐるライシュマニア病患者も入院してゐた。

この研究所は、獨逸の醫學者、殊にその細菌學者とは往來親密で、嘗ては知名の原蟲學者故フォンプロワチエーキ氏が來て研究してゐた事もある。リ・マックス・ハルトマン氏（伯林）、ギームサ氏（漢堡）等も來た事がある。著者が參觀の際は、漢堡のロシヤ・リマ氏が居て、提供された研究室でブラストミコーゼの研究をしてゐた。その成績を、一夕、リオ内外科學會で報告された事もある。所長シヤーカズ氏は何時でも日本の研究者を歡迎すると云つてゐた。この研究所の業績は主に佛文で外國に報告され、英獨文が少ないため日本へは詳しく知られてゐない。平常、伯國語で報告される物では、當研究所の報告機關としてなか〳〵立派な印刷物がある。研究報告の附圖は、前所長が養成し、二十餘年も腕を鍛へた畫工がゐて、極めて美事な圖表を作成してゐる。その人の作には署名がある。

研究所の陳列室は本館右翼四階全部を占めてゐる大室で、内部は中央に更に一階層を作つて、その上に又陳列段を設け、壁には圖表が澤山掛けてある。陳列標本の種類は澤山あるが、南米トリパノゾーム病に關するものは流石に本家だけあつて數多い。そのうち、病原體の保有動物アルマデイロの陳列品等は垂涎のものであつた。本病に關する圖表や實物は、醫學者ならぬ素人の旅行者が見ても分るし、又興味を持てるものと信ずる。

毒蛇や蠍、その他の害虫、ブラジル寄生蟲の中間宿主などの種類が澤山に陳列されてゐた。熱帶病で死亡した人間の内臟組織の貯藏したのは勿論、肝臟膿瘍の標本が多いのも興味があつた。

初は所長の案内説明でザット一巡り見當を付けておいたが、それで足りなくて、日を改め單獨で半日がかりに見た。疲れて窓外に出ると、四方の眺めは目を慰めるには充分な佳景である。陳列室で一寸氣のついた點は、從來南米トリパノゾーム病原體の名にはクルースだけの名を冠して用ひられてゐたが、此處では大抵クルース・シヤーガスとしてシヤーガス氏の名が付加されてゐた。

圖書館にはこの研究所にふさはしい圖書が集められてゐる。吾々が此處で研究して歐米に報告發表でもしようとするには充分便利である。日本の雜誌も若干來てゐる。所長御自慢の圖書室である。

所長シヤーガス氏の研究。シヤーガス氏の全名はカロス・リベイロ・ジユスチニアーノ・ダス・シヤーガスと云ふので、一九〇三年リオ大學を卒業した。卒業論文の『マラリアに於ける血液の研究』

は當時優秀な論文として學者の注意を惹いたと云ふ。クルースの門に入て、始めは主にマラリアに關する研究をしてゐたが、ミナス・ゼラエス州のヴエリアス河谷に伯國中央鐵道敷設中、政府の使用勞働者がマラリアの流行に苦しめられたので、當時の大臣ミケール・カルモン氏が衞生局長クルースに其防禦を命じた。當時クルース氏は他の地方でマラリア撲滅事業に從事してゐて手が放せなかつた爲、シャーガス氏を派遣した。そこで、同氏はミナスに入り込んでマラリア豫防に從事したのであつた。

ミナスはもとからトリパノゾーム病猖獗の地方である。ミナスでは子供が生れると此病氣に罹り死ぬ者は死んでしまひ、則ち急性の時に多くは死に、助かつたものは慢性になる。大人が始めて罹ると主に慢性になると云ふ。シャーガス氏は其處に一年以上もゐたのであるが、其處らに普通バアルベイロ或はミユッバン又はシユッバンサと云つて、日本のごきかむりに似た蟲が澤山ゐる。そして本病は川の沿岸ばかりでなく、山間の住民にも亦發生してゐる。シャーガス氏は滯在中に本病の臨床的方面に就いてよく調査したが、病原體媒介蟲の存在には永らく氣が付かなかつた。或る時ピラポラと云ふ所へ行く途中、鐵道技師達の小屋に泊つてゐた一夜、技師長モッタ氏がバアルベイロをシャーガス氏に示した。そのときシャーガス氏は始めて之が病原體の媒介者であらうと考へ付き、それからバアベイロを集め、その體内に一種のトリパノゾームと云ふ原蟲のゐる事を發見したのであつた。それから生

きたバアルベイロをリオ・デ・ジヤネイロの研究所に送り、健康猿に吸著せしめた。二三十日後、シヤーガス氏が研究所に歸り、その猿の血液を檢査したらば、トリパノゾーマがゐた。猿の他モルモット兎に就いても試驗したが、これも成績が陽性である。そこで本病の病原體は、この一種のトリパノゾームであるとし、自身終生忘るべからざる恩師のオスワルド・クルースの名譽の爲めにと、「トリパノゾーマ・クルーシイ」と命名した。

尙、シャーガス氏は、この病原體には更に或る脊柱動物である所の宿主があるべきだと推理し、探索し得たのが、則ち彼のアルマディイロである。シャーガス氏は、この動物の棲巢、バアルベイロ（トリアトマ・ゼニクラタ）を檢査して、その體内に彼のトリパノゾームのある事をも追究した。そこでこのアルマディイロが自然界に於ける元祖宿主であることを決定され、卽ち、この動物が本來病原體宿主であつて、人間に傳染するには、バアルベイロなる有翼吸血昆蟲の媒介によると云ふ傳染系統を明かならしめたのである。

シャーガス氏は又、ミナスにゐた時、一急性症小兒の末梢血液を檢査してトリパノゾームを發見し、又一屍體材料をリオの研究所に送り、ガスパルウアンナ氏が病理組織學的に研究した結果、心臟筋肉の纖維内に甚だ興味あるトリパノゾーマ發育型の存する事を發見した。之はトリパノゾーム形態學上有名な發見である。

右の樣な學術研究上非常に有益な成績が續々と現はれたので、オスワルド・クルース氏自身もシャーガス氏の仕事を親しく見る爲め、態々難義な旅行を意とせずミナスの奥のシャーガス氏の所へ赴き、其處で興奮の態度で一週間ばかり研究方面並に臨床方面を視察したと云ふ。此研究徑路の一の面白い點は、普通傳染病の病原體は患者體から、或は其分泌物若くは排泄物から發見せらるゝのであるが、本病では初め吸血媒介昆蟲から、次に試驗動物から、次に患者からと云ふ順序に見出してゐる事である。

パアルベイロは以前學語でコノリヌスと云つてゐたが、現在ブラジルでは多くトリアトマと稱してゐる。クルース研究所で、アルツウール・ネイヴアー氏が色々と研究し、ミナスの此病氣の媒介をなすパアルベイロを生物學的に研究して、トリアトーマメギスタと云ふ學名を與へた。其研究報告は澤山發表されてゐる。

ネイヴア氏は研究所を出て、一度サンパウロ州の衞生局長を勤め、後、北里先生から招待せられて、日本に來訪し、歡迎され、勳三等にも叙せられた。歸國後、自分の研究所を設けて研究し、著者の訪伯頃は、殊に珈琲の傳染病、それは固よりブラジル農業の爲め非常に重要な意義がある、などを研究してゐた。なほ、氏は日本人のためには有力なる同情者であると聞く。

トリアトマに色々種類がある。病原體を媒介するのにメギスタ、インフエスタンス、ゾルデイダ等があり、他に病原に關係ない種類があるらしい。メギスタの親蟲は可なり大きく、體の長さ三、五糎位胸や腹の背面に美事な赤色の線がある。クルースの研究所でベニード氏が試驗してゐたが、親蟲は卵

を二百以上も產む。八乃至十二團に產み付ける。溫い季には、二十日乃至三十日で幼蟲と化し、蛹、成蟲と成長する。此各期に吸血をしたがるから厄介なものである。各期は約一月半、成虫となつてから產卵するまで約五十日を要する。卵から卵まで約一ケ年かゝると云ふ。雄は雌より對外界的に弱く且つ短命である。この蟲は、各期共に人を刺すらしいが、主に蛹と成蟲とが刺す。刺しても痛感がないと云ふ。人間のほか猿、兎、犬、モルモットに病毒を感染せしめる。人の住居の室隅の孔に棲んで產卵し、燈光を見ると這出して人を刺す。成蟲は翅があるから、ハンモックの人をも刺すと云ふリオの研究所では二週間に一回宛モルモットの皮膚に付けて血液を吸はせてゐた。

トリアトマはブラジル國内には處々に產する。他國ではアルゼンチン、ハイチ、佛領ギアナ、北米アリゾナ及カリフオルニア、錫蘭、新嘉坡、印度支那、フイリピン、ジヤワ、スマトラにも產すると云ふ。シヤーガス氏は此研究に於て、伯國の自然界に存する特有の傳染病を、根幹枝に亙つて重要な研究を遂げ得た幸福な學者と云へる。

亞弗利加に亞弗利加トリパノゾーム病睡眠病と云ふ傳染病がある。クロコダイルが病原體の宿主で、チエツチエ蚊が媒介者である。その病原體はトリパノゾーマ・ガムビエンゼイであるが、こゝのトリパノゾーム病のトリパノゾームとは形態が違ひ、殊に發育上に重要なる相違がある。シヤーガス氏のはシソトリパヌム・クルーシイと呼ばれてゐる。

シヤーガス氏がかく研究した爲め、ブラジルでトリパノゾーマ病の事をシヤーガス病と云つてゐる。又亞

弗利加トリパノソーマ病に對し、アメリカ・トリパノゾーム病と云つて居る。

ジャーガス氏のトリパノゾーマ病研究の最初の發表は、一九〇八年『ミナスのトリパノゾーマ』と思ふ。それから續々、年々研究發表し、その研究が一九一六年頃迄にも及んでゐる。氏には、勿論、この病氣の研究ばかりではなく、他にも研究があるけれども略す。吾々が日本で研究した鼠咬症に就ても、彼の地で研究してゐる。

園内の食堂

オスワルド・クルース研究所漫談。

朝九時半頃に研究者が出揃ふらしい。驚いた事には、リオに著いた初めの週に第一回の訪問をしたので、習慣を知らなかつたが、小さい茶碗――モツカ茶碗、宴會食後に出る珈琲茶碗――に珈琲を饗し、その後もさうであつた。鐵面皮にも、差支ないと聞いて、お代りした事もある。珈琲の國だから、その位の事は容赦されるであらうと思つた。

リオの日本大使館でも朝九時頃に小使が皆に珈琲を出す。南條君にそれを賞めたら、同君がブラジル語で當人に何か話された。と、お代りを持つて來て吳れ、其後いつも二杯宛吳れる事になつて居た。

クルース研究所では午後三時頃に庭園内の四阿に集つて珈琲を呑む。此四阿は本館から一段低い所に在つて一本の大木の幹を、中心に取入れてある。塗壁は無く幅狹の薄板の斜め格子になつてゐる、次室には厨房がある。オスワルド氏の趣向なさうで大層風流である。午食は皆此處に散置してある食卓で、用談したり、はしやいだりして食べる。眺めもいい。

シャーガス氏に初めて會つた時、葡語が出來ないから、英獨何れで話していいかと獨逸語で問ふたらば、氏は英語で端的に『あゝ獨逸語はダメ〳〵、英語だ』と云つた。その云ひ方で、略ぼその氣性を察した。後までもヤハリ先入主となつたか、調子がかはらぬと思つた。面白い事があつた。或る朝、先約によつて市内の住人を自動車で拾ひ集めて研究所に行つた事がある。研究所の事務長とトラヴアツスス氏と著者で、最後に研究所に近い町のルツ老先生を拾ひ集めたのであるが、著者のホテルを出て、途中アヴエニダ・リオ・ブランコ、卽ちリオ銀座を經て、賑かな廣横丁の角を廻つた所で急に車が停つた。トラヴアツスス氏が急いで下りて、其處の大きい珈琲屋に飛込んだ。事務長に何の用かと聞くと、トラヴアツスス氏がチヨイト珈琲一杯だと。それから車は郵便局の前で停つて、車から大きな布の袋を持出して郵便物を受取つて來た。各國からの印刷物や書狀などをかうして毎日受取るのである。

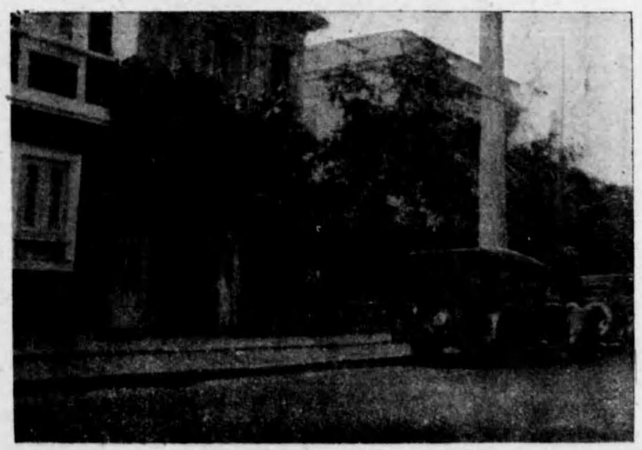
ブラジル人が珈琲を飲む分量はどの位か知らないが、シャーガス氏に、そんなに呑んで中毒しないかと訊

れた處、『ナーニ、自分は一日少くとも十五杯呑むが此歳になつて何ともない』と云つた。珈琲茶碗は七十立方糎位の容積である。

事務長は、獨逸語を達者に話して吳れるので有り難かつた。所長が朝出勤すると、事務長その他研究所の主なる人二三人が所長室に來て、暫時用談する。その間著者は室内の應接机に居て本など讀んで待つてゐた。所長が、朝ホテルへ著者を拾ひに來て吳れた時の事である。

本館の壁や廊下などに處々モザイクを配つたり、なかなか贅澤なものである。紐育のロックフエラー研究所も廣大なものであるが、所々うろつく間に、窮屈な所や、暗い陰氣な所がある。クルース研究所にはそんな部分はないやうだ。初めマングイニヨス研究所と呼んだのを、オスワルド氏の名譽の爲めに、その氏名を冠用する事になつたと聞く。

シヤーガス氏邸

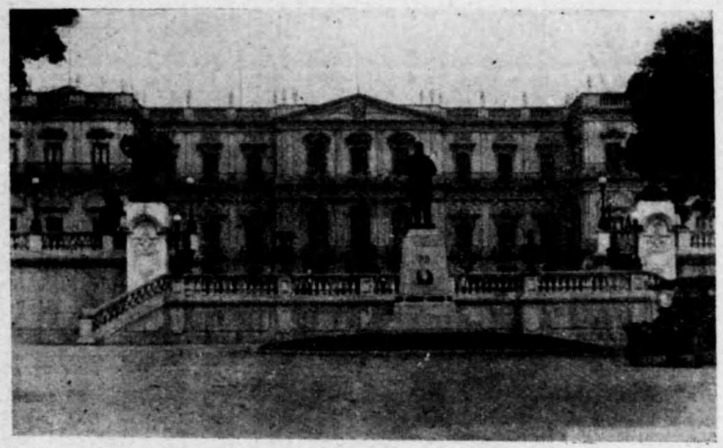


シヤーガス邸は滯在中のオテル・セントラールから程近い純然たる住宅街で、數十年を經たロヤール・バルムが二列に竝んでゐる閑靜な通りで、ルア・カルヴアルヨ・デサと云ふ。表に庭園があつて奥行の深い家で、建物の一側が廊下、その取ッ付に玄關のある趣味のある構造である。

この通りのロヤール・バルム列は大いに氣に入つた。と云ふのは、普通、リオの寫眞に常に掲げてある大ロヤール・バルム樹列の通りは、マングヱ堀で、その附近は餘り上品な池區でなく、堀の汚泥の浚渫が不完全で、惡臭があつたりした。シヤーガス氏邸の通りは一方は内海岸通りに通じ、一方は石山の麓を開鑿した通りで、それを拔けるとボタフオゴの方へ出られる。この切通しが陰多く風が吹拔けて來るので涼しいからのせゐもあつたか。

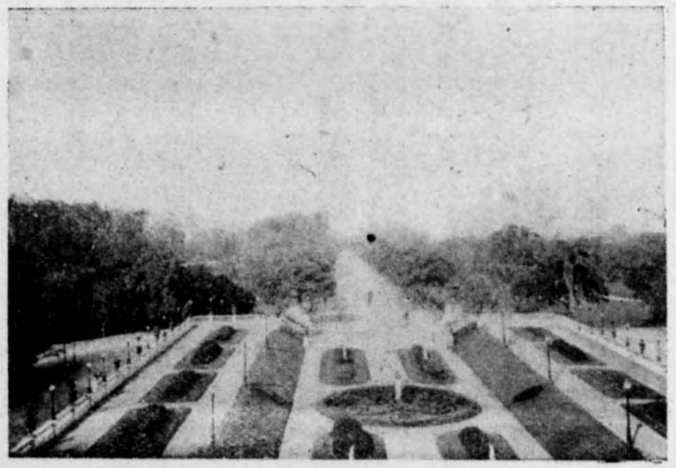
國立博物館。此處は舊王宮であつたから、建物や庭園は善美である。其位置は、外洋船岸壁に近い方であるが、市の繁華街からは隨分離れてゐる。後に山を負ふ岡の上の形勝の地である。前庭は廣く且つ自然に低下してゐる。廣大な庭園キンタ・ダ・ボア・ヴイスタを控へ、池あり、亭あり、並樹ありで、此處へは渡邊醫學士も同道ジユリアノ・モレイラ氏が案内して吳れた。

館長ロケツト・ピント氏に紹介せられた。ピント博士は人類學、人種學に造詣深く、それ等の立場から、公然日本移民誘入賛成論者であつて、日本人の誘入によつてブラジルの人種型低下せずと云ふ立論である。自然科學に關する陳列品種は多種に亙り、二時間ばかりでは、到底見盡し難かつたの



國立博物館

は遺憾であつた。參觀當時、此處の人類學研究ラボラトリユームで館長は助手と共に研究してゐた。そこから出版されるArdhivos de Museu Nacional は、自然科學の範圍にとどまらず廣く人文に關する學者の研究を掲載し、ブラジル學術界に重要な地位を占めてゐる。



本館前造園通路

國立圖書館。此處もリオ市を訪ふ者は一度參觀しておく價値は充分あるアヴエニタ・リオブランコ大通りの入口に近い場所でモレイラ氏の案内で館長に紹介せられ、その案内で歐洲から齎らされた珍書などを示された。建物、設備共立派な

後方眺望

池畔にてーモレイラ博士と渡邊君

もので、日本の學者は少々恥しく思つた。

聯邦府立化學試驗所。モレイラ博士は外國の學者に見せねばならぬ、又吾々が見て置かねばならぬと思はれる所を、親切に案内して呉れたやうに思ふが、此處だけは容易に褒められない氣がした。その他の記述は感じた事に詐りはないのであるが。

この化學試驗所は下町の裏通にあつて場所も悪い。建物も混雜してゐて、整然とは云へない。此處でもモレイラ氏に對しては餘程敬意を表せられ、所長初め他の人の應待は鄭重であつた。驚いたのは、大小の白金の坩堝が澤山あつた事である。それだけは物質的な意味から特記したい。仕事は無機化學的が主と思はれたが、眞價は後にリオに遊ぶ專門家の印象に待たう。

リオ内科及外科學會での講演。ブラジル醫學士院長ミケール・コウト教授に面會し、週例會で講演する約束をしたが、突發した事件のため(後記)コウト氏は内外科學會長ナシメント・グルゼル教授に協議して、其處で一夕講演する事になつた。

九月十四日の夕九時から、アヴエニダ・マイン・デ・サの百九十七番地の二階で、演題は著者と緒方規雄君とが年來やつて居る恙蟲病病原の研究に關するもので、演壇の周圍に特に製作した圖表を貼り、演說中、若干の寫眞圖、寫畫を會員座席に廻はした。

この演說の準備には當時外務省伯國留學醫であつた渡邊勤學士(東大)齋藤等學士(九大)葡語に堪能なる粟津金六商學士、南條榮君の御世話になつた。演說並に說明は獨逸語だが、豫め葡語で要旨を印刷し、會場で一部づつ來會者に配布する事にした。

會長の他に、特に招待せられた代理大使、フォンセカ父氏、モレイラ氏、リマ氏、又モレイラ夫人、關根中佐並に夫人、リマ夫人、約七十名が來會した。コウト氏は先約があつて缺席された。

會長は著者が英語を話すと云ふと、直ちに立つて歡迎辭(英語)を朗讀された。直譯すると次の如きものであつた。

伯國の學者は、日本の學者が既に久しい以前から生物科學、殊に醫學の研究に長足の進歩を致せる事を完全に諒知す。日本知名の學者が、科學的に有益なる發見を寄與せる事は、この南米の伯國に於て、賞讃し、且尊敬する所なり。本日、我が學會に於て、日本首都の大學——現在醫學者に最も豐富なる——より、プロフエサー石原を迎ふを喜ぶ。而して、君は恙蟲病に關する自己の研究を、此處に吾々に報告の榮譽を與へらるゝ。余はリオ・デ・ジヤネイロ内科及外科醫學協會の名に於て、醫學の大學者の名譽の爲めとして常に知られたる、この場所に君を歡迎す。

著者は原稿の朗讀と圖表說明に約四十分を費した。後刻、暫時會員諸氏と談話して十時半に辭した。

諸病院に關して記したい事項は澤山あるが、長くなるし、自身の見學も充分には行かなかつたから省略するが、サンタ・カサ病院の如きはアヴエニタ・リオ・ブランコに近い勝地を占め、便利で、堂々たる輪奐はベレームの夫との比ではない。葡萄牙病院は山の手の閑靜の地區で、これも堂々たるものであつた。

三、リオ醫學者交遊　モレイラ博士夫妻

能力説——**ブルーノ・ルボ博士**＝『日本人』の著者——パラ州日本人移植首唱者——南米インディオの曲玉——イフアネマ區の岩居——清宴——ロー氏等のアマゾン調査報告——老**フオンセーカ**博士＝息の日本訪問——外國語に堪能な一家——醫學士院の激論——**シヤーガス**博士＝日伯人の相似——外科の**グルゼル**博士＝國際醫人——精神病學の**カルダス**博士＝日本訪問——醫學士院長**コウト**博士＝內科學の權威——脚氣病研究——その診察所——ホテルの會食——ジョツケー倶樂部の午餐會——大使館晩餐——**二種のアカデミア**

ジユリアノ・モレイラ氏と日本人との親交は、初代大使館付海軍武官森本中佐（當時）竹內陸軍大尉から始まると云ふ。ベレームで、幸に第二代大使館付海軍武官、關根中佐と夫人に邂逅し、その紹

介を得た。リオ著の際はバイヤ以來の荒海に弱つてゐたが、翌日、當方から禮訪しない前にモレイラ夫妻はホテルに訪ねて吳れた。滯在中諸所の案內に、レセエプションに、或は家庭的晩餐等に多大の好遇を受けた。その紹介で、リオ內外科學會に演說する事となり、夫人は發音演習にと、一夕晩餐の用意をしてまで迎へて吳れ、食後獨逸人の夫人が三時間に亙り、一句宛發音を訂正された親切は肝銘した。當夜の演說中、著者は成るべく列席の諸君に呼かけつゝ朗讀したが、モレイラ夫人は向ふの眞正面に頑張つて、絕えず口元を監視されたのには閉口した。

モレイラ氏邸

新來の日本人は片端から何かの理由を付けては呼寄せる。或る時など、新來の某君を紹介した時、夫人は、貴君はバナナの油揚げを喰べた事があるかなどと訊かれ、一緒に翌晩その御馳走に預かつたりした。自動車の運轉手には唯ドツトール・ジユリアノ・モレイラ方へと云へば通つた。モレイラ氏に案內された行先で、同

氏の人望家たる事が頷かれた。入場料も不要であつた。ミケールコウト氏、シャーガス氏、グルゼル氏、モレイラ氏同席の所で、コウト氏の態度はモレイラ氏には同僚と見えたが、他の人とは違つてゐた。シャーガス氏のコウト氏に對する態度は嚴肅であつた。

夫人から先年獨逸雜誌『グロブス』に『ブラジル人の色に就て』掲げた論文を與へられたが、伯人に於ける白人系と、黒人雜種との優劣論で、趣旨は、科學、音樂、美術、德義に於て、兩者に等差はないと云ふ事を、黒人系に屬する知名の士を擧げて論じて居る。精神的遺傳に就いては、モレイラ氏の研究を屢々引用し、結局、兩者の差異の別かるゝ所は、環境如何に因ると云ふのであつた。

ドットウール・ブルーノ・ルボ氏(ロボとあるけれども皆ルボと云ふ)ルボ氏は、當時リオ大學細菌學教授であつたが、以前十年も國立博物館長であつた。『日本人』と云ふ一著作があり、日本人に友情が厚い。バラ州出身である。バラ州日本移民地調査の事を話したが、氏は、無論新聞記事で承知はしてゐたが、直接聞いて大に喜んでゐた。バラ州へ日本人誘入說を首唱した上院議員、ラウロ・ソドレの事を告げたのは既記の通り。氏は又、南米インディオが亞細亞から來たとの說で、その裝飾具の曲玉は日本のと同質のものであつて、從來南米にはその石を產出する所はないと云はれてゐたが、近頃バイヤ州內で發見され、それを葡語でジャデ Jade(硬玉)と呼んでゐるとて、それを示された。淡青

色で蠟石のやうに見えるが、質が硬くて、ナイフの刄では傷付ける事が出來ない。

ルボ氏の居はイフアネマ町で、コパカバナ海岸の直ぐ續きで、勝景の新住宅地區、市塵は少しもない。しかも丘よりは高い小山の中腹に、自然の石質を穿つた階段を上つた邸は、各階が山に據つてゐる。東洋人が見ると、頗る南畫趣味のある構造である。

長男はギムナウムの上級に在り、外にも二人丈お目にかゝつた。家庭的の園藝に列席された長男が、父君の命で四階下の圖書室へ何度も往復されて、種々の書籍を取り出して見せて呉れた、子息の父君に對する敬虔な態度は、日本での模範的家庭に見られるものであつた。

バラ州に關する書册を數々贈られた中に、一八九〇年代に、バラ州政府が佛人アンリー・クード・ローに命じ、アマゾン諸支流の調査をなさしめた報告の、巴里で印刷出版したものがあつた。諸支流と云ふのは、リオ・シングー(一八九六)、リオ・トカンチンス・アラグアヤ(一八九六—一八九七)、リオ・マデエラ(一九〇一)、リオ・クルア(一九〇〇—〇一)、リオ・タパジャース(一八九五—九六)、であつた。

その裏山は仰いでチジュカ山峰を望み、アヴェニダ・ニーマイエル、著者が七里ケ濱十江の島と名づけた海濱から外海を俯瞰し眺望絶佳であつた。こゝでも子供の首飾になる木の實を拾つたりした。

オリンピオ・ダ・フオンセカ氏。この老紳士はむしろ伯父さんと云つた恰好である。若い時には隨分活動家であつたらしく、事蹟はベレーム出版のバラ・メディユ誌にも見える。リオでも同氏の若い時の醫學界、醫界に於ける事を聞いた。醫學々士院の有力なる役員である。著者の到着三日目にか、その長息で、オスワルド・クルース研究所の少壯所員なる同名の學士が、推されて交換視察の爲め日本に向つた。

當日午前九時に婚禮し、午後三時半サントス丸で出帆すると云ふので、親友達に紹介狀を頼まれ、結婚式にも列席を薦められたが、數日來睡眠不足で遺憾ながら失禮した。出帆時刻前に船に行つて、モレイラ氏から一家族に紹介された。紹介狀にリストを付け、それに名宛の人の肩書や所を書いたのを渡して說明をしてやつた。最も喜んだのは兩親であつた。仕合したのは、弟フラヴイオ君が、同樣オスワルド・クールス研究所員で、丁度半歲サン・パウロ大學細菌學講師をして居られたのが來合はされ、サン・パウロの見學案内を引受けて吳れた事であつた。

更にクルース研究所助手ペニード學士をフラヴイオ君が僕のクランデアミイゴだといつて紹介され、此人が又リオに於ける見學案内を引受けて吳れ、後にその世話になつた。

フオンセカ家一族はその母堂までが皆英獨共に話すので、便宜で都合が良かつた。十七八に見ゆる妹さんの獨逸語が尤もよくわかつた。

老フオンセカ氏は實地家だから、賑かな町、ルア・カメリーに住んでゐる。面白い建方の家で、兩

隣の間に鐵門があつて、そこからすぐ階段を一階昇つた住居である。南米では里馬の野々宮君、池田ドクターの住居等、往々見かける所である。

モレイラ氏の紹介でコウト學士院長に面談し、學士院の次の定會日に演說の約束をしたが、その週の會日後、モレイラ氏が學士院長の傳言を齎して來訪し、昨夜の會で、會員間に或る事件で激論があり、皆昂奮してゐる始末で、著者の演說にも都合がよかるまいが、一方、滯在日の都合もあらうから、演說は內外科學會でやるやう會長ナシメント・グルゼル君に交涉し度いとの事で、前記のやうになつたのであつた。モレイラ夫人は『學士院の出來事と云ふのは、貴君には全然關係ない事だから心配するな』と云ひ添へられた。

早朝の塵芥自動車

老フオンセーカ氏を尋ねた折この一件を告げた所、老博士は『ソレハイケナイ私が出かけて見る』と、語氣に力を入れ、昂奮した顏色で云はれた。學士院長が心配して吳れてゐるから、その好意に委せる考で居

たので、唯、御親切を謝すと丈云つて置いたが、その後一兩日して、新聞に載つた模樣で、サルヴルサーンの使用法に就いて、會員中の醫者と藥劑師間に意見を異にして激論があり、會長は出席して居なかつたけれども、一時會長を辭するとまで云ひ出したとのことであつた。

今一つ印象深い事は、九月三十日、獨船でリオを出帆する節、出帆も間際に近い頃に、老フオンセーカ氏が一人船を訪づれ、惜別の詞に添へてリオ製の銘あるシガレットケースを贈られた。思出多いリオを一人で出帆する寂しい折とて、老フオンセーカ氏との袂別は悲しかつた。

その年の十二月中旬に歸朝したのであるが、若いフオンセーカ夫妻は日本の視察を了へて、東京に歸り、リオに旅立つ恰も準備中で、東京で再會の悦を得た。氏は一九二〇年からオスワルドクルース研究所に入り、細菌學寄生蟲學の範圍に研究しつゝある少壯の學者である。

ドツトウール・カロス・シャーガス氏。クルース研究所の條に已に記したが、或る日の途上、著者に、ブラジル人が日本人に似てゐると思はぬ乎と云ひ出した。屢々日本人によく似た人を見、或る日リオ・ブランコ通りを一人で歩いてゐた時、先方から來る一人の紳士を日本人と思つて、帽子を取つて挨拶した程だつたと答へると、氏も至極同感して居られた。

端麗、痩軀で、端的に物を云ふ人らしかつた。取つ付きは少しわるいが、後には打ち解けて口をきける學者だ。

日本人とブラジル人とがよく似てゐるとの話序に、學士院長コウト氏の談話に、リオ正金支店萩原夫人を往診した際、日本人の女中が實によくブラジル語を繰るので、此の女中は何年頃日本から來たかと問ひ、一同失笑したと云ふ話もある。

◇

シャーガス氏とコウト氏との談話を傍から聞くと、コウト氏はシャーガスと呼ぶ。シャーガス氏はコウト氏にドツトウールと呼ぶ。南米では、プロフエツソールとは呼びかけない。シャーガス氏は、研究所に於ては確かに所長らしく見える。他の人の氏に對する態度によるので、著者にはシャーガス氏は淡白な人のやうに思はれたし、色々と進んで世話もして吳れた。

◇

リオに著いてから、モレイラ氏から、この地の學者と接觸するのには、獨逸學者の禮儀でいいときいてゐた。演説をした後、一度ホテルで世話になつた數名の學者に、アルモーソを呈し度いと、案内方を手紙で支度しようと思つた所、そんな場合には、却つて、電話で案内するのが普通だとの事。これには却つて弱つた。葡語で電話が出來ないから、遂に友人の世話を煩はすに至つた。

他のお客は確答があつたが、シャーガス氏だけは、當日の朝までわからない。不得已、渡邊學士がシャーガス氏の宅に行つて吳れた。女中に頼んで出先の研究所へ電話して貰つたらば、確かに來ると云ふ事であつた。當時衞生局長兼務でなか〳〵忙がしらしかつた。いそがしい人達は、知人との會食には、形式ばつた晩餐よりは、アルモーソの方が氣樂で、應じ易いと云ふ事である。それでも十二時半頃から三時半頃まではかかる。

ドットウール・ナシメント・グルゼル氏。（自身は人が自分をグルゲルと云ふがゲルではないと云つてゐた）リオ大學の小兒外科及整形外科の正教授で、南米の國際的の醫事衞生的會議には屢々ブラジル代表として出席してゐた。政治家風の人で、會つた中では最も話し良い人物で、先方から話を巧く引出して呉れる。伯國醫學の歴史ある內外科學會長をしてゐた人だから、勢力家であつたに相違ない。

この人は著者が大に賴りに思つたのだが、甚だ殘念な事には、一九二七年ブエノスの學會から歸ると間もなく急病で亡くなつたと云ふ事である。

今一人追懷せねばならぬ友人がある。ロドリゲス・カルタス氏で、精神病專門で、當時、ジャカレボグアの精神病者集落の院長をしてゐた。リオに著すると間もなく來訪せられたが、既に高齡で、非常にゼントルな人であつた。どうして懇ろに來て下さつたかと問ふと、新聞で見たからとの事であつた。前年旅行の序に日本に立寄つた事もあり、伯國に於ける日本人の良友であるとモレイラ氏から聞いた。後、コバカバナの氏の居を禮訪した。

歸朝後、一九二六年、丁度、將に歸國せんとする若いフオンセーカ氏夫妻を招じた年末の一夕、その計報に接した。フオンセーカ新夫人が泣いてやまなかつた。老人でもあつたが、餘程德の厚い人だつたに相違ない。リオで會つた時の氏の溫容が忘れられなく、佛性の人とでもいふのか、泌々と追懷された。又、氏が日本移民の爲めに親切を盡されたと云ふことは、感謝しなければならぬ。

ドットウール・ミケール・コウト氏。リオ醫科大學內科第三講座教授で、ブラジル醫學學士院長であり、又臨床大家としても、ブラジル醫界ではその名聲嘖嘖たるものである。一九二三年十月二十五日に、教授在職二十五周年記念式をリオ大學に於て盛大に擧行した程であるから、相當の年配なのであらう。

著者は、アカデミアで一夕演說する爲めに、紹介をモレイラ氏に協議した。氏の紹介で、九月九日午後一時半自宅で面會すべしとの返事があつたが、葡語の出來ない著者は、玄關で迷ふ事をおそれて、豫て知合の渡邊醫學士に厄介を賴んだ。コウト氏とは是迄在留邦人で交際のある人もなく、唯、渡邊學士はコウト氏の講義や臨床講義を聽いて、顏見知りであつたのである。

女中に申付があつたさうで、すぐ應接に通つた。此處はボタフオゴ內灣に面し、邸前と灣岸の間は庭園施設をした廣い逍遙路が約五六丁續いた。片側が住宅區で、千萬長者ギインレー氏の邸もあり、皆淸楚な住宅ばかりの所だつた。家は二階建の新築で、極めて明るく、應接間は玄關に近い三十疊位の大さで、窓外、波靜かな內灣の彼方に、プライヤ・ソウダーディ（なつかしの濱）、その後に兀立するコルコヴアード峰が眺められ、左前方にはパンダシユカールの烏帽子岩の奇峰が眼前に迫る。

室內に陳列された大きな支那花瓶、日本花瓶、象牙彫などの數多くを渡邊君と感歎してゐた所へ、脊軀長身、額廣く目の鋭い、一見故東大病理學三浦守治先生を思はせる老紳士が現はれた。唯、鼻と

口とが少しく異なるのみだつた。陳列品に就て一瓦り説明を聞いたが、皆贈られた物だと云ふ。渡邊學士には親みを示した伯國の習慣で、抱いて背を叩いた。次に著者の手を取つて、次室を横切り、リフトの扉を開いて二階に昇つた。其處は書齋で、三面の壁に取付けた硝子書棚があり、分類した藏書の内科諸系統の書籍を説示された。傍の大机を指して、氏のシュライブ・ティショだと云はれる。次は三方に窓のある次室で、この室は壁色其の他の調度まで都て暗靜色で、神氣が自から靜まる感があつた。裏山の景色が頗るいゝ。

此處で、ソファに倚つて會談した。コウト氏は演説の内容を聞き、又供覽圖表の種類を問ひ、尙ほ日本に於ける近時脚氣の研究、ヴィタミン缺乏症の實驗を質問した。氏は、脚氣研究史に兩名の三浦氏があり、一は病理學者、一は臨床家であると（謹之助先生の事）云はれ、著者にも懷かしく思ひ出されたことであつた。

氏は脚氣談の中で、細菌傳染説は如何と訊ねられ、著者は以前にはあつたが、今は絶えたと答へると、氏は、細菌が多く出たのは皆間違だつたと笑はれた。後で渡邊君の話によれば、コウト氏は脚氣を熱心に研究し、傳染説を排し、榮養説を取つて居られると。一九二六年、獨逸での講演も脚氣問題であつたと云ふ。獨逸には三回赴かれたさうである。

初對面の感想では嚴格な人のやうであるが、ブラジル人に一般の慇懃さであつて、同時に淡泊である。

る。その後も同じ感じであつた。翌日午後、ホテルの帳場で番頭から異常の態度で、不在中に來訪のコウト氏の名刺を渡された。番頭の態度で、コウト氏の社會的の地位も推知された。その日、室の都合が付かないといつてゐたのが、應接間付の客室の空いたのに移轉する事になつた。

内外科學會講演の配慮を敬謝する意味と、うち解けて話をする機會を得るため、簡單なアルモーソに招待したいものとモレイラ氏の意見を叩いた。同氏も賛成で、渡邊南條兩君の電話を煩はして所在を追究し、屢々駈け違つた揚句、漸くアヴェニタ・リオ・ブランコなる氏の診察所に訪ねた。

診察所は、場所柄も室も立派な所であるけれども、入口だけは實に不思議であつた。家と家との間に、唯、三分の一坪許の餘地があつて、そこに唯三人乘の小リフトがあるのみで勿論誰もゐない。兎に角して、『パラ・セニョール・ドットール』と云つて、凡そ三階ばかり昇つて出て見ると、大きい室を二つに仕切つてある。表通りの室は患者待合室に使つてあり、そこに清裝した婦人や娘さん達が十人大人の男子が五人居た。みんな相當上流の人達と見えた。後側は戸が二ケ所ばかりあつて診察室らしい。横の廊下のやうな通路の突當りに、小さい机に書記らしい若い人が腰掛てゐた。其處へ行つて名刺を出して、ホンの數分面談したいと頼んだ。待合室の窓際へ腰掛を持つて來て呉れたので、患者達に物珍らしげに眺められ乍ら、窓越しにリオ・ブランコの賑かな大通りの、恰も夕刻出盛りの往來に、綺麗に著飾つた婦人連を眺めてゐると、紺サージの三揃の背廣を著た長身のコウト博士が顔を出

した。博士は言葉をかけた一人の紳士には拘まはずやつて來て、兎も角もと、奥の室へ案内した。診察中の邪魔を謝しながら、一緒に腰を下した。

其處で、ホテルへの來訪を謝し、講演の禮を述べると、博士は上出來だつたと褒められた。渡邊學士から新聞で消息を知り、當方の意志もモレイラ氏から通じて居つたので、月曜日の簡單なアルモーソに招待を快諾されたのであつた。

リフトまでの通路で、著者が、斯樣に多くの患者を治療してやられる醫者の使命は愉快であると云つたらば、博士は、微生物學者の方がより幸福だ、醫者はツライよ、と云はれた。

オテル・セントラールの支配人は、何か催しでもしさうに思つたか、恰もその頃、室へ、先年森本中佐が任期滿ちて歸朝される際の宴會に用ひたらしい宴卓献立を一枚寄越した。アルモーソの會場に就いては、月曜定休日と知らなかつたので、いい所は得られず、自分のホテルが相當と定めて、電話で夫々申し入れた。

月曜、九月二十日に、ホールの横の一段高い、相當大きい應接室でお客を待つてゐた。時間は少しも遲れなかつたが、一番あとでコウト博士が來た。普通食堂の一圓卓で食事をした。泊り客でなく、よく外國人が午夕に來るが、著者は特別の註文はしなかつた。唯、葡萄酒だけは獨墺のを出して呉れと頼んで置いた。

食後、リフトで七階にあたる屋上庭園に昇つて、そこで珈琲とシガーを供した。ここは眺望が良く、すぐ下は内灣で涼風が來る。しばらくしてコウト博士とシャーガス博士とが、小聲で話して居た。次でモレイラ博士に何か話してゐた。そして著者の處に來て、六日目の土曜日にジョッケイ倶樂部のアルモーソに來て呉

れとの申出でゝあつたから、ありがたく都合して出ると答へた。すると、コウト博士は、他の人には打合せず、失敬する、見送つて呉れるなと云つて立去つた。リフトまで伴つて別れた。博士の診察時間が來たのであつた。

この日のアルモーソは、一同愉快に三時半頃まで歡談して散會した。

少々疲れたが、モレイラ博士に拉せられ、アヴエニダ・ニイマイルに向つた。途中モレイラ邸に寄つて夫人を拾ひ、コパカバナ海岸に出た。外海の濱の漣波、小島に躍り碎ける波の華、清い海氣を吸つて一時に氣疲れが去り、心閑かになつた。車はイフアネマの新設市區計劃地を過る。新しいバンガローの格子門に熱帶蔓花を絡ました家、テニス倶樂部などが目に付いた。葦の繁つた小濱名湖とも見えるあたりを十分程走る。その邊の平地には灌木が茂つてゐる。山の麓に着き、海岸に向つて開いてゐる坂路を百米突許登ると、一軒の庭園付の大きい白塗の家がある。モレイラ氏が老フオンセーカ氏の有するサナトリユームだと説明した。是から先は海岸に沿うた崖上のドライブ道で、知名の土木工學者の設計であるさうだ。石質の土地だからなか〳〵の工事だつたらうと思はれた。展望のいゝ所で時時降りて、大洋の空氣を吸つて元氣つき、夕方町に歸つた。

ジョッケイ倶樂部のアルモーソは、九月廿五日正午少し過ぎで、アヴエニタ・リオ・ブランコに近く、割合に靜かな横通であつた。成程大きい立派な倶樂部だ。

隨分多客のやうに見えた。吾々は室のほゞ中央の圓卓に就いた。調度も献立も勿論結構。酒は客には一式

注いだが、コウト博士のみは果汁だけ呑んでゐた。酒を呑むと熱帶では體が持てぬと云つてゐた。香味の高いメロンが出た時、メロンが好きと見えてその話をした。食物の榮養價の話が出て、氏はブラジルの地方の常食マンジョウカの榮養に乏しい事を云つてゐた。倶樂部の食堂には實業家らしい人が多い。食後別の廣間に移つて、其處の油繪額や裝飾具の説明を聞いた。多忙を思つて早く二時にお暇した。モレイラ氏は其足で著者を拉して國立博物館へ連れて行つて呉れた。

◇

日本大使館晩餐。九月卅日にリオを出帆する事に定まると、代理大使から廿八日の晩餐に招待された。晩の八時、モレイラ博士夫妻、シャーガス博士が出席し、コウト博士は八時十分單獨で來館された。夫人は田舍に出かけて不在だと云ふ。暫時應接室で大使から日本調度品の説明があり。日本人側は大使のほか市毛書記官、關根武官、南條君各夫妻、齋藤天野兩學士各夫妻と著者だつた。

婦人連の御蔭で歡談湧くが如く、コウト博士も南條夫人と葡語で色々と話してゐた。別に形式めいた事は少しもなく、和氣靄々。食後涼しいヴエランダで漫談。シャーガス博士が最もよく話し、コウト博士も可なりよく談笑した。やがてダンスが始まり、コウト博士は邦人婦人のダンスを注目してゐた。種々面白い談話があつたらしいが、葡語で、著者はそれに加はれないので甚だ殘念であつた。

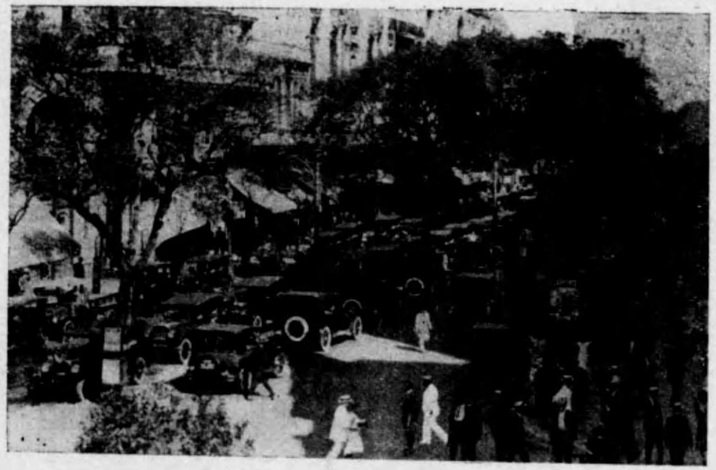
大使館での晩餐があつた夜、南條君の住居に近いホテルに歸途の同車中で、夫人は、コウト博士は宗教信念の強い人で、その觀念から日本人を批評されるのでたまらない、と洩らされた。著者は、コウト博士を純粹の葡萄牙人と思つてゐたが、自から亞弗利加人の系統が混じてゐると云はれてゐる事

を聞いた。

臨床家としては世間の尊敬信頼が頗る厚い。萩原夫人の病氣の節、種々に手を盡してもはかばかしくないので、渡邊齋藤兩君の肝煮でコウト博士を迎へた。それから追々快方に向ひ全治せられたと云ふ。謝禮を兩學士と主人とで持參しても受取られない。門弟の紹介だから要らぬと云ふ。色々に理由をつけて、爭論してもドウしても受られないで、主人は大に困却されたと云ふ。同博士には、リオでは少なからぬ診察料を要する。

二種の學士院。ブラジルにアカデミア（學士院）が二つある。一は前記醫學學士院で、創立古く、一九二九年六月三十日で滿百年記念に達する。會長はコウト博士、副會長はジュリアノ・モレイラ博士、會員は全國で百名の定數で、藥劑師も同樣會員たり得る。政府からの支出金があるが、印刷費などが主だと云ふ。

今一つは、科學學士院で、創立後約三十年で、全會を三部に分ち、全會長はジュリアノ・モレイラ氏、第一部數學部、部長エンニングル氏、第二部物理化學部、部長コスタ氏、第三部生物學部、部長アルメイダ氏で、各部の會員各三十名、全員九十名の制である。



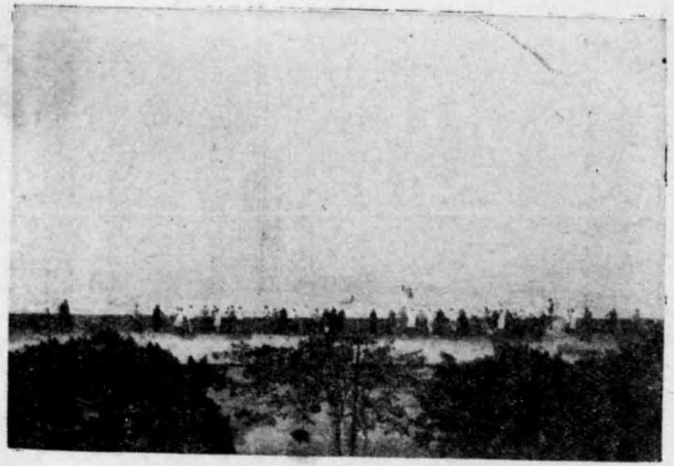
リオ・プラコンコ大通り

四、リオ雜觀

ホテル生活——海水浴——巷山眺望——海氣昏濛——リオの岳陽樓——漢堡南米汽船會社

ホテル生活。グロリア・ホテルが最新第一流のホテルである。アヴエニタ・リオ・ブランコにも近く、造園もあり、體裁は一等良い。宿料も餘り高くはない。著者はオ・プラ・コンコ大通りのホテル・セントラールに連れて行かれたが、持主が獨逸人で、他の事務員も皆獨逸人だから便宜であつた。奥の方にバアが有る。事務員が維納人であつた爲め、良く話が合つた。其處では酒のほか、清涼飲料も出たので同胞の來訪の節には便利であつた。

初めは地階の奥の室が取つて置いてあつた。それで食事付三十五ミルであつたから安い。尤も浴室は付いてゐない。初め思掛なく感じたのは蚊張が吊つてあり、風通しは良くない室だつた、暫くして三階で、リオの裏山の眺のいゝ室に替つた。それが五十ミルで浴室



早朝の海水浴場

はない。しかし、蚊張はいらない。そこにもわづかしか居なかつた。サン・パウロから歸つて、海岸に面した風通しのよい三階の、七十、七十一番と云ふのに移つた。それが六十五ミルで、應接と浴室とが付いてゐる。豫てリオは高いて聞いてゐたが、北米の事を思ふとさうでもない。北米では、此の位ではとても六ケ敷いと思ふ。老フオンセーカ博士は、ホテルの下に來て、電話を呉れておいてすぐ室へ來て呉れる。應接室があるから亂してゐる寢室を見られないで安心だ。

朝五時半頃夜が明ける。夜は海氣を吸ふため一窓明けて寢る。前はプライア・フラメンゴ海岸で、防波壁とホテルの間はアヴエニダ・ベイラ・マールの並樹路だ。六時頃には毎朝、海岸のコンクリー壁外の濱が賑かだ。多數の人が海水浴に集つて騒ぐ。

六時に珈琲を室に持つて來る。牛乳はベレームのホテルよりは良い。バタもいい。それにベレームよりは涼しく朝の氣持が最もいい。此處は内灣の出口に近く、右方

數丁の處にヴィウヴァ丘、少し水面を隔てゝパンダシュカールが見える。船の出入が一哩位の向に見える。向ふの岸までは三四哩位はあるであらう。それから近い遠い山脈。後方に順々に高く、三重位に重疊してゐる。その形が例の南畫風の趣のある鑿山と云ふべきか、晴れに可く、曇りに可く、雨に可く、曉と夕に、遠近、濃淡、何とも云へぬ美しさ。曇り日には雲氣低迷、海氣昏濛して、漫ろに鄕愁を懷かしめる。對岸に近くさながらに繪の島山があり、その峰の姿がとてもいい。左の峰は最も高く、擂鉢狀に屹立し、上方四分の一程から右は、平に眞直に馬の背狀に横走し、更に又少しく昇つて小峰をなし、それから右に程よい勾配をなした姿。海面に近く又小峰を形成つてゐる。風のある時は、外海の波が灣口を通じて島の根まで寄せ來り、島脚に激しく碎けるのが見える。その景觀の變幻は岳陽樓を想はせた。この島山はサンタ・クルース要塞山である。

パンダシュカールを望む遠方より博覽會跡建物醫大國立精神病院

ホテル・セントラールと一町しか離れないプラサ・ジョセ・テ・アレンカールに、ホテル・ドス・エストランゼイロスと云ふがある。前後の建物の間に庭があつて、日本人趣味の構造である。長逗留の客が泊ると云ふ或る州の上院議員などが定宿にしてゐたが、海に面してゐないから蚊が出さうに思ふ。

コパカバナのパレース・ホテルは市の中心から車で三十分位。此處は白沙の外濱に臨み、涼み場もあり、設備も立派だつた。一度モレイラ博士から招かれて行つたが此處は蚊がゐさうもない。

ホテルセントラルより大統領橋ホテルグロリアを望む

漢堡南米汽船會社はアヴエニダ・リオ・ブランコ七九に在る。ブエノス行の切符を買ひに行つた處、リオで種痘を受け其證明書を持參しなければならぬと云ふ。日本出發の際の種痘證明書を旅券と共に示したが、先方は種痘は五分もあれば出來る、何でもいゝかゐやつて來いと云ふ。此處までは細井君の通譯を煩はしたが、

相手が獨逸人らしいから、獨逸語で、種痘免疫がまだ充分ある、それに、すぐ行つても五分では間に合はぬ、切符を呉れゝばブエノスに著いて自分の責任で辯解すると云つたら、獨逸語を話すのかと云つて妙な顔付をし、机に著いてゐる上役らしい人に何か話した後、切符を出した。船はカップ・ボロニオ（ボーランド丸）三萬噸と聞いた。普通一等室運賃約五百二十五ミルだつた。正金支店での比價は一圓が三・二ミルであつた。

五、サン・パウロの醫事　**1新興醫科大學**＝細菌學のフォンセーカ弟君――新教授養成――寄生蟲病學――トラヴアスス博士――ピント學士――衞生學教室――ロックフエラー財團――衞生智識の普及策――スーサ博士――癩研究室　**2聖州衞生局**＝局長――チブス流行――日本移民　3**州立ブタンタン研究所**＝一九一一年の博覽會――クラウス所長――ブラジル現所長――本館――**蛇毒研究**――毒蛇無毒蛇飼養――蛇と蜘蛛――パラ州毒蛇分類――聖州毒蛇被害――免疫血清とワクチン製造

日本に最もよく知られたサン・パウロの事は多くは書くまい。著者のサン・パウロ行の目的は、醫科大學とブタンタン研究所見學、日本移民に關係ある州衞生局訪問、邦人有識者に就いて移民衞生の現況を教はらうと云ふのであつた。

八月三十一日の晩、リオ市小島正金支店長の宅で、夫人の心厚き日本料理に招かれ、裏の畑に手耕

の日本種の蔬菜を取混ぜた御馳走になつて、そこからすぐ中央驛に駈付け、サン・パウロ行の汽車に乘つた。一等寢臺は唯一床だけれども、隣室との關係が西比利ヲゴンリーの一等と同樣である。發車してから手洗に入つた處、驚いた事には、若い美人が化粧中であつた。内から隣室の入口の戸が締らないためであつた。

其夜は疲れてゐてよく睡つたので、有名な惡線路の動搖も氣つかず、翌朝、日が出てから目に入る景色は、これまで北米南米に見ない景色で、丁度東海道の程谷、戸塚邊のやうだ。小山あり、溪あり小川あり、小農家ありで。しかし、邦人農家らしいものはこの邊には見當らない。途中の驛でも、日本人は見當らないので失望した。前夜、リオは熱くて盛夏服で尙ほ汗ばんだが、此處は大變涼しい。外套も持參したし、服の著換も用意してある。

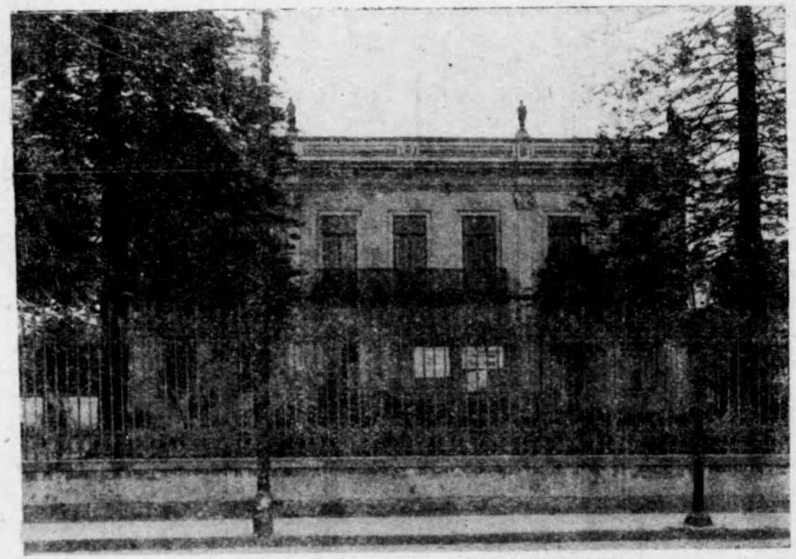
朝九時廿五分にサン・パウロ驛に著いた。前夜九時廿分にリオを出發したから十二時間の距離だ。すぐホテル・エスプラナーデに投じた。亞米利加式の新築ホテルであり、英獨共に通じ、サーヴィスも良かつた。涼し過ぎるから合著に著換へた。ここは南緯二三度三四だが、海拔八百米、市内最高所八二〇米で、豫てリオとは氣候が大に違ふと云ふ事を聞いてゐた。紐育を出帆してから久々に風なくして涼しいと云ふ感じ、日本での九月の末の朝夕位の涼しさを味つて別天地の思をした。外出の支度をしてゐると、ベレームで二ケ月一緒であつた江越農學士が來訪せられた。連れられて總領事館

に出頭し、諸君から移民事情を教はつた。

サンパウロ州立醫科大學。醫科大學はもと、市の中央に近い町中にあつて、建物設備共に古く、新興サン・パウロ州醫學教育の爲めには不充分なので、市端のテオドロ・サン・ベイオ邊の廣々とした地面に新築する事となり、一九二五年一棟だけ出來上つた。尙横及裏の空地に續々新築しつゝあつた。舊大學の方もやはり使用してゐる。新大學敷地は、彼の立派なパウリスタ大通りに續いた通りから左に折れ、ブタンタン研究所へ往く廣い通りに面した高燥閑靜の地區である。

若いフオンセーカ氏が日本へ出帆の時、見送りで知り合つたフラヴイオ・フオンセーカ弟氏の寓居へ電話で來著を報じおいて、あとから新大學を訪ねた。同氏はオスワルドクルース研究所員だが、サンパウロ大學の細菌學教授が留學中であるので、その間、毎年半歲こゝへ來て授業を擔當する事になつてゐた。同氏當時の肩書は、聖州醫科大學微生物學教室副主任と云つた。

初め同氏研究室の仕事を見た。學期央で、學生の實習もやつてゐた。昨年出來た新大學の第一棟で四階造り、それに地下室がある。この一棟に細菌學、病理解剖學、系統解剖、局所解剖、組織學、法醫學教室が置いてあつた。病理學教室では伯林に留學研究成り、新に就職した教授クンニア・モット氏が說明して呉れた。氏は、まだ手始めでと云はれてゐたが、それでも既に病理組織研究用の屍體、臟



醫科大學衞生學教室

器組織の各種が大分貯藏せられてゐた。系統解剖ではボヴエル教授に會つた。その他は突然の訪問であつたので、教授には會はなかつたが、フラヴイーオ氏の案内で各教室を一通り見た。特に珍らしい設備も見付からなかつたが、器械器具類は皆新らしいもので、獨逸、北米から取寄せられたのが多かつた。

町中の舊大學の一部を見た。寄生蟲病學教室へ行つた時、リオのラウロ・トラバツスス博士がゐて、授業中であつた。それが終つて教室を見、トラバツスス氏と話した。同氏もフラヴイーオ氏と同樣リオから出教授をしてゐる。そして、この教室にやはり、既記のリオ研究所員セサール・ピントト氏がトラバツスス氏の助手として來てゐた。同氏は學生の爲めに彼のブラジル・トリパノソー

の傳播者トリアトーマの養殖をしてゐた。

衛生學教室。この大學教室は、新大學及舊大學とは離れてゐるが、やはり町の内にあつて、舊大學よりは位置も良く、建物も新らしい。

教室入口のパウラサース氏

その前身は、ロックフエラー財團の聖州に於ける傳染病豫防撲滅施設の試驗所であつたさうだ。此處へはフオンセーカ弟氏、ピント氏の案内で訪問した。

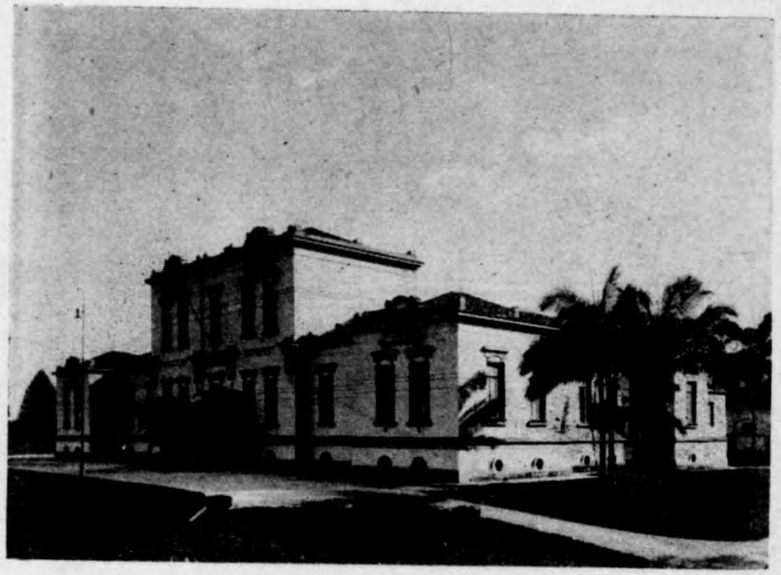
三階建長方形のこの教室を、約束の朝九時に訪問した。下の室で注意させられた事は、そこへ多勢の人、一般老弱男女が來てゐた點であつた。ここは大學の教室であるけれども、研究と教授の使命の他に、衛生教育、並に實施をも行つてゐる。一室は教場の如くなつてゐて、丁度、小學校の先生達に衛生を教授してゐた。又他の室では、乳兒を有する母達に乳に關するを知識、授乳法、人工榮養法などを教へるやうな設備があつた。例へば、乳瓶の清潔消毒を行ふ洗滌裝置、消毒裝置を實際に施行して教へてゐる。或る室では種痘を行つてゐる等、實地衛生學の知識の普及宣傳をやつてゐた。

教室主任醫科大學教授ゼラルド・パウラ・デ・スーサ氏が親切に案内説明して呉れた。二階三階にも、室が數ある。最も注目されたのは癩研究室で、助教授一名、助手一名を置いて研究してゐる。これはベレーム以來注目した點であるが、ブラジル國が癩病の豫防に努力してゐるこれも一證である。その他設備は充分、研究用にレンドゲン器械も設備使用してゐる。スーサ氏は米國に留學したさうであるが、英語は勿論、獨逸語も達者であり、行き屆く如才のない學者である。

聖州衛生局。當時サンパウロ州に於ける日本移民は、總數六萬に達したと云つてゐた。本州日本移民史は、明治四十一年（一九〇八年）第一回日本移民渡來に始まると云ふから、まだなま新しい事である。近來、移民は聖州サントス港に着き、檢査を受けた後、汽車でサン・パウロ市に行き、それから分かれて諸方面の耕地に向ふのであるが、その檢査の總本締は、州の内務長官に屬する衛生局である。當時の局長は、前記衛生學教室主任スーサ博士の兼任で、已に顔見知りであるから、お互に打解けて彼我の衛生事情を話し合つた。氏は日本の醫學者、その他衛生防疫に關する人に遇つた事がないので、進んで質問されたから隨分長く話した。衛生學教室では朝九時から三時間も案内して呉れた

上に、此處で又充分に話をして呉れたのは有難かつた。日本に於ける衛生局の虎列刺、ペスト、痘瘡の豫防が近年非常に進歩した點を力說した。當時サン・パウロ市には腸チブスが流行してゐるので、スーサ氏は患者發生市區地圖を示して、特にその豫防法を說明した。何分にも同市は急速に發展し、人口增加著しい現況で、一瞥したのみでも、市接續郊外地に新築しつゝある家屋が甚だ多い。氏は、市には水道は普及してゐるけれども新築住居は井戸であつて、飲料水が病毒に汚染されたと推定する場合が少からず、之には困却すると云つて居た。又神戸のブラジル領事館から移牒する日本移民の豫防接種表を示して、その實況を聞いたりなどした。著者は、彼我醫官が往來して、互の醫事衛生狀況を視察する事が双方に有利であるとの意見を述べた。この衛生局も、州勢がぐん〳〵發展するためか、なか〳〵活動してゐた。

州立ブタンタン研究所（又ブタンタン血淸治療研究所）。この有名な研究所は、著者が一九一一年の春、ドレスデン萬國衛生博覽會在勤の節以來、一度行つて見たいと思つた所で、當時、博覽會構內のブラジル館では、活動寫眞を以て該研究所の狀況、殊に毒蛇研究の狀況を恰も實地を見るやうに寫したのを見、加之、同年秋から、著者が師事した維納のルードルフ・クラウス氏が、一九二〇年から二年間、その所長となつた爲め、交通と研究出版物とによつて一層興味を增した所である。此處も



研究所本館

亦フオンセーカ氏とピント氏が同伴して呉れ、見學上一層便宜を得た。ホテル・エスプラナーデから自動車で四十分かゝる。市を離れてからも、多少高低のある車道で、附近別に佳景の所もないが、遙か右にかなり高い山脈が霞んで見えた。研究所は丘の上に在るが、その下方幾段かに、種々の建物がある。主なものは堂々たる所長官舍、少し下に陳列館（ムゼウ）、動物廐舍がある。

始めに所長官舍を訪れて面談し、そこから一緒に本館研究所に入つた。正面から見ると小いやうだが、建物は地奧に延びて居る。世間では毒蛇の研究所として廣く知られてゐるが、內容は細菌學研究所、或は血淸治療研究所である。細菌學研究の補助に、最近生理學研究室を

新陳列室

増設したりして、研究室も可なり多く、講堂もある。そして、各研究室は、關係のあつた知名の學者の名を以て呼ばれてゐる。之も趣向があつて感じがいい。ルドルフ・クラウス室もあつた。

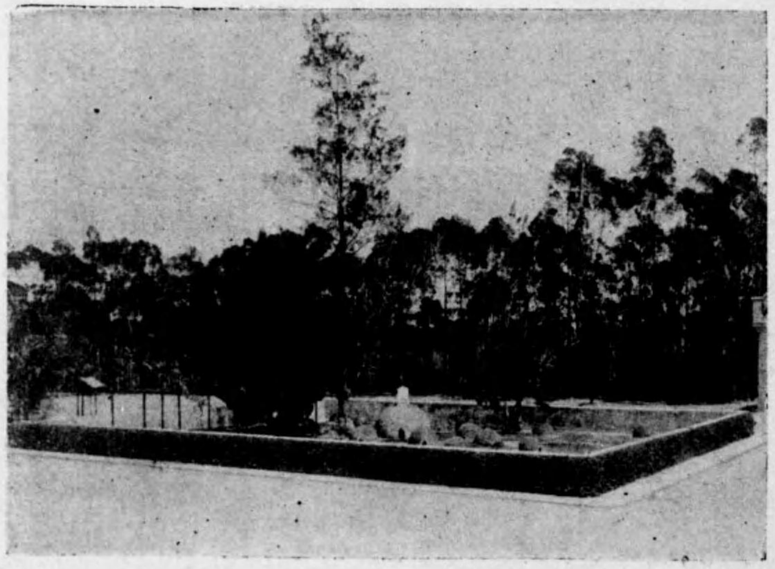
毒蛇研究室や、毒蛇の研究材料は目につく、南米で斯く盛に蛇毒を研究してゐる所はない。

――オスワルド研究所も、ブエノスの細菌學研究所も研究はしてゐるけれども――どの室も、どの室も、非常に注意して清潔を保持するやうに設備してある點は、南米第一だ。所長の趣味かも知れない。又思ひ出になつたのは、この研究所に維納の教室と同型同樣の戸棚だの、机だの、研究用具があつた事で、クラウス所長時代のものであらう。研究室に就ては著しい異色はなかつた。

本館の最下に毒蛇の窠が作つてある。草叢の諸所にコンクリートの土饅頭形の洞があつて、蛇がノロリ〳〵出入する。それを幅二米位の溝で圍繞し、その外を高さ一米位のコンクリート壁で包んである。研究者は、内に入つて、蛇鉤で頸根を釣壓へ、唾液腺を指壓して毒液を出さしめ、之を容器に受けて研究用に、又馬の免疫用にあてる。本館の横に無毒蛇の窠も作つてある。(口繪寫眞參照)。

構内の最下段の地面に陳別館がある。蛇の標本は勿論南米一である。又毒蛇の咬傷による人體被害の實物標本、蠟細工標本、近年研究しつつある蜘蛛毒に關する標本、例へば、人が腕、足を咬まれてその部分が壞疽に陷り、救ふべからざるにより切斷したもの〻實物、或はそれ等

無毒蛇飼養窟



の種々の程度、種類を異にするもの、又、それ等の實物と異らない立派な蠟細工標本等は最も興味がある。毒蜘蛛 Aranha の生きたのが飼養せられ、その唾液毒を取つて研究用に供してゐる。

隨分大きい蜘蛛がゐた。賴光の退治た土蜘蛛もかくやなどと想つた。標本としては、他に熱帶皮膚潰瘍の種々、絲狀菌病新種の實物及蠟細工標本等に就いても外國からの來觀者は眼を留めるであらう。蜘蛛を飼ふのに此處では冷血動物の體液を吸はせると云つた。日本で、吾々は自然界に於て蜘蛛が網を張つて、蠅、蜻蛉、せみなどが引掛ると、それをエギで包んでから吸付くのを見てゐる。所長は飼養してある五寸許りの毒蛇の小蛇を取よせて、蜘蛛の函に入れたがなか〳〵咬付かない。小蛇をピンセットで挾んで蜘蛛の側にすり付けても、お腹が減つてないと見えて吸はない。やがて、十分ばかりして、頸の處に喰ひ付いたらもう離さない。小蛇は尾を動かしてゐる。所長はもう死んだ、見給へ、蛇が口を開けたではないかと。その通り口が少し開いて居たが一時間は決して離さぬと云つた。蛇のほかに蛙の血も吸はせると聞いた。

毒蛇の敵に無毒蛇がゐて、それが毒蛇を呑み殺す。その活動寫眞をドレースデン博覽會で見たのである。毒蛇は敵の無毒蛇に對しては全く意氣地がなく、無毒蛇の態度は大膽不敵で、好餌御參なれと云つた有樣だ。頸部に喰付き、毒蛇が口を開けば、次には頭から呑込む。身體が追々に膨脹し、双方の身長によつて尾が殘るかなくなるかする、其處までの活動寫眞がある。見學の際、所長は實物を見

せようと、兩種の蛇を取りよせて試みたがどうしても成功しなかつた。

蛇の分類法はここの所長が權威である。又自信も甚だ厚いやうであつた。アマゾンのベレームのムゼウ・ゲエールディでの分類を話した所、所長は、あれは不完全だと云つてゐた。ムゼウ・ゲエールディのシエルモン氏から、ブタンタン研究所には此處から送つた毒蛇の標本が集められてゐると聞いてゐた。此處では、ムセウ・ゲエールディで集めたパラ州の蛇が、一九一七年にフロレンシオ・ゴーメス氏に依つて研究、鑑別せられ、百三十九匹の個體に分類して、四十六スペシイスとしてある。パラ州產の蛇を研究するには先づ之に依るのを便宜と思ふ。パラ博物館の蛇として、ブタンタン研究所要錄一九一八年に載せてある。

此研究所での、野外毒蛇採取や、樹上棲息蛇など、凡て毒蛇の習性に關する素人が見聞して面白い話が澤山あるけれども略す。

見學が終つて長官舍に歸つた。立派な二階建で、玄關の階段には熱帶植物の鉢が色々置いてある。玄關のホールも大い。右が研究室で居ながら研究出來るやうにしてある。本館迄は二町程、雪も降らず、野分けもあるまいが、夜中でも急に興味の湧き、研究のヒントを得た時には、家に付いた研究室が慾しいことがあらうと思ふに就けても、この贅澤、否、便宜を羨やましく感じた。

此處で聞いた所では、毒蛇の咬傷を受け、血清注射が間に合はぬか、或は四時間をおくれて死亡す

所長官舎

る者が、毎年聖州で約三百人、前はもつと多かつたと云ふ。又咬傷を受ける者は數千あると云ふ。血清の恩惠大なりと謂ふ可しだ。

研究所からは研究報告が出るが、尙聖州衞生局月報には研究所製造血清、ワクチン類の製造高や使用高も報告せられる。又衞生局から衞生官の一醫學士が其處に勤めてゐる。

所長官舎

所長がどう云ふ動機で毒蛇の研究に熱中沒頭したかに就いて訊いた。氏は、中學時代から蛇の動物學的研究に興味を有し、成人したらば是非研究して見たいと常に考へてゐた、醫科大學を卒業して研究に從事し、玆に至つたと云ふのである。此の研究所の濫觴は、一八九九年サント(ス港にペストが發生した爲め、血清製造の必要が起つた以來と云ふが、蛇毒研究がこの研究所

を盛ならしめた大きな一因であることは確かだ。

ペスト免疫血清製造法——それには東京で著者が職務上從事してゐる——に就いては、所長は、種種の製造法の經驗をしたが、結局ペスト菌寒天培養を加熱滅菌し、馬を靜脈注射により免疫するのが最良であることは、二十五年來の經驗であると云つた。著者も、日本でその通り大正五年來やつて來てゐると話した。

此の研究所製造細菌血清は、ペスト、實扶姪里、破傷風、赤痢、連鎖球菌、肺炎球菌、腦膜炎球菌、淋菌等で、豫防ワクチンとしては、ペストワクチン、チフス注射用ワクチン、チフス經口ワクチン、チフス赤痢混合ワクチン、淋菌ワクチン、腦膜炎菌ワクチン、連鎖球菌ワクチン、葡萄狀球菌ワクチン等あり。又、ツベルクリン、マレイン等も製造する。他に健康馬血清、乾燥血清等も製出する。

蛇毒血清は五種、ほかに蠍血清(スコルピオン)も製造する。毒蛇は月によつて採集數に變動はあるが、毎月數百を下らず、多い月は千數百匹以上にも達する。樹上蛇が鳥巢を狙ひ、或は樹上に巧にかくれて梢に止まるのを待つてゐるのを、人間が見出すのは容易でないらしいが、熟練した者は、巧く之を發見すると云ふ。林間の地上では容易に見付けて捕獲出來る。

研究所長、ヴィタール・ブラジル氏は鬢髪已に白い偉丈夫だつた。先年古宇田學士に此の研究所で會つたと云ふ。この研究所には病院はない。

從來ブータンダンと發音してゐたがブラジルへ來て、ブタンタンといふのが正しいと聽いた。

◇

備考。ブタンタン研究所の毎月免疫血清製造の爲の免疫動物注射、又免疫動物よりの血液採取等は、聖州衞生統計課月報で報告される。今その内から毒蛇、ヂフテリア、破傷風、ペスト、蜘蛛、蠍に關するもののみを拔いて、それ等の免疫血清がどの位作られるかを概觀したい。統計材料は一九二七年十一月から一九二八年九月に亘るもの、毒は各種の毒蛇のを合計した。

一、免疫馬より血液採取の頭數及分量（右ハ頭數、左ハ「リットル數」）

	十一月	十二月	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	合計
蛇毒	三頭	八	一	一七	二一	二一	二七	一四	一九			
	一五一立	四三	一	六	八三	一三三	九六	一〇	五五	一四〇	七五	七八一
ヂフテリア	二頭	六	一	三	六	一三	五	八	五	四	八	七〇
	八立	二四	五三	一五	三〇	六〇	二五	四〇	二三	一九	三八	三三五
破傷風	一〇頭	一〇	四	一	五	一〇	一一	一三	一一	一三	一八	一〇四
	四四立	四三	一九	五	二五	四八	六二	五六・五	四九	五六	八七	四九三・五
ペスト	—	—	—	二	—	三	一	—	四	—	—	一
	—	—	一	二	一五	五	—	四〇	—	—	—	九三

二、免疫注射馬頭數、右と同期に於ける毒蛇、ヂフテリヤ、ペスト、蠍及蜘蛛毒だけを摘揭す。

	十一月	十二月	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	合計
蛇毒	—	一三	三	六一	五六	六二	五六	八二	七五	六六	五四	
ヂフテリア	三三	四三	二六	三〇	二一	二七	三九	二八	三五	四〇	五六	三六九
ペスト	六	一〇	一三	九	四	六	四	四	六	—	—	六二
蠍毒	—	—	—	—	—	—	—	—	—	三	七	一〇
蜘蛛毒（免疫動物等）	—	—	—	—	—	—	二	—	六	八	一六	

右に依つて、大凡蛇毒免疫血清が最も多く要せられ、又ヂフテリア及破傷風、免疫血清が多く造られる事がわかるが、此種の記載は餘り專門的に亘るから略す。終に、この研究所は州内日本人の爲めに好意を持ち、傳染病豫防血清ワクチンの便宜を謀ると聞いた。

六、州立農事試驗所とサン・パウロ所見

珈琲店——邦醫——日本人病院の必要——移民の住居衞生——トラホーム・マラリア・寄生虫——金融機關の缺乏——投資——衞生——葡・西語

カムピナス市はサン・パウロ市から汽車で二時間の距離にある小市で、市の面積は六平方基米餘、海拔約七百米、人口十三萬。聖州では樞要の一市と聞いた。邦人の聖州を訪ふ者は、大抵此處の農事試驗所を訪問して聖州農事の參考とするらしい。著者もここを見學して二三思ひがけない日本植物を見た。

花盛りの日本蕎麥畑

總領事館の大村信夫君に案内されたが、試驗所長テオドリト・カマルゴ氏は、二ケ年間獨逸ミュンヘンに留學したさうで、獨逸語で案内說明して呉れた。構内は坦々と廣く、農園あり、丘あり、森あり、溪流あり、並樹道ありで、自動車を走らせては時々下りて栽培物を見た。試驗室で農産標本の說明も聞いたが略する。

畑を區別して肥料試驗中だと云ふ日本蕎麥が、恰も美事な花盛りで、廣々とした畑一面、莖は赤く葉は青く、小花が集つて淡雪を頂いた如く、漫に懷かしい心地がした。氣候が適順らしいから、サン・パウロの同胞諸君は、最も日本的なものの味を忘れずに暮らされると云ふもの。

リオの老フォンセーカ博士夫人が、サン・パウロの日本の柿（伯國でもやはり「カキ」と呼ぶ）

は實に美味で、大好物であると云つた。農事試驗所の果樹園で、あれが柿樹と指さゝれたが見分がつかない。枝姿が全く變じてゐるからであつた。日本の柿の枝は、手拳を丸めたやうな個所から分枝が跳り出した形であるが、此處では逆つて上に向つて、順に健康さうな枝が放散した姿である。實がよく著いて味が變らないのは何よりと云ふ。氣候が違ふので九月といふに葉はない。（ダブつた寫眞だが大體が出てゐる）

珈琲の樹。アビシニアから約百年前に移植したと云ふ珈琲樹が一列、地上五尺の處で樹幹直徑五寸位、樹の高さ一丈四五尺、日本の銀木犀よりも稍大きな花が一ぱいに咲いてゐる。芳香があるけれども木犀程强くはない。

柿の木

サン・パウロ市雜觀。ブラジル國はカフエーの本場だ。少し記して置かう。

フォンセーカ弟君と市内見物中、舊醫科大學の低い通り、ホテル・エスプ

百年の珈琲樹

ラナードの下に當る横丁の角で、同君が一寸待つて呉れと云ふ。鼻を動めかさずとも香高いアロマがわかる。著者も一緒に立寄ると、高い番臺樣の臺に立ちながら飲む。勿論砂糖だけ少し入れるが美味であつた。ブラジルの珈琲はアビシニアから移したもの、一九二八年で二百年目になるさうだ。サン・パウロ市では同年盛大な記念式典を擧げたと云ふ。バラ州に初めて植ゑて增殖し、それから南方に傳つたと云ふ。

世界の珈琲の八割、或は七割はブラジルの產出だが、伯國產は一般に良品ではない。多くは四等品位だと云ふ。南米產珈琲の一等二等所は、ヴェネジュエラであるが、近來は此の國でも良品の產出に力めてゐると聞く。

サン・パウロの邦醫。

一九二六年に日本移民は四萬二千人と云はれてゐた。邦人醫師が非常に少いので、病氣の時には困る、診て貰はずに死ぬ樣な場合が少くないと云ふ氣の毒な狀態だつた。市內には外國病院としては、獨逸病院二、葡萄牙病院一、伊太利病院一の四外國病院があるが、日本人病院は未だないといふので、多年日本人同仁會で骨折つて溜めた金で、一九二六年に市內の閑靜な地域に四千坪程の地面だけは手に入れたが、建築資金がない。早く邦人病院をとの、在留同胞の希望も、先年の珈琲霜害の爲め、日本人も大打擊を被つた創痍がまだ癒えない際でどうにもならないと聞く。訪伯の際には、邦醫で伯國醫師開業試驗を通過した人には已に七年になる高岡ドットウール、恰も試驗を通過した笹田ドットウールと、リオの渡邊學士位で、イリアベの菊地、サントスの山本、リオの齋藤、天野兩學士諸君は試驗完了に近い頃であつた。斯樣な次第で、移民の爲めに、もつと多くの邦醫を要してゐる。

備考。右の諸君は其後間もなく開業免狀を得られた。又外務省は伯國留學醫として昭和三年度以降今田、內田、千葉三君を渡航せしめ、更に四年度に二名を派遣したと云ふ。一方移民は近年三四年間に急增し、昭和四年末十萬を突破してゐる。

日本移民住居衞生。

ブラジルの事情がよく本邦に知られず、殊に醫事衞生傳染病の狀況などは一層不明のまゝ、豫備知識なくて移住し、隨分悲慘な運命に遭遇した者が、尠からずあつた事を滯在中に同胞有識者から種々聞いた。詳叙せば日も足らぬ程であるが、唯、住居衞生に就ては、本邦移民が

到る處で自らを害し、又、國人から嫌惡せらる虞が多大であるから、事情を記す必要がある。

外國人移住者は住居を成るべく高燥の位置に建てる。家の周圍は綺麗に、家の近くには農作物を植付けず、又害蟲の隱れ場所となる草叢を作らず、樹木も下を透す樣に刈込む。働いて資金を得れば、成るべく家を改造して住居を向上し、家庭生活を便利愉快にすべく努める。之は、日常住居衛生の爲めのみならず、熱帶亞熱帶に於て殊に必要であつて、マラリア、毒蛇、その他害蟲の被害豫防上緊急の事項である。

然るに、日本移民はこの點には餘り關心しない。マラリアの多くある土地でも、水溜を恐れず、或は川に近く無頓着に家を造り、窓に蚊網などは勿論張らない。家の周圍近く農作物を植付ける。產を積んでも、住居の向上に務めやうとしないと云つた狀態で、これは本國での國民教育の缺陷にも因るだらうが、氣候、風土、食物の異る外國での生活には、內地にあるよりは一層保健に注意して、折角發展の雄志の中途挫折を戒しむべきである。屢々繰返された意見のやうではあるが、事實の羅列を要約すればこの點に到らざるを得ない。

寄生蟲病、トラホームの類を癒さずに渡航するなどの不利益は云ふまでもない。サン・パウロ州の日本移民のトラホーム率六〇、七〇パーセントに達すると云ふ狀態で、在伯日本人同仁會は、トラホーム豫防講習會を催し、點眼治療の法を敎へ、用藥を作つて分配に務めてゐる。日本の眼科醫は素人

療治として反對するであらうが、誠に已むを得ない實狀にあるのである。

醫事衞生上の遺憾は多々あるが、同情すべき狀勢にあるもの獨りこの種の事ばかりには止まらない。金融機關にしても、鐵道にしても日本系のものは一つもない。リオの正金支店はその目的が違ふ。海外興業會社の便宜取扱ひも隔靴搔痒である。サントス港から一本しか出ない鐵道は、英國資本系のもので、運賃を上下して、內奧からの珈琲豆の——日本人が作くる珈琲の價格を左右すると云ふ。將來一層發展して自前の地主が多數となつた曉に想倒せば、憂慮に耐へぬものがある。日本の資本家は非常に小膽らしく、なか〳〵投資しない。一方英米、獨逸の資本家は、手段を盡してブラジル事情を調査し、見込を立て、投資をしてゐる。時に多少の損失は覺悟の上で、結局の利益を豫想してゐるのである。特に英國の投資は巨額に達してゐる。

日本人の南米投資に就いては、貨幣制度の關係、實業家の心理、信用等に關して英米獨人よりは之を諒解し闡明するに困難を感ずるであらうが、大觀して、將來最も發展の餘地ある國土は南米に他ならざる事明白であるとせば、移民の入植は別としても、投資地として將來の計をなすべきであると信ずる。況んや移民の發展は必然である。渡來二十年、基礎は既に既に完成し、更に續々移送されつつあり、その發展は確實に期待されてゐるのに、その勞苦の所產の、甘い液汁を外國資本家のみに搾取される狀勢に拱手すべきであらうか。必要な機關を設置動員して、將來の爲に、投資の方途を發見

出來ぬものか。著者の如き一介の醫生の腦底にも、この現在の事情を見聞するに及んで、それは看過すべく餘りに痛切な印象であつた。唯一つ、愉快に感じたのは、小なりとは云へ兎も角も、日本の國旗を掲げた汽船が、リオ・デ・ジヤネイロ、或はサントス港に出入するのを見かける事である。

尙一項は、ブラジル語及スペイン語に關してである。外國語に對して、日本人は一般に器用でなく習得に非常に困難すると云ふ不利はある。必要なる南米語學と知識に就ては、北米人の著した南米に關する書を讀み、又北米有識者の意見を直接に聞いて見るに、將來物資を求むべき土地は南米以外にはない、然るに、北米人の南米知識はまだまだ乏しい、南米事情に通ずる必要は强調されねばならぬと云ひ、又、大戰前、獨逸が世界商業上に斷然たる地歩を占め、南米に於ても發展の勢目醒ましかつた時代には、獨逸語の普及に深大な注意を拂つてゐた。戰後、その關係が變化して、南北米の關係が漸時緊密を加へるに伴ひ、スペイン語の奬勵が必要となつたと云つてゐる。誠に尤もと思はれる。日本人の有利に發展し得る土地が南米であるならば、學校の語學教育中に葡萄牙語、西班牙語を加へて、奬勵を心掛くべき事と思ふ。

第八章　リオ・デ・ジヤネイロよりブエノス・アイレス港までの船路

※リオ・デ・ジヤネイロよりモンテ・ヴイデオまで一〇三一浬モンテ・ヴイデオよりブエノスまで一〇四浬九月三十日午後七時半リオ出帆十月四日午前七時ブエノス着港

一、船の旅・赤毛布上陸

船上惜別——カブ・ボロニア號——伊藤氏と邂逅——**サントス**市——下水終末處理——清遊地帶——まにら丸訪問——**風呂番兼樂手**——換氣と食物——獨逸船の氣分——女文學者——モンテ・ビデオ市卽時出帆——航行中の檢査——携帶書籍の重さ——稅關——途上身體檢査の憂目

九月三十日、木曜日。午後四時獨船カブ・ボロニア號（ボーランド丸）に乘込む。代理大使、モレイラ氏夫妻、最近アンデスを越えて來られた市毛書記官と外の諸君、少し遲れて老フオンセーカ氏等が見送つて下さる。

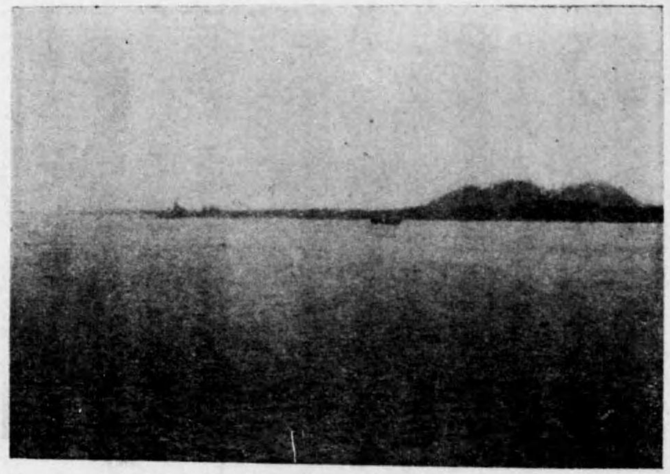
この船は三萬五千噸、新式最優秀船でリオ・ブエノスと漢堡間を航海する。船は大洋丸（元カブ・フイニイスター號）が一萬噸大きくなつただけの同構造で、大洋丸と異る所は、凡て空間が大きいこと、喫煙室の後に大きな舞踏室があること等。

七時半出帆。灣内は靄の爲め海岸通りの燈光がハツキリは見えない。サウダデ海岸通り沖でモレイラ氏の宅へ向つて左樣なら、バンダシユカール山の下、港口で皆さん左樣なら、リオ左樣なら。

八時、食卓長に談じて、伊藤博士と同卓する。伊藤氏は五十二、三歳、鬢髪半白で質素な裝、奥さんも極めて質素である。伊藤氏は、ボーイから日本人の外交官が乘つてゐると聞いて、若い參事官でもあらうか、話しが合ふまいと思つたと云つて笑はれる。東北訛が殘つてゐる。著者も若い日本人醫學士が獨逸で結婚の序に、珍らしい都リオ、ブエノス廻りと洒落て歸朝の途中だらうと思つたと笑つた。豫て、伊藤氏は、十七年前北海道から單身アルゼンチンに移住し、辛苦經營、今はアルゼンチン在留邦人中最大の農牧業主となつてゐると聞いてゐた元助教授伊藤農學博士其人であつた。

食後、上の熱帶植物の澤山ある冬の園で珈琲を喫しつゝ十時頃迄色々有益な話を聞いた。同氏は此船で募集した歐洲遊覽客四百名の同勢に加はつて、八十日間漫遊の歸途であつた。現在、亞國で時價八十萬圓乃至百萬圓位の資產があり、邦人から非常に敬慕されてゐる。子供はないが別に寂しくはない、數年の中には歸國したいと云つて居られた。その農園は小王國である。農業と牧畜とをやつて居り邦人の旅行者が訪問する。奥さんは口數の少ない眞面目な人、嘗て露西亞で獨逸留學を共にしてゐた一露友が次官をしてゐて、四日間モスコウに滯在した折、そのお蔭で得た容易に出來ない見聞を話されたりした。

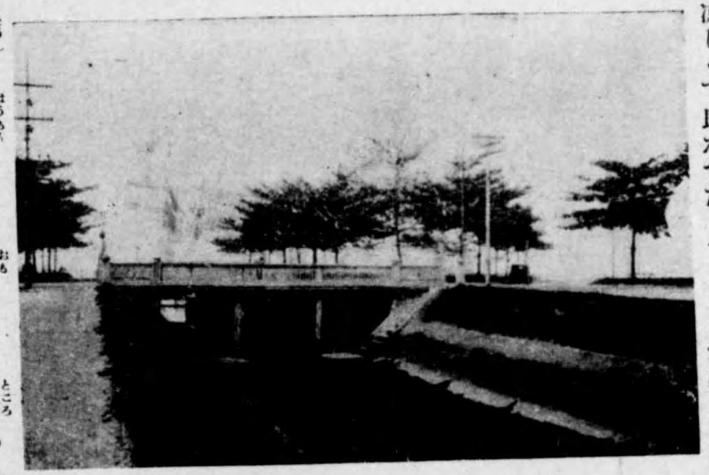
十月一日、航海第二日。朝七時、伯國サントス港に着く、なか〳〵暑く、卅五度位になつた。



サントス港岸壁より望む

此處の下水終末處置法は一種特別のもので衞生上一見の價値がある。それを見學すると共に海岸の好景を自動車で廻はる事にし、伊藤博士の御案内を得る事になり一緒に上陸ときめた。夫人はリオ碇泊中、隣室との間の戸の鍵がなかつて盜難に罹り、氣を腐らし船に殘ると云はれる。八時半上陸、伊藤氏は西班牙語は達者だが葡語はどうにかと云つた程度だ。そこで西語の分る運轉手を見付け、約一時間十五ミルース、それ以上は其比例で增してやる約束をした。海岸をドライブし、下水の閘門橋を背景に伊藤氏の寫眞を撮つた。サントスの下水管の末は大きい開渠で、所々に閘門あり、潮の滿干を利用し汚水を遠くに運び去る裝置である。歸路は市内目拔の個所を通過した。市内はまだ賞めるほどには發達してゐないが、海岸は景色も良く遊覽設備もあつて一日位遊びたい處である。甚だ

涼しくて良かつた。サントス港は島と陸との間を上つた樣な處で、生氣のある街。當時移民は先づリオに著き檢疫を受け、其船はサントスに廻り、夫から上陸してサン・パウロ州其他へ散るのである。



サントス市下水閘門

正午前港へ歸ると、丁度吾々の船の隣に邦船まにら丸が着いてゐた。伊藤氏は邦船が懷かしいと云はれる。一昨年此のまにら丸は神戸にコレラのあつた頃出帆し、サントスに着いた時サン・パウロの先に會つた衞生局長が臨檢し、移民の上陸を差止め、六百人もの檢便をし、又咽頭分泌物を取つて培養した事等を知つてゐた。伊藤博士と一緒にまにら丸を訪うたが船長も船醫も居ない。事務長と暫時話し、珈琲の御馳走になつて歸船した。今日は暑いので汗が出る。シヤツを代へて午食。客はサントスで大部下船し稍靜かになつた。十二時頃出帆。

午食夕食は伊藤氏夫妻と共にし快談した。亞國では伊藤氏を訪問しようと思つてゐた所だつたから誠に好都合だつた。サントスを出てから急に涼しく、午後六時頃こゝで冬服に著換へる。船中に獨人多く話は自由だつた。船員の獨人は英人程當りは良くない。何んと言つても英船のボーイはいゝ。紐育からベレーム迄の船デニス號が思ひ出された。併し清潔と敏捷の點は獨船の方が優れてゐる。

乘込むと同時に、ケビン・ボーイに朝七時の入浴を註文した。風呂番に通じて呉れたが翌朝風呂番を見た時、怪訝に思つた。『君はリオを出る時の樂隊の一員で、樂器を持つてゐなかつたか』と尋ねると、彼曰く『閑々に風呂番をするのだ』と。仙人じみた男で、言動も脫俗してゐた。風呂の事は氣持よくやつて呉れた。獨逸人は勉强するなあと思ふ。船室のボーイもすぐ心易くなつたが、食堂の奴はあまり氣に入らなかつた。

船の通風裝置は大洋丸と同樣、到る所に、平べつたい四角な通風筒が見える。空氣は非常に良かつた。食堂では久々に獨逸料理に有付いたが、分量は多いがこれまでの食事中一番まづい。唯酸菜と甘煮果物は珍味と思つた。コンポットは長い間食へなかつたから。ビールもよかつた。食卓樂も獨逸で聞き慣れたもので氣分が良かつた。食卓獻立は、一面は獨逸語で裏はスペイン語。

十月二日、航海第三日。昨日サントス港を出てから海も穩か、風も涼しく、氣溫も低くなつて冬服に改めた位だし、サントスの熱さに苦んだ後だから心氣爽快であり、船客も減少して船中も靜かでせ

いせいする。

此日逍遙甲板でも、喫煙室でも、冬園でも我物顔が出來た。伊藤夫人もリオの不愉快な出來事の印象を忘れられたか、食卓や、食後の快談の仲間入をする。今一人食卓の仲間が出來た。晩食には女王の如くに盛裝し、他の食卓から注視の焦點となつた短身肥滿の一セニヨリタである。伊藤さんの地續の大地主で、伯母さんの遺産を相續した婦人だと云ふ。ブエノス大學出の女文學者、時々諸國に講演に出かける、今度は暫くサン・パウロ市で講演の歸路であると。英語を話して呉れるから食卓で話が出來た。午食には出て來ない。

十月三日、日曜日。前夜來風が強く、潮流に逆航の爲め船が搖る。大船だから大した事はなかつたが、船は大變遲れてゐる。午後一時頃モンテ・ヴィデオ著の豫定が狂ふ。

午後、右舷に山脈が見え出した。四時頃、遙かにモンテ・ヴィデオを望む。荒れで其邊の船は隨分搖れてゐるがこの船は靜かだ。モンテの市は平地で市外は青々した草原に見える。六時半入港。船著場は迎へや見物で大賑ひ、一萬は居るだらう。日曜日だから見物人が多いのだと云ふ。此の市は立派だと云ふから、二三時間ドライヴ見物する筈であつたが、遲延の爲め上陸させない。船の舷門に『卽時出帆』と掲示が出た。當市はラプラタ河の左岸入口で、河を泝れば右岸のブエノスの河港に着くの

だ。船上から迎への人が下船客を抱いて肩を叩くのを見てゐる。日暮六時半頃出帆。大勢の見物人が徒歩町へ散るのが見えた。

明朝ブエノスに着くので色々支度をする。氣溫は漸時低下して攝氏十四度になつた。河に入つた爲めか船は靜かに航行するが岸は見えぬ。八時頃亞國の官吏が來て、旅券や種痘證檢査等、簡單にすんで感じがいゝ。

十月四日、月曜日。朝六時に大港口に着いた。河水が淡褐色に濁つてゐる。入浴をやめる。港口から曳船で行くので暇取つて七時半頃岸壁に横着けした。出迎人を入れぬので混雜はしない。

ブエノスでは獨逸語の便利なブラサ・ホテルに着くやうリオのホテルから支配人宛の紹介を持つてゐたが、伊藤氏の多年の定宿である獨逸人ホテルのロヤールに著く事にした。伊藤氏は荷物も多く、私人のことで上陸に暇

モンテヴィデオ港

がかゝる趣で著者は別れて下船する事になつた。船室の荷物はボーイが舷梯の下迄卸ろして呉れ、それから稅關檢査の處までは稅關荷物夫が只で持つて行つて呉れると注意された。

其通りらしいが、西班牙語が出來ないために荷物を運ぶに時間がとれた。それに書物を持ち廻るので手提が重く膝の皮を擦りむいた。やつと荷物夫を捕へて荷物を檢査室へ揃へ、錠をあける。混雜してゐる中で二通りの書面を受取り、獨逸文で指定された書き入れをして出した。役人は英獨共に話すから樂であつた。兎に角濟んで、檢査役人に書付と旅券を示すと、特別丁寧に荷物の側にやつて來、順を繰上げて呉れ、正直に鞄を開かうとするとそれには及ばぬと、六つの手提に檢査票を貼つて呉れた。全く無檢査で早く濟んだ。待つてゐる荷物夫に荷を持たせ出口の鐵門でアウトを拾ふ。ロヤール。ホテルの客引が居たので便利であつた。

ブエノス港の船舶

荷物無檢査の特典で氣をよくしたが、ものゝ三町も來た處の煉瓦造りの交番のやうな小舍の前で二人の人間に停れと命ぜられる。役人は荷物を見て下りろと言ふ。一人が胸間の眞鍮のメタルを指し、煉瓦小舍へ來いと云ふらしい。何もない室内でポケットから手帳、寫眞機等を出させ、終にチョッキの内隱まで調べようとする。旅券を見せたが、下級吏らしく、佛語で書いたのが讀めぬらしく見ようとしない。終には、著者の軀まで探らうとするので、堪忍の緒を切つて、旅券の肩書の處を指し、聲を强めて『ディプロマチク』と三口怒鳴つた。二人は顔見合せて、解つたかどうか兎に角止めた。腹の立つこと夥だしい。西班牙語の出來ない爲めの赤毛布でもあらうが、合點の行かない事だつた。

ホテルに着くと伊藤氏夫妻は已に著いて居た。

第九章　ブエノス・アイレス市の六日

一、ブエノス日記

ロヤールホテル――**伊藤博士**の案内――正金支店――公使館事務所――商船支店――舊南米建築――銀ぶら――全國富の集中――郊外ベルグラノ――新芽の頃――閑靜な住宅――大公園――薔薇と八重櫻――公使招宴――オイヒンス官邸

アマゾン調査團一行の諸君は、福原、蘆澤兩君のほか皆相前後して此處ブエノスまで來て、第二の官命で歐洲へ回遊せられた。著者はリオ滯在が長かつたので殿に此處に來た。これから先きは命令を持たない。此處から歐洲經由で歸らうか、又は他の方向を取らうか、孰れが便利有益であるかを調べた。十數日後に邦船はあるが、再度リオ、ニユ・オリンス、巴奈馬を經て七十日もかゝつて横濱へ歸るのだ。歐洲へは客船が多數あつて航海は非常に便利だが、著者には二度目だから慾が出て、曾遊の諸所を素通りし難い。

伊藤博士始め、他の邦人諸君は再度の來遊は難しからうから、見た事のない南米西海岸を見て歸つた方が有益だと勸めて呉れる。自身も、當初から、出來るものなら秘露を見度い、又巴奈馬も見度いと希望してゐた。ブエノスから智利の首府サンチアゴ迄は案外近い。地圖では横斷の幅が狹くはなつてゐるが、それでも大陸だ、汽車で三日位かゝると思はれたが、實は僅か三十八時間と十五分だ。其

間にアンデス山の山越しで、時間が掛つてゐる。こんな風だから距離は案外近いのである。西海岸の船の發着はブエノスで良くわかつた。懷中は少くとも桑港までは大丈夫、途中立往生の虞れはない。そこで愈歸路を確定して公私の手續にかゝつた。と云ふのは西海岸の旅券査證がしてないからで、ブエノスの日本公使館で其手續を取つて貰ひ、日本への發信などを煩はした。

ブエノス市は南米第一の大都會でだだつぴろく、リオとは違つて平坦地で、町の見當が著きにくい。一週間や二週間の滯在では、ブエノス通にはなれない。學術關係で見學したのは、ホンの一寸大學へ往つたのと、衞生局と其管下の細菌學研究所位で、其他は日本公使館に度々お世話をかけ、伊藤博士に惜別し、矢島大阪商船支店長、田村正金支店長を度々煩はしたりで、六日の滯在が過ぎた。幸に十七年も在亞の伊藤博士が用達の場所を案内して呉れられたのだから、そこだけへはあとで一人あるきが出來るやうになつた。

ブエノスは南緯三十四度、緯度は東京位に當たるが、冬服に夏襯衣、夏外套を着て丁度い、好季節だつた。滯在中の一二の見聞のほかは、拙い日記をそのまゝ、ブエノス情緒を記して見る。

十月四日。ロヤール・ホテルに着いて伊藤博士達に船から後の赤毛布事件を話した。そんな事はあまり聞かない、自分達はトランクや鞄の檢査を受けたが何事もなかつた、連れのセニヨリタは大變に

引掛つて容易に埒が明かないので自分達は先に失敬したと云ふ。伊藤氏は、八日の朝耕地に歸る、それまで自分の用事もあるが、都合のよい時は何處でも案内してやると親切に云つて下さる。著者は公使館、商船と正金は早く行き度いが、見學は交渉の上日を決めると云つた。未知の町は徒歩せねば見當が着かぬと云はれ一緒に出かけた。

ホテルから徒歩正金支店に往つたが、其間は下町と云はうか商業區域であつた。正金の田村支店長に會つた。伊藤氏は知己である。此處で米貨信用狀で亞貨に換へる、一米弗が約二ペソ半であつたから一ペソが日本の一圓位と思はれた。此處の正金はリオのよりはずつと大きい。邦人の行員も亞人の行員もゐる。或窓口に日本字で『本國送金係』などの札を見た。此處はレコンキスタ町八〇番地、近くに堂々たる獨逸銀行の新築が已に竣工してゐて、いさゝか羨ませた。

正金から日本公使館事務所がジエ・カジヤオ Calle Callao 町一四二二番地へ連れ立つた。此處ではLはJと發音すれば分かると教へられた。大部分徒歩し、大きい建物の說明を聞いた。ブエノス市内は舊市街が今市區改正、道路擴張の爲めに破壞されつゝある。ベレーム以來の經驗眼では、古い家は確かに非衞生的に見える。午食時間前に事務所に到着する爲に電車に乘る。折よく、代理公使その他の館員に面會し、見學の紹介や旅券を依賴し一緒にアウトでホテルに歸つた。

ホテルでは獨逸語で何でも辨ずる。料理は獨逸料理だつたが、寧ろ、ブエノス式であつて欲しいやうに思はれた。此ホテルは以前は一流であつたさうだが、獨逸の田舍都會のホテルのやうな建築と設備だ。室は食事なしで十三ペソで、湯も便所もない。手洗は全く陶器のセットで洋服戸棚もシャツ簞笥も獨逸式。リオと比較すれば高い。午食後休養してから、支店長に電話して、三時過、サン・マルチン四一八番地、ホテルから四丁位の大阪商船支店を訪ねる。入口の看板がよく目につく。二階の通りに面して若干かの事務室があり、裏の方には混入つた廊下や室がある。之は今まで經驗した舊南米式の建物らしかつた。

矢島支店長は伊藤氏とも知合である。著者は、三月同氏夫婦の赴任せらるゝ時、太洋丸で同船したのであつた。伊藤氏とは此處で別れた。支店長に日本直航歐洲廻り及南米西海岸廻りの相談をして、發著をよく調べて貰ふ事になつた。今日は夕刻のブエノス名物を案内する、それから自分の宅で日本料理の御馳走をしやうと云はれる。

紐育一別以來の話をしてゐる内に時刻が來て連れられて出る。目ぬきの通りを徒歩で一巡した。夕刻六時頃で薄暮だ。男女の往來肩摩轂擊である。しかし往來整然として衝き當る樣な事はない。婦人が綺麗に着飾てゐるのは勿論だが、男子も皆清裝してゐるので、著者は少々氣がひけた。リオのブランコ街に比すれば餘程立派である。リオでは男の方はそれほど身綺麗ではなかつたし、人種が混淆してゐるせいもあつたらう。兎に角、音に聞こえたこのブエノス・プラは綺麗だ。通りには、此の

時刻に車を通さないから大層良い。南米の巴里、ブエノスの夕は物珍らしいが、扨て、漫歩の人士が如何な身分かは風來の孤客には見當が着かない。亞國の既墾地は多く大地主の所有で、彼等はブエノスに住んでゐる。ブエノスは全國の富を集めてゐると云ふ事であるから、そんな人々でゝもあるか、或ひは下町の大銀行會社の退け時とて、家庭に歸る人達でゝもあるか。伊藤氏から注意された、ブエノス・プラに行く時は上衣の釦をかける事、人込の中に掏摸がゐるからと。

矢島支店長の住居は郊外ベルグラノ區である。市のバシフイコ汽車驛側の電車驛から十二分で着いた。先づ大森の住宅區と云つた處か、市内の空氣ではなく清々する。ベルグラノ町は新住宅區と見え、町が良く區劃され、道路は石、アスファルト敷設、街路樹は一丈乃至二丈位の高さで、新芽が出てゐて春の心地である。家は大小に拘はらず前後か横かに庭園があつて、色々の花がある。薔薇を門に作つたり又壁に這ひ上らせてゐる。

停留場から數丁で矢島君の宅に著いた。門内前庭に花卉がある。二階建の新築で、室は甚だ便利に間取されてゐる。夫人に七ヶ月振にお目にかかつた。

此邊は魚類が手に入ると見え、鮮魚の御料理で日本食を饗せられた。鑵詰の日本品も數々ある。風呂場にペンヂインを用ひるユンケル湯沸器が設備してある。瓦斯よりは便利ださうだ。浴後日本服を借り久々で寛ろいだ。ブエノスの事、ベルグラノ生活に就て夜更まで歡談して、二階の客間で安眠した。

十月五日、火曜日。起床後珈琲の御馳走になつた。閑靜で空氣が良く、大いに保養になつた。

伴はれて町を歩き、大小の邸園、色々な構造の家を見、ブエノスとベルグラノの間の大公園『二月三日公園』へ出た。素晴らしい競馬場や運動場が見える。競馬の日は丸で氣狂の樣に人が集ると云ふ。傍の薔薇園は公園の一區で薔薇研究家が植ゑたものと云ふ。立派な樹が澤山ある。大體薔薇は南米の北方では良く出來ぬらしく、ベレーム邊では花が貧弱であつた。リオでは流石に美しかつたが、サン・パウロ方面から移植されたものと思はれる。家の庭にあるのは良くなかつた。ブエノスは氣候が適する爲か實に美事だつた。就中、淡黄、白色の大輪が殊に良く、種類も澤山であつた。

西班牙人記念碑

ここに八重櫻が良く咲いて居た。八重桃もあり、山海棠が滿開で、藤も少し咲いてゐた。公園附近の大通で一九二二年、獨立百年記念祭があつた。西班牙、伊太利、獨逸人等の子孫が澤山

居るので、其節數々の記念碑を建てた。就中、西班牙人の記念像碑は偉大だ。

此記念祭には日本からも出雲、磐手、生駒の三艦を派遣した。友人今井軍醫中佐は司令部付で、當時ブエノス國立細菌研究所長をしてゐた著者の長友維納大學のルドルフ、クラウス先生を尋ね、大に歡待を受けたと聞いた。

其頃、伊藤氏の歸亞と著者の來着を祝して、代理公使から、同樣ベルグラノに在る公使館へ招待された。公使館は前後左右に庭園があり、門構へも立派で普通中流の住宅としては氣持のよい家だが、大日本の公使館としては、他國のそれと比較して小さい。大戰前の事しか知らぬが歐洲の日本公使館は先づ良いとして、リオとブエノスの夫も歐洲のと比べると貧弱の感がある。著者は矢島氏夫妻と同伴、やがて伊藤博士夫妻も來られて話が賑かになつた。伊藤夫人は勿論外國語が達者だから邦人夫人達との談話は出來るが日本語は出來ないらしい。食卓では念入の日本料理で和洋酒が出る。料理番はアルゼンチン人ださうだが、長く公使館に勤めてゐて日本料理が出來る。野菜の料理、大根の漬物などまで美味くつくる。此晩少し冷氣で、夫人方の爲めに電氣ストーヴがついてゐた。十一時頃ホテルへ歸る。

二、醫學に關する事項　醫科大學

――細菌學研究所＝公使醫學士ペレス氏――所長クラウス氏招聘――廣大なる研究所――現所長ソルデジイ博士――蛇毒血清其他の製造――ワクチン――研究所の使命

十月六日、水曜日。歸路の船の見當が着いた。道筋の旅券査證手續の爲め、再び公使館事務所に赴く。二三日はかゝる見込みだ。南米事情、殊に邦人事情に關し代理公使に尋ねた。南米に於ける日本人の地位、在留邦人事業移植民方法等に關する有益な意見を聞いて、啓發される所があつた。

一方手續中の見學にかゝらねばならぬ。少くとも醫學部と細菌學研究所は見得らるゝと思つた。公使館の齋田君は、スペイン語には堪能であるから、其配慮により度度學長フリオ・イリバルエ氏に電話交渉して貰ひ、また細菌學研究所は其所管衞生局長グレゴリオ・アラオス・アルファロ氏に電話交渉で面會を申込んだが、多忙で容易に埒が明かない。大學へは齋田君に同伴して貰つた。

醫科大學

國勢が盛んなせるでもあらう、廣大なる建物で一寸の位見學では見當がつき兼ねた。到底リオ大學の比ではないやうに感じた。衞生局長にはどうやら約束が出來、七日の午後、齋田君を煩はし定刻に訪問したがまだ來てゐないで、來否不明だと云ふが約束があるから待つ。役人はなか〳〵見識が高いらしく、受付、秘書、其他の手順を經なければならぬ。面會人も多數だつた。

やがてアルファロ氏が來たらしく、間もなく呼び入れられて事務室で立話をした。維納で亞國公使ペレス氏を知つた話やクラウス氏の話をした。すると急に自室へ伴なつてソファに着けさした。氏は一見七十近い老紳士に見える。獨逸に留學されたらしく獨逸語が達者だ。ウイルヒヨウ・ゲルハルトやノートナーゲル先生達に就いて學んだと云ふ。明治十年代か、二十年代の初めの事であらうと思つた。明朝、細菌學研究所を訪ね度いと希望すると、午前は人が出揃はぬから、午後三時に往くやうにせよと電話をかけて呉れた。老齢と見えるがなか〳〵ハキハキして居る。亞國醫界の元老で、亞國に於ける近代實驗醫學の建設に力を盡した人である。

衞生局の下に九部門あつて、其内に細菌學研究所、化學研究所、其他癩、結核等の研究所もあるけれども一々は見學するを得なかつた。

ブエノスには農學及獸醫科大學がある。農牧を主とする國柄には重要の施設である。農務省の畜産

局の役人に日本の獸醫學出身者がある事を知つてゐた。會つて獸疫の話を聞かうとブエノスで問合せたが、地方在勤のために會へなかつた。他に警察署長をした日本人もあると聞いた。

衞生局長は毎日三四時頃に一寸出て忙しい用事を形付けるさうだ。他の役人でも上の方はかう云ふ風だと云ふ。それで著者が訪問した時の有樣が了解せられた。日本公使館の武官はブエノスの上流家庭に寄寓してゐるが、如何に强健な身體でも土地の習慣には從はれぬと云ふ。夕食が九時に始り、其後色々家庭的の團欒で愉快に過し、午前三時頃に左樣ならお休みとなり、朝は十一時に起きるのださうだ。たまらないから、夜は早く失禮して、朝は皆よりは早く起きて飛出す事にしてゐると。

役人は皆資産があり、生活を樂む習慣らしい。歐羅巴の研究室でも、午前中は別の病院で臨床的の仕事をし、午後に研究室へ來る研究者が多い。南米でも同樣な事をリオで知つたが、ブエノスでの事はよく判らない。

細菌學研究所。牧畜の盛大なると同時に、獸疫の害もある。然るに、獸疫關係のみならず、傳染病方面の實驗的研究が發達してゐない。細菌學の研究を振興したいとの考に就ては、著者が維納に留學中、亞國公使で醫學士のペレッ氏が細菌學研究に興味を有し、公務の餘暇に著者のゐた血清治療學教室に來て、クラウス氏指導の下に所謂惡臭鼻細菌の研究をしたものである。それが原因となつて、ブ

エノスに新研究所設置に際し、クラウス氏を所長に聘へる交渉が起り、一九一三年九月、クラウス氏は赴任したのであつた。約十年近く在勤し、此の間、種々の研究もし、有力な門弟も守り立てたが、各方面に『ナショナリチイ』の觀念が支配するやうになつて、クラウス氏もお雇教師を御免になり、其の後伯國サン・パウロ州立ブタンタン研究所長に轉任したのであつた。

この研究所は中心からは隨分遠い市の端にあつて、快速自動車で四十分かゝつた。研究所の高い水塔は遠くから見當がつく。所長はクラウス氏が育てた人で、ソルデジィ氏と云ふ。若い上品な、溫和で親切な學者である。

建物の大きい事は、リオのオスワルド・クルース研究所を凌駕し、室數の多い事、人數の多い事も大したもので、一々紹介され挨拶するに實は弱つた。三時に往つて中途でお茶の御馳走になつてから又見巡つた。

女關の幅の廣い階段は、獨墺の『ウニヴェルジテート』の女關風である。半地下室は、動力、ワクチン製造、血清ワクチン貯藏包裝などに用ひ、上は研究室や講堂や標本室などで、間口五十間奥行十八間位ある。別に左翼に小さいけれども化學研究所が附屬してゐる。

右は本館であるが、女關の向側に馬廐舍、小動物飼養舍、生菌免疫動物舍、ペスト研究室、ペスト免疫馬廐舍などがあつて、設備の大きいには驚いた。

亞國の北方には毒蛇の被害があるので、こゝの研究所でも蛇毒免疫血清を造つてゐる。その他の免疫血清製造には、ヂフテリー、破傷風、ペスト、脾脱疽、連球菌、腦膜炎、赤痢、チフス、コレラ、流行感冒、等の免疫血清があり、又治療用の健康馬血清、牛血清などを造つてゐる。

ワクチン製造はチフス、葡萄狀球菌、連鎖球菌、痲菌、ペスト菌、大腸菌、オツエナ、肺炎、アンチトシナ（百日咳）結核、狂犬病菌等で、オツエナやアンチトシナ（患者の痰を滅菌せる）などはクラウス氏、及門下の研究が基礎となつてゐる。

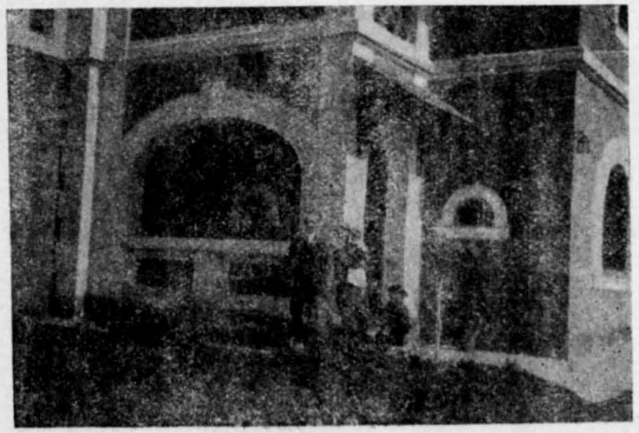
一見、堂々たる建築と設備で、亞國の爲にも、尙世界的にも立派な研究が將來に期待されるやうに感ぜられた。完成までに幾年もかゝつたと云ふが、その内部の設備は著者には一々維納での教室を想ひ起させるものであつた。戸棚から研究机、器具に至るまで悉く維納式である。クラウス氏招聘の時の衞生局長はペンナ氏であつたが、來任後、職制なども種々制定になつて、この研究所は現在公衆衞生、人及び獸畜の衞生及傳染病調査竝に其豫防及治療に對する研究がその使命である。

三、ブエノス生活と伊藤博士　ラプラタ河畔の田村氏邸——伊藤博士歸耕——お茶——物騷な河岸公園——アヴエンダ・デ・マヨ——西班牙踊——惜別の辭——田舍で病氣した時は——**農牧業**——利益一割二分確實——命名式祝宴——上流社交の一夕——**金曜會**——出發準備——**アンデス**

越——身體檢査の眞相——脅やかされる西海岸廻り

田村正金支店長（大正十五年赴任）は子供の健康の爲めに、思切つて遠くの郊外に住み、アウトで通つて居られる。伊藤博士と一緒に招待され、六日の夕、銀行から田村君の自動車で町を過ぎ、郊外ラプラタ河に沿うて走らせた。やがて、小高い、立派な邸宅の點々した一區の、川岸に近い所に新築の家が向ひ合つて列んでゐる。其の一つで、三五〇坪位の中央の三階造——一室だけが三階——である。前庭に薔薇や種々の草花を植ゑ、横にも花園があり、後方に砂場やブランコ等、それに、弓場かと思はれた田村君のゴルフ稽古場がある。自動車小屋が附屬し、養鷄小屋も十坪許りあつた。子供さん達は此邸宅内で遊んで色黑く丈夫になつたと云はれる。石井商務官からこの國の産業貿易に就て有益な話を聞いた。

田村氏邸



此晩石井商務官夫妻同席で日本料理が主であつた。これ許りは飽かないし腹具合もいゝ。南米旅行中、洋

食は肉を一人前の三分一に減じて食つて居る。それでないと胃が痛くなる。肉食は旅行中可成少量にし、ホテルやレストランでは、軟かい部分だけ食べるやうにしてゐたので、胃腸に良かつたが、日本食となれば一人前は食へた。稀に食べたにしても確かに消化が容易であつた。

伊藤清藏博士と夫人

伊藤氏は、八十日の保養の留守を小作人に委せて置いたので、歸れば一時大變忙敷い、一緒に來て農牧場を見て貰ひ度いが、こんな場合であり、又新たに手に入れた七八千町歩の好望地の經營等があり、旁々貴君も急がれるから此處でお別れにする。明八日は愈お別れだから、今夕刻から、自分の趣向に應じて貰ひたいと云はれる。

そこで七日午後五時、ホテルから三人徒歩で町の大通りへ出た。其處に一ブロックを占めた立派な百貨店がある。——伊藤氏は、之が東京の三越でせうと云はれたが、三越どころではない——とても

ゆつたりしたもので、美事な品物が多い。四階に特別の喫茶部があり、其處で一趣向、卽ち、お茶に御招待された。成程、丁度茶の時刻で、美しく著飾つた人達が夫々卓を圍んでゐる。子供をつれた家族も多く見うけた。ゆつくり茶菓の御馳走になり、それから、上階の陳列を巡覽した。亞國產の美事な毛皮、毛布など、日本の種々の上等品もある。

次に名所のストランド河岸見物に、アウトでは速過ると云ふので横丁を探して漸く馬車を一臺探して來られた。獨逸式のドロシユケと言ふ奴だ。——ブエノスには稀にこれがある——久々でドロシユケに徐々と牽かれる氣分は又格別だ。町を見物しつゝ埠頭に出た。新著の大船が横付けになつて居る。カプ・ボロニオ丸は埠頭を少し離れてゐたが可なり大きなものに見えた。車道は河岸の埠頭と遊歩道との間の廣い道であつて、遊歩道も車道も良く出來てゐる。未だ若木だが樹列が造つてあり、所所にロハ臺がある。著者のロハ臺の說明は伊藤夫人を笑はせた。一里位行くと植込みが多くなり、その間に淺草の樣に色々と興業物があり、運動設備をした處や珈琲店等もあつたが、こゝは、暮れると人稀だつた。この邊りは警察力乏しく、多少危險だと云ふ。氣味惡るがる夫人を强ひて一巡乘廻し、埠頭の廣場へ歸つた。公園らしく作つた此處は、ホールド・アップがよく出るところで、アウトや馬車なら大丈夫だが、電燈の下でも一人歩きは劍呑だといふ。

四日の朝、著者が身體檢査を受けた煉瓦小屋が所々の辻に立つて居る。忌々しいと笑つた。間もな

く亞國共和國政廳の前へ出た。堂々たる建物だが、今では他の建物と調和が惡いといふので新築說もあるといふ。政廳前の造園は Plaza de Mayo と云ふ。それから一直線に七八丁許り大通りで、アヴエニダ・デ・マヨと云ふ。中央に獨逸で所謂アンラーゲと云ふ、公園ではなく平な芝地で、植木のある所がある。政廳の七八丁向に突き當つた處に議事堂がある。其間兩側に澤山の店、料理屋、ホテル、珈琲店等があり、丁度六時半頃で珈琲店は皆滿員、道はアウトと歩行者で一杯だ。其間をドロシユケ先生が要領よく歩く。時々道止を喰ふし、後の車が馬の尻を突きさうな事もあるが、良く馴らしたもので少しも失策はない。リオでも歐洲でも見なかつた光景だ。議事堂迄行き今度は反對側を練り廻つてホテルへの橫道へ入つた。ブエノスは、此の大通りを基幹にし、町名、番地を作つてある。この大通りは河岸に直角で、河岸に平行に橫丁が出來て居る。案內が詳しいから安心出來たと云ふもの。

伊藤氏はスペイン語が獨逸語より上手らしい。夫人は、每日大勢の人間を使ふのでカステラノが巧くなつたと言はれた。しかし山形訛りがあり、山形獨逸語、山形西語だ。——著者は出雲獨逸語——コリエンテスの橫通に入ると、狹い通りに充滿した人出だ。その間を馬を巧みに御してホテルに歸着し、夕食を同卓した。

今一つの趣向は純西班牙兒の踊を見せるのだと言はれ、わざ〳〵一人で出かけて豫め切符を買つて來られた。九時から始まり一時間程、Revista と言ふ踊であつた。

伊藤氏は、愈々お別れする、この邊は送迎せぬ習慣だから、朝早く起きないでゆつくりお休みなさいと云はれた。八日間同船同宿し、色々受けた御厚情を感謝し、數年内に歸朝される時を日本で鶴首するとてお別れの握手をした。翌朝、お送りしなかつたが、すまぬ氣がして甚だ名殘惜しかつた。

伊藤氏には子供がなかつた。養子説もあつたが、孝行を強ひるのも心苦しいし、成行きに委すと言つて居られた。夫人も賢婦の讃高く、質素で、贅澤な習慣のブエノスで華麗を忌まれ、夫君と共に昔の獨逸流の服裝を改めない。邦人諸君は、伊藤氏の樣な人物がブラジルなり此國なりにせめて四五人も居つたら、吾々の肩身も廣いだらうと云ふ。サン・パウロには廿年間に數萬の邦人が來て居るが、まだ伊藤氏程の成功者は一人もない。伊藤氏が著者を種々と親切にして下さつたのも日本への執着からであつた。學問あり、經歴あつて、南米の新天地で孤軍、辛苦艱難を戰ひ拔いて成功した同胞の英雄と云ふべきであらう。

渡航者中には、成功を急ぎ忍耐力がなく轉々失敗する者が多い。一つ所で、一仕事に三年位かゝつて漸く基礎を得、五年位で見込みがつき、十年にして成功の域に達する位の目算を立てゝ働かねばならぬと云ふのが在留邦人識者の意見であるが全く同感である。耕地が澤山空いて居ても、氣候風土が變り、事情異なる土地で、唯百姓するだけでも容易でない。著者の如き場合でも、英獨語の通ずる所は良いが、他では石鹸一つ買ふにも困る。複雜な生活に關した事に至つては、新來者の困難は想像に

餘りある。結局は、よく〳〵不退轉の意志に據らねば、成功は到底覺束ない。

曾て、田舍に醫者が居らないやうであるが、病氣の際は如何されるかと訊いた。伊藤博士は、初め二三日は、妻や小作人達へは皆自分が藥をやるやうに宅に藥局を持つてゐる。しかし少し疑はしいと思ふと汽車でブエノスまで駈け付ける。先年自分に一度さう云ふ場合が有て早く來て入院した爲めに助かつたと。家畜傳染病の場合に就いては、獸醫は持つてゐない皆自分が處置するとの話であつた。

伊藤氏は、初は、農業が主で牧畜が副であつたが、今はそれを轉倒したと云ひ、尙、多年の經驗から決して損はしない、一割二分の利益は必ず擧げると語つた。

同氏の處はブエノスから汽車で八時間、鐵道驛ポリヴアールでわかる。從來の場所は驛から五里距れ、今度新に手に入れた土地は驛に近くつて、距離は二里、其處に新邸を築くから、次に來て吳れゝばそこに迎へると云はれた。夫人も日本に往き度いらしい。伊藤氏が、四五年したらば日本へ歸ると語られると、夫人が傍から、否、一二年内にですと云はれた。

ブエノス滯在中に、公使の令兒命名式が行はれた。主なる日本人が列席され、著者も招待をうけた。式場ブエノスの聖心女學院へは都合で行かれなくて、ポサダスの、外務次官エルネスト・レステジイ氏邸の披露會に列した。この人が日本で云ふ名付親になつてゐられたのである。此邊は高低のある土地で、近所に小公園もあり住宅區らしい。邸内各室に別種の御馳走の設けがしてあり、來客多勢で、赤ちやんはフアン・マリアと命名された。主な人々に紹介された。音樂あり、ダンスあり、賑やかな社交で、花のブエノスの上流社

交の一端に接する機會を得た。

金曜會。ブエノスには約二千の在留邦人がある。滯在が短かく、邦人事情を知る事も出來なかつたが、金曜會と云ふ實業方面の人々の會が毎月一回金曜日にあるさうで、矢島商船支店長が出て見よと云はれ、そこで三井、堀越等の支店の方々に會つた。尤も午食を共にして其機會に定題なしに談話する申合せといふ。

出發準備にブエノスからの歸朝路程を定めるのと手續に、意外に人の面倒を煩はして恐縮したが、兎も角、目下アンデスの雪が消え、已に九月の中旬から山鐵道が安全に通じてゐるさうで、毎週、木、日の二回、ブエノスから智利のサンチアゴに汽車が出ると知つた。

この八月にはまだ開通せぬので、西海岸からリオに赴任された市毛書記官は、ポリヴイア經由線でブエノスに來られたさうだ。迂廻でもあり、又難儀な線路である。山本邦之助君は、已に、九月中旬にブエノスからサンチアゴへ山を越して往かれたのである。

十月十日は日曜日でサンチアゴ行の汽車が出る。切符を金曜日に得て置き度いと思つたが、土曜日でないと賣らぬと云ふ。土曜日は半どんだから午前中に買はねばならぬ。商船支店の亞國人を切符買にやつて貰つた。賣場は大層混雜してゐて、力づくで買つて來たと云ふ。汽車切符、寢臺券、プルマン座席券で、切符は西比利鐵道の如く途中の大驛毎に切離すやうに帳面になつてゐる。切符が二百二

十ペソ、寢臺五ペソ、プルマンが三十ペソ、合計二百五十五亞國ペソであつた。少額の智利貨を用意した。米貨四十弗が智利貨三百二十六ペソスであつた。亞國ペソならば、同日の相場で九十七ペソスになる計算だ。

行先の國々の旅券査證も出來た。智利、秘露、巴奈馬と北米と。

ブエノス上陸の際、稅關とホテルの間で、身體檢査見たやうな目に會つたのに就いて、憤慨して當局を煩はさうかとまで考へたが、聞いて見ると、邦人が、身體に禁制品、例へばコカインなどを付けて上る疑があつて、邦船が著くと時々それをやられる。然し唯獨りの日本人で、しかも獨逸船で來たのにやるとは珍らしいと云はれた。同胞の惡戯の酬ならば仕方がないと思ひなほしはしたが、何にしても不愉快な事ではある。

西海岸廻りに就いて脅やかされた二つの挿話があつた。東海岸で邦船船長に就いて土地事情を訊いた中に、西海岸を一人で廻る時は、發著時に細心の注意が要る。又警察などは少しも賴りにならぬ、盜人も人殺も捕へられる事は稀だと云つた話。又ブエノスで半年前秘露から轉任して來た人は、土地の汽船に乘つたらば荷物を用心せよ、自分は智利ヴアルパレイソに上陸し、サンチアゴに來て、鞄を明けて見ると、服のズボンと別な服の上著が無くなつてゐて服裝に困つたと云ふ話。

著者はリオから大トランクに不用品を詰め邦船で送り返へした。ブエノス港で困つた書籍も、邦船

で東京へ送つた。しかし行先に熱帶もあり、本國に著く頃は冬の初めだし、途中見學の相手は、皆土地の官吏、醫學者達だから、自分で持てる鞄だけにしても四個は入用であつた。

十月十日、月曜日。午前九時十分レチロ・バシフイコ驛發車。翌十一日午前六時十分、亞國メンドサ驛著、乘換。七時發、アンデス越。午後六時三十五分、ロスアンデス驛着、乘換。八時四十五分發十一時三十分サンチアゴ市着。

第十章　ブエノス・アイレスより智利國首府サンチアゴまでの汽車旅

一、アンデスを越える　メンドサ行——村の人達——**大牧場平野**——葡萄園——アンデスを仰ぐ——山列車に乘換——便利な客車——沿道殺風景——アコンカグアを望む——金輸出禁止檢査——ボカ隧道——**雪の智利側**——急傾斜——山岳病——春の山村渓流——ロス・アンデス——赤幅殺到——智利の警察——暗き各驛——定刻到着の喜び

長い年月清氣の都として讀み聞きしてゐた南米最大の都會、一九一三年秋、恩師タラウス氏一家と漢堡港頭で別れて以來一入憧れたブエノスへ、かうして來ようとは想像もしてなかつた。現實來て見れば餘り大きくて方角も判然しないまゝ、六日の後には早くも出發である。幸に細菌學研究所も見たし、新に在留同胞に知己を得たのを喜び、そしてこれ等の人々とは、他日日本での再會を期待出來たから、さまでの悲哀を殘さずに去れるといふもの。

十月十日朝、早く支度して九時小前にレチロ・バシフイコ驛に行く。矢島君が態々見送に來てゐられた。

此驛は大阪驛の二倍位の大きさでもつと簡單便利な構造であつた。獨逸の中位の驛よりは大きい。寢臺車に「ドルミトリオ」と書いてある。上下二人詰で、著者の室の上床を廿七八歳位の好人物らしい士官が占めてゐた。諸君への傳言を賴み、滯在中の厚意を謝してお別れした。定刻九時十五分に發車した。

汽車は綺麗だが設備が簡單で、便所の傍には北米の汽車のやうに手洗がなくて、それが室内に付いてゐる。

餘り動搖せず良く走る、――一時間五十五基位――レールがいいに相違ない。左右は牧場で、見渡す限り山はない。唯境界の目標らしい低い柱に鐵條を三本位渡したのが、眞直ぐに目の屆く限りに走つてゐる。稀に、四間巾位の道路が通つて居る。これ亦見渡す限り眞直だ。所々に樹林の小さいのがあり、人家は、極小さい汚い土人小屋らしいのがある。白人も見えた。一時間に一度位驛に停車するが、大抵は小驛で、其の邊りには煉瓦造りの小屋もある。

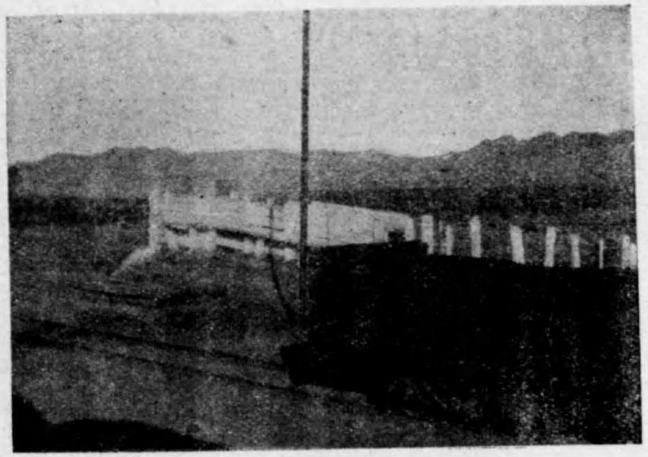
日曜日なので村の人が盛裝――兎に角身綺麗にして驛に見物に來て居る。驛の附近が其の邊の中心と見える。比較的大きい驛には百五十人位の人が、窓から出した著者の顏を珍らしさうに見て居た。男の服は不潔ではないが、カラーの代りに布を卷いてゐるのが著しく目に着いた。こんな大平野をひた走りに走り續けてゆく。牛、馬、緬羊の群が散見した。羊の群は見事だつた。馬の駈けてゐるのも

見えた。動物の居る處は自然水溜の有る所である。川も二三見えた。午後三時頃大きな湖水に來た。ラプラタ河だと軍人が云ふ。時々百姓の自動車が汽車位の大快速で遠方を走る。今日、斯樣な大平野――人間が有利に用ひてゐる――は西比利亞でも、北米でも見なかつた。

食堂は朝食と言ふが我々の午食だ。夫が十時、十一時、十二時、一時の四度に分けてある。ボーイが聞きに來る、一時のを注文し、往つて見ると滿員で一時半頃漸く間に合つた。暢氣に構へるに限る。以後食事時間を繰上る事にした。同室の士官は室へ食事を取寄せて濟ませた。前に聞いたのに、此大平野を走る時白い粉塵が入つて服が白くなるから著換たがいゝとの事だつたが、近頃雨でもあつたのか土地が濕つて見えて、カラーも左程汚れなかつた。夜分は良く寢られた。

大平野中の一驛にて

十月十一日。朝六時十分亞國アンデス山麓のメンドーサ驛に着く。此處で汽車を乘換へるので、面倒さと云ふ洒落をブエノスの邦人から聞いた。實は同じプラットホームで面倒ではない。この町は小さく縦横十丁位あらう。植樹が多い。この町の標高七百五十米位。二里程の彼方から山にかゝる。山は自然に傾斜してゐて、その斜面所々に遠く家も見える。前方の山脈の後方に遠く雪山が見える。



葡萄畑を越えてアンデス山脈を望む

荷は赤帽に預け切符の示す席へ運ばせる。プルマン切符を買つてゐるので展望車のやうな車臺に入つた。更に其の一端に一室六人位入られる家族特別室とでも言ふのがある。客席は八分通り塞つてゐた。

この列車は山嶽列車でアプト式機關車が牽引する。食堂車で珈琲パンの朝食を攝つた。午前七時發車。

此附近は葡萄園が多いので有名だ。亞智兩國は葡萄酒が安い。著者は飲まなかつたが同車の人達は晝晩共飲んで居た。メンドーサを出て一時間位で自然な

登りになり、山又山だ。汽車は一時間にやつと二十粁位走る。山の下の方三分の二は赤茶けた土や岩で、殊に岩の露出面が多く見える。下の方には少し草地があるが、大雪のため上の方は禿げ、下は雪解で樹木は生育せず、所々に水の流れる急傾斜の溪溝が上下に走つてゐる。山中所々の驛で下りて散歩する。この邊りの小屋は富士山の室の樣に石を積み、屋根は往々亞鉛のもある。人夫等は半黑色種であるが印甸らしいのも見た。亞國側には餘り好い景色はない。

智利側の一驛よりアコンカグアを望む

正午頃メンドーサから百二十粁の距離のリオ・ブランコ驛に著いた。驛の標高二一三五米、線路はメンドーサ川に沿うて昇つて來てゐる。二時半に標高二七一九米インカ橋に著いた。此處から右上方に南米第一の高峰アコンカグアを望む。

國境に近づくと或る驛から役人が二人乘つて來て荷を調べる。稅關吏ではないので英語の分る人に聞くと、亞國は金輸出を禁じてゐるから、國境内でその

檢査をするのだと云ふ。著者は旅券を見せると無檢査だつた。國境に極く近く長い隧道がある。內部の最高處標高三九九〇米、ボカ隧道と聞いた。この邊りがこの鐵道で最も高い。そしてメンドーサからこの國境まで約百八十粁ある。國境を越えて智利の稅關吏が來たが著者は同樣無檢査だつた。智利側へ入ると急傾斜である。顧みると高く雪峰が見え、好い景色で、雪が深く驛の線路外は眞白だ。日本の北國邊のやうな木造の雪除けトンネルもある。

登りの七八千尺頃に頭痛がし出した。午食のすぐ後だつた。脈が少し早い。心易くなつた人に尋ねて食堂へ行つて水を貰ひカフエアスピリンを呑んで横になつた。一萬二千七百尺の高さだから輕い山岳病にかゝつたので、頭痛のほか脈の早いのでさうと氣が付いた。耳は異狀なかつたが、連れの人は耳がつまつたと云ふ。明日迄つまつてゐるだらうと言つて居た。九月一日にリオへ來られた市毛書記官の話に、ボリヴイア・アンデス越えの時、幼兒が、一時息が止まり死んだ樣になり、女中が泣き出して困つたと云はれた。ボリヴイアのアンデス列車はもつと高い所を越える。

大した事はなかつた。雪景を賞しつゝ四時頃から急勾配を下り始め、五時半頃には大分潤けた谷へ出た。雪溪の瀧も小川も見えた。六時頃、雪山は上方遙かに去つた。頭痛も癒えた。當に空氣は春、美しい白い花が、小川の側の家々に澤山咲いてゐて、早春の柳の花を思ひ出す。小川が左右の谷川を併せて段々大きくなる。アンデスの雪の終ひでリオ・フンカールと云ふ川ださうだ。水は白色。

亞國側で所々小發電所を見たが、智利側にも發電所が所々ある。しかも智利側には鐵道電化の工事が進捗し、架線の出來た部分もある。六時卅五分、山嶽鐵道終點ロス・アンデス驛に著いた。標高八百米、アンデス國境から約七十粁、此處で山岳鐵道は終るから、乘換後ジヤイジヤイ驛でサンチアゴ行に更に乘換へなければ、その儘ヴアルパレイソに行つてしまふと聞いてゐた。來て見れば此處からサンチアゴ行の列車があつた。智利時間に訂正した八時四十五分、サンチアゴ行が出る。

列車が著くと赤帽が奪ひ合ひで、一人が鞄を一個宛持たうとする。やうやく一人にして眞鍮の番號札を渡された。同行のアルゼンチン人が來合はして訊ねたので、オテル・スール・アメリカノは英語が分る、其處で食事して待つが良いと聞いて來たから、ホテルまで、荷物を運ばせようとしてゐると答へた。彼氏は、荷物は列車中に運ばせて、赤帽に番させて置いた方が良い、自分は亞國人だが智利の方が亞國よりも警官の取締は嚴重だから赤帽は確かだと言つた。忠告に從づて荷物を一緒にサンチアゴ行の車に入れ、その赤帽を番に付けホテルへ同伴した。ホテル迄二丁位。子供が驛前から縋り付いて來る。何かさせて呉れと言ふのださうだ。二十センタボス（五錢）呉れてホテル迄大事な手提を一個持たせて案內させた。

赤帽はきちんと番をして居たので、約束の五ペソに一ペソ（廿六錢）增してやつた。間もなく發車、新乘客で滿員である。若い人達が著者に頻りと話しかけるが分らない。その都度彼氏が通譯して呉

れる。この列車は少々運轉が亂暴で動搖する。一時間許りするとLlai Llai驛（ヤイヤイと言つてもいゝ）に着いた。乘換と聞いてたが、停車したゞけでサンチアゴへ直行する。ヴァルバレイソ行の車臺は此處で分れて出るのだつた。稀に誤つてヴァルバレイソに直行する人があるさうだ。西語の出來ぬ旅客は困る。サンチアゴに着いてからの話に、曾つて邦人が單獨でロス・アンデス驛に下り、巡査に同行を命ぜられ、英語が通じないので馬車で警察に行き、警部らしいのに調べられた。兎に角して又馬車に乘せて驛に返されサンチアゴ行には間に合つたさうだが、當時日本人の犯罪者を捜索中であつたから、その嫌疑であつたらうと。六時半頃日は沒したが、電力の乏しい爲めか、驛々町々も暗かつた。十一時卅五分、サンチアゴ驛に着いた。

こゝでも赤帽の競爭だ。降車客も多い。彼氏は不景氣のせゐだと云ふ。窓から荷を出して降りる。ブエノスの公使館から電報を打つておくと云はれてゐたから、混雜の中を見渡した。暫時して人込の中に日本人紳士を發見して挨拶したら、公使御自身だつた。赤帽について驛前の公使のアウトへ運轉手に荷を積ませ、公使は同行したといふ高田君を探しに驛内に入られた。やがて若い背の高い高田君も同乘してサボイホテルに着き公使は歸られた。高田君の西語は達者なもので、ホテルの室まで案内された。室は大きく、浴室はあるが便所はない、便所は外の廊下に共同に設けてある。山岳病のため夕食を控へたので腹が空いた。近所の珈琲店へ伴つて貰ひトーストとお茶を攝る。一時に就寢。

第三篇 西海岸の巻

第十一章　サンチアゴ市の四日

一、西海岸の桃源境を見る　嬉しい赤帽――住居と聞取――サンタ・ルシア城址――サン・クリストバール――アンデス峯――**日本人園丁**――コンドル鷲の象徴――國立博物館――フォラステル公園――智秘戰爭分捕品――日本美術

サンチアゴ市は、豫て氣候のよい（海拔五二〇米）綺麗な都で、住民は所謂智利氣質であつて、なかなか良い所があると聞いてゐた。智利氣質に就いては、僅かの滯在で泌々とは接しなかつたが、ロス・アンデス驛で亞國人からきいた智利警察の取締や、赤帽の態度等を思ひ合されて著者にも印象が良かつた。二人の赤帽が、吾々が歸つた際にも、車内の座席に腰かけず、鞄の側に蹲つてゐた事なども相當の曰があるであらうと面白く思はれた。

翌朝、目覺めると氣候は日本の五月頃のやうだ。氣溫、氣濕の工合が誠に心地いゝ。西海岸を廻る目的は祕露のオロヤ熱と、日本植民發達の狀況とを見度いのであつたが、此處の醫事衞生も見て行き度い。

早速公使を訪ね、大體の滯在プログラムも出來た。公使は西班牙語の達者な高田君に配慮するやう

頼んで下された。

日本公使館

公使館は鐵柵門内に前庭を控へた高い二階建である。遙々安著して金の御紋章が輝いてゐるのを拜して感銘した。こゝは靜かな町であつて、本館に公使と夫人と二令孃が住んで居られる。ホールや間取りが公式用にも良く出來て居る。裏に又別の建物があり、事務所になつて居る。裏の庭園には今を盛りと藤が咲いてゐた。見た所リオやブエノスの日本公使館よりは設計がいい樣だ。

外國人の書いた書物に、サンチアゴ邊では、長男が嫁を貰つても、歐米の如く別居はせず、同邸内に都合よく住まひ得るように家を設計する。この習慣はまだ殘つてゐる、尤も、富裕な家族の事であると記してあつた。

こんな家かも知れない。此日は祭日で官廳、銀行、會社等も休みだ。十三日のグレース線の一船に間に合ふつもりで來たが、切符も買へない。無理に急ぐのもと考へ、十六日の英船に乗る事に定めた。高田君と

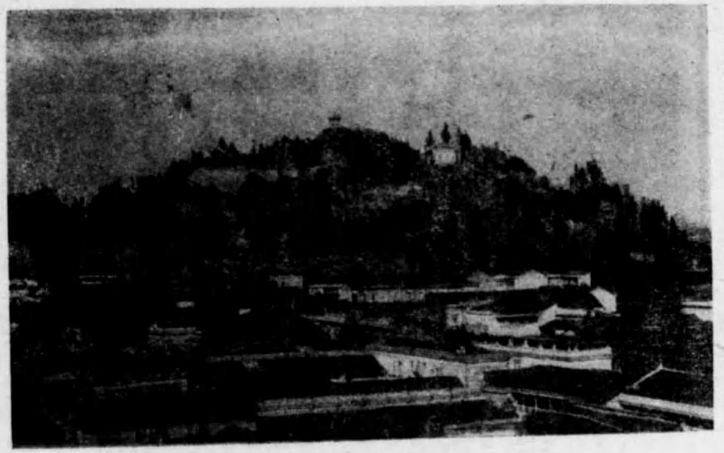
一緒に午餐を御馳走になり、午後、その案内で市内見物をした。

公使令孃の祭服

サンチアゴの東北方一里半も行けばアンデス支脈に突當る。かうした山間の廣地に出來た市であつて要害も堅固である。武陵の桃源ともいつた所在か、蜀の都もこんな土地であつたらうと思ふ。だが歐人の開いた都會だけあつて相當の設備が出來てゐる。現在、町の中心地はアウトが多く、横切るのに危險である。劇場も、活動寫眞も繁昌してゐる。立派な家も多く、美人も多い。目立つ大建築物は議事堂や政廳だが歐米に比すれば小さい。

季候は今、春の半ば過ぎださうで、風軟かく陽は暑からず、寒からず、雪を頂いた遠山脈が市を擁してゐるにも拘はらず山風の冷さを感じない。滯在中雨は降らなかつた。花はあらゆる種類があり市内到る處の家の庭に咲競つてゐる。殊に蘭の花が羨し

い。公使のお話に、或日本人が菊を作つて初め大に儲けた。他の日本人が又やり出して競爭となり、終には二束三文に落ちて土地の人も最早珍重せぬやうになつた、しかし過般公使館に客をして菊を飾つた時、米國公使は大いに賞讃し、北米では四五十弗の價があると云はれたさうである。



サンタルシアアシルタン城趾(背後に山脈あり)

市の中央にサンタ・ルシアと云ふ名跡がある。高さ二百尺位の巖丘に、昔西班牙人が此地を占領し、丘を要砦に造り下にサンチアゴ市を建設し、この城でこの市を防禦してゐたものと云ふ。後に一度墓地に使はれ、更に又改めて之を公園に造り變へたと云ふ事である。伊豫の松山城はも少し高いが一見それを思ひ出す。或はまた笠置山の頂上あたりの有樣を回想させる。狹い崎嶇羊腸たる急阪を登るので、天然の崖のほかに、石垣の崖壁もあり所々に岩塊あり、堂あり、像あり、岩屋らしいものがあ

り、又小園に花卉があり蔓が造門や壁に纏著する。旅人は是非一度は登つて見るべき名所である。頂上からは昔の市區の造營、現在の名ある建物、公園、動物園、競馬場などの位置がわかる、東の空遠く彼方には雪を戴いたアンデス連峰が淡紫の空色に浮んでゐる。嘗て訪ねた南墺グラーツの中央にある城砦や、南獨ニュルンベルグの城砦に天然の地形はよく似てゐるが、それ等はサンチアゴ程に技巧が凝してない。加之、空氣の色と、アンデスの雪峰とが絶妙の背景をなしてゐるし、大氣の感觸の何とも云へぬ爽やかさは斷然此處が最も秀でてゐる。文字通り陶然たる佳境である。夜分にはイルミネーションがつく。

サンタルシアアシルタン城趾公園

他の名所、サン・クリトバールに登つた。之は市端にあるが、アンデス支脈からの續きの山があつて、ケーブルカーで登る。頂上に大石像があり、其の邊は公園風に造られてゐる。サンタ・ルシアよりは遙かに高いから眺

望は一層際い。殊に後方遙かなるアンデスの連嶂の雪景がいい。嬉しい事に、此處に屋根と柱の造りが全然日本家屋さながらのレストランがある。珈琲、ビール、ワイン、何でもある。遊覽客數組がダンスを樂んでゐた。此處で、サンチアゴ全市を一目に見下しながら一卓を占めて歡談した。

サンクリストバル山上のレストラン

クジノ公園は日比谷の三倍位の廣さで、そこに日本人の園丁を雇つて日本花を造つてゐる。首都の公園として立派なものである。競馬場は南米一般に力を入れてゐるが、此處のもなか〳〵大きい。動物園には日本人には珍らしい動物がゐる。就中コンドル鷲は、その頭の飾が特異で甚だ勇ましく、翼を延ばすと實に大きい。智利國民のエムブレムとした所以が頷かれる。

博物館は一巡見ただけである。智利の動植鑛物、人類學考古學に關する陳列品、其内人骨やミイラが澤山あつた。此處で見るものは、後で祕露の里馬市で見るものと大同少異に思はれるから略す。

美術館は、サンタ・ルシア丘の下で、前に小綺麗なフォラステル庭園を控へ、建物との對照が誠に美觀である。豐富な美術品が所狹きまで陳列されてゐる。本國の西班牙から持參した古い繪畫、工藝品、武具、彫像が澤山ある。日本の美術工藝品、甲冑、槍、刀劍類もあつた。最も感興を惹いたのは、一八八一年一月、智利軍が里馬市を攻落した時の分捕品の澤山の陳列であつた。祕露人の思惑も如何とは思はれたが。

フォラステル庭園

兎に角所謂南米のA・B・C國の一ッの首府ではあるが、アルゼンチン及ブラジルに比すれば、國は小さく、人口も尠く、對照は無理と思ふが首都としての體裁を整備してゐるには感じ入つた。

二、衞生事情　衞生社會省＝顧問ロング氏

1結核と小兒死亡——出生と死亡——傳染病死

2 衞生試驗所＝細菌學研究所　**3 醫科大學**　**4 病院**＝サン・ヴイセンテ・デ・パウル病院——小兒一般病院——救護所

衞生社會省。智利は一九二五年初めてこの省を置いた。公使の紹介で、高田君に伴はれて之を訪ふた。次官の紹介で、この省の顧問をしてゐる北米公衆衞生勤務のドクター・ロング氏に引合せて貰つた。ロング氏は三階の廣い美室を與へられ、優遇されてゐるやうに見受けた。氏は著者の友人マレー氏と親しく、又華府のエルンスト氏とも親しく、兩氏の消息を傳へたら喜んだ。著者の爲めに行先のリマ及巴奈馬へも紹介をしてくれた。智利へ來て一年、結核と小兒死亡が多くて困まる、と云つて金はない、結核に對しては、先づ一般に住居の衞生を改良すべく國民教育の宣傳中である、又小兒死亡に對しては、榮養を良くする事から始め、いゝ牛乳を與へる方法を講じつゝあると語つた。

衞生施設に關する省の印刷物を少し貰つたが、餘り多くは用意してゐないらしい。この國は面積七十五萬平方粁に（日本の二倍大）、一九二五年の報告で人口三百九十四萬七千餘人しかない。一平方粁に五人二分と云ふ。毎年の出生は十五萬位、死亡は四萬人位である。千に就き四〇で出生率は非常に多い。——五十人位の地方もある——死亡も亦多く、最も多い地方は人口千人に對し四十一人と云ふ甚だしいのがある。小兒死亡の多數なのが目につく。死亡原因中、肺炎、呼吸器結核、流行性感冒

腸炎及下痢、小兒痙攣、心臟病、腦膜炎（單純）、百日咳、腸チフスである。北方の暖い山間地方に於ては發疹チフス、再歸熱病があると云ふ。一歳未滿の乳兒、竝に一歳以上九歳までの小兒死亡原因は、百日咳及麻疹が主なるものである。ヂフテリアは比較的少ないが赤痢死亡は相當數に上る。一般に傳染病性の死亡が著しく多く、一ケ年に二萬四千位、全死亡の過半である。地方住民の衞生狀態の低い事が窺はれる。

ドクター・ロング氏は北米育ちの南米醫事衞生通であるが、氏に、此處の執務上、北米と習慣が違ふ爲めに困惑しないかと訊いた。氏は、不自由だつたが、自分が來てから少し宛は改良してゐると答へた。氏が約束時刻に英吉利時間、南米時間とある、人と約束する時にそれを良く聞いておくと云つたので、二人で笑合つた。夫と別であるが、智利では汽車は午前午後でなく、一日廿四時間としてゐるけれども、又在來時間が行はれてゐる。

衞生試驗所及細菌研究所。ロング氏は衞生省附屬の此二つを見るやうに手續して呉れた。細菌研究所は自分の考では六ケ月前に開設したものである、まだ初歩だと云つてゐた。兩方共衞生省の裏横にある。衞生試驗所の方は元からあるさうだが、牛乳や水の試驗をしてゐるのを見た。設備や仕事は簡單なものばかり、國立の試驗所とは思はれぬ。細菌の方は、主任マメルトー・カディースと云ふ醫科大學の細菌學教授であつたが、ロング氏の云ふ如く研究所が始まつたばかりで、何も完成されたもの

はない。赤痢菌種にどんな種類があるかを問ふたら、まだ血清を造らないから凝集反應の分類をやつた事がないと云ひ、序に乞はれるまゝ、實驗の方法を話すと筆記した。しかし、理論は良く知つてゐた。著者には不思議に感じられたが、恰も明治二十年代の吾國の程度である。

醫科大學。 此處へはコロムビア、ボリヴィア、エクアドール等から留學に來るさうで、智利では自慢の大學ださうだ。エスクエラだけれども大學と云つてゐる。外廓は飾柱の多い西班牙式建物で、内庭に面する廊下にも柱が竝んでゐる。胎生學及解剖學教授、ベナヴエンタ氏の講義中であつたが、講堂には學生が四五十人ゐた。氏から學生に紹介され、席を與へられて、暫時傍聽した。英獨共に話した。すぐ傍の研究室に案内されたが、戸棚が三つ、一つの戸棚は講義用の模型、次の戸棚には人體内臓の貯藏したのが少數あつた。今一つの戸棚には研究用に供してゐるのらしい臓器組織を見受けた。その室で一人の助手が組織切片を顯微鏡で見てゐた。次に解剖及組織の實習室を示された。明るい綺麗な室で、三十人位の實習が出來る大さである。隅の方に解剖演習中の二屍體が出してあつた。あとで聞くに、博識の人望ある教授が二三あり、理論の講義が主で、實習實驗はあまりやらない醫學校らしい。

病院。 醫學校に利用されてる病院を見度いと申出て、オスピタール・クリニコ・サン・ヴイセンタ・デ・バウルと云ふ醫學校に近い病院を見た。患者は男女區別してあるが、大人ばかり收容する一般病院で、各專門が備はつてゐる。一八七二年に開院したもので、可なり大きいが、ベレームの病院に比すれば設備は大に劣つてゐた。

小兒科病院 ロベルトー・デル・リオ病院と云ふ。院長はスージィと云つた。小兒一般病院で、病床數も可なり澤山あり、小兒外科、眼科、皮膚科部門等備つてゐる。外來患者も多い。此處は能く整頓し、活動してゐる。參觀の折、丁度アメーバ赤痢患者がゐて便の檢鏡中をも見せて呉れた。細菌赤痢は臨床診斷できめ、血清診斷はまだ行はぬと云つてゐた。廊下の諸處に羊齒類の鉢を飾つてゐたのは趣味があつた。

救護所。 市内に於ける事故に對する救護設備をした臨時病院と云つたやうな所である。負傷者が入院してゐた。負傷の手當、又は外科的手術の室の設備が出來てゐる。參觀中に救護車が出動した。サンチアゴの賑かな通りでは、自動車が多く、横斷に危險な場所が少くない。此處と小兒病院とはよく活動してゐることが認められる。

三、智利氣質など

獨逸語の達者な醫者——日本人は何故移住せざるや——遲れた研究——

智利人氣質——珈琲店——婦人のかつぎ——美人車掌——美味珍果——智・秘國交

サンチアゴ見學中、何處でも醫者がよく獨逸語を話す、著者が、貴君の獨逸語は外國人の獨逸語ではないと云ふと、祖父或は親が獨逸から來た者だと名乘る。そして本國の獨逸人よりは慇懃、丁寧で日本人に好感を示してゐる事が明かである。何故日本人は智利に移住せぬか、吾々は日本人に同情を持つてゐると云つた醫者もあつた。もつと話して呉れと云つた人もあつた、滯在が短いのでゆつくり出來なかつたのを殘念に思ふ。

見學の後、公使に所感を話すと、公使は、其通り、此處は二三十年はおくれてゐると云はれた。南方には未開墾の土地が澤山あつて、日本移民に最も適當な地域がある。獨逸人は數十年前に南方に移住し、良く開拓した。サンチアゴから汽車で百里南に行くとコンセプシオンと云ふ都會がある——海拔九米メートル人口六萬四千——その邊が獨逸人の開いた地であると云ふ。

智利人は南米で一番武士らしい心情を持つてゐると聞いてゐた。此處で其體驗は出來なかつたけれども、在留同胞有識者の說では、男女共、他に比してしつかりした所がある、殊に女は周圍の國に比すれば氣風がしつかりしてゐて、主婦として勝れてゐると云ふ。

ダンスや音樂は、南米諸國一般に人の好む所で、此處も日曜享樂としてそれが盛んであるさうだ。

到着當夜寄つた珈琲店を、其後ホテルの出入序に時々訪ふた。支那式を加味した日本間に赤い欄干支那提灯などを配し、大小の室が數多あつて、茶の時刻には綺麗に裝つた客が滿員である。

一度尾見書記官に演劇に誘はれたが見學に疲れたから一等の活動を所望した。東京でもまだ見ない立派な活動館であつた。

最も失望した一事は、市街で婦人が黑布を被つて半顏を蔽うてゐる風俗を見たいと思つてゐたのに近年は其風俗が廢れて、少なくなつたさうだ。しかし電車の美人車掌は尙ほ見られた。

公使館で度々お茶や御飯の寵招を蒙つたが、お壽し、日本料理の材料、魚類、蔬菜の種類は豐富である。一夕木崎大尉と共に晩餐に呼ばれした時、鮮魚の刺身が鯛のやうであつた。コルヴィナと云ふ魚だそうで、鯛よりも美味であつた。智利には葡萄酒の良く出來る地方があつてワインは西海岸の名產である。智利料理でパイヤと云ふのがある。生きた大きさ一尺二三寸の伊勢海老、直徑二三寸位ある生雲丹の料理が出來る。雲丹は內臟を出してそれにレモン酢をかけて喰べる。珍味である。その入口に鬚を動かしてる海老が列べてあつた。珍果チリモヨは外被暗灰色、大きいのは乳兒頭大、味は西洋梨の如く香は甜瓜のやう、大きいのは邦貨二圓位で高い。獨逸人の料理屋へ一度午食に行つた。サンチアゴのホテルはサヴオイとロヤールの二つが同じやうに良いと聞いたが、サヴオイではパンが固くて困つた。ベレームを除く東海岸や諸都市に比すれば宿泊料は安い。

智利と祕露とは國交復舊せず、若し此處で祕露入國の旅券査證を求めるならば、ボリヴィア國公使

館へ賴まねばならぬ。十月十三日の米船はキャッチ出來なかつた。十二日一日ではとても見學は出來ないし、しかも其日が祭日であつて、どうにもならなかつた。が、見物はよく出來て十六日の英船に乘る事になつた。前者はグレース社、後者は太平洋汽船會社で、その店はホテル・サヴォイの近くにあり、米貨で切符を賣つてくれた。ヴァルパレイソから祕露カイヤオ港まで、普通一等一人室八十五弗。リオからカイヤオまでの道案内を山崎直方博士の「西洋又南洋」に據つたのであるが、サンチアゴからヴァルパレイソ行の汽車は五時間かゝる積でゐた所が、毎日二回朝八時夕五時の急行と直通があつて、三時間で達すると知り、出發間際の二時間を大に利用出來た。汽車賃五六・一〇智利ペソ。

四、ヴァルパレイソまでの汽車　春風和煦——斜陽をうけつゝ——絶景の沿道——鄕愁を忘る——ジャイジャイ驛——ローヤル・ホテル——悲話

四泊の滯在を最も愉快に送つて、しかも三月の雪降る日に旅立つて日本の春に會はなかつたのが、計らずも此處で春風和煦の日を迎へて嬉しかつた。十五日午後五時、マポヨウ驛を出發した。公使夫人から變り種鷄頭花の實を贈られ、公使、書記官、高田君等のお見送を辱うした。

西日を受けつゝ北に向つて走る。東の方アンデス山脈の上方に赤紫色の靄が棚引き、その上に雪峯が顯はれてゐる。沿線は丘隆起伏、その間に數多くの清らかな谿川が流れ、低い三笠山の形をした芝

草の小山があり、蒲公英や名の知れぬ草花が咲いてゐる、小松に似た恰好のいゝ樹、珍らしい一丈位の樹で白花を一パイ付けたのがあり、彼處此處に村落の家、小牧場が交錯してゐる。緬羊や馬を見た。誠に平和な樂園の國に、遊子も暫し鄕愁を忘れ得たことであつた。

來着の際は日沒後で全く暗く、かうした景色とは思ひがけなかつた。一時間後ジャイジャイ驛に著く。東の空に、仰げばアンデスは濃紫の靄に包まれ、雪峯幽かに白く淡く影の如くである。この驛から汽車は眞西に向ひ、線路は下勾配らしい。

ジャイジャイは小驛で、智利國の人口五千以上の都市表には揭げてない。ロス・アンゼルス驛は人口九千である。

六時半に日沒。八時、ヴァルパレイソ驛著。下車せずに窓から顏を出して居よと注意されてゐた。著車すると赤帽が又多勢押かけて來たが、窓から顏を出してゐると植村（太平洋貿易會社）戸田（清水商店）の兩君が見えた。すぐ近くのロヤール・ホテルへ案内せられた。サンチアゴのサヴォイ・ホテルと同系のものといふ。北米式のホテルで浴室付である。此處に多いチブスに就て、或る日本商館の若い社員が、遙々伴つた新婚の妻君を遺して忽然と逝かれたといふ新らしい悲話をきいた。客舍の一夕話として聞き捨て難く、涙を手向けた。

第十二章　ヴアルパレイソより祕露カイヤオまでの船旅

※航程七日＝一五二九浬

一、蒼黑い海と樹のない山　舊式英船――**寒流肌寒し**――アントフアガスタ――船泥棒――メイジヨネス――樹のない山と町――硝石積込――英船員と西語――食卓挿話――イキケ――アリカ港今昔――森――山脈――月明**フンボルト流**に乘つて――モエンド――**棉積**――博物館標本――買損つた**狐の皮**――南半球の夜――海驢の群――ピスコ――明日はカイヤオ

十月十六日、土曜、航海第一日。夜に入つてホテルに着いたため、町の様子は分からないが、ホテルの前は賑かな狹い通りであつた。港は見えなかつた。今日十一時出帆の筈だから朝十時に乘込むべく支度する。埠頭は近い。荷物を世話して貰ひ船に送り二人で船まで歩いた。埠頭近く綺麗な公園があつた。船室に入つて荷物を整理し、甲板に出て港を望む。アンデス海岸山脈の傾斜面に作られた自然の大港で、船も澤山淀泊して港の慇盛が窺はれた。此處は南緯三十三度二分、サンチアゴと略同じ智利第二（人口二十萬人）の市である。オルテガ丸は八千噸、舊式で稍デニース丸に似る。設備は良くはないが、船員や給仕は皆英人で感じよく、七日の船旅を托するに不足はない。カイヤオ港まで英米船のほかに智利船、祕露船があるが、船の風紀が惡いと云ふ噂で避けた。

十一時出帆の筈がおくれて午後一時に拔錨する。右舷に近く山脈を見つゝ北上する。智利の海岸は木もなく草もなく、山は灰褐色。雨はない。硝石の產地としては世界周知で、船は港々で之を積込む。同船の客は此の地方の人が多く、風采は立派でない。英米人少々。旅行記を書き出したが此船は書留郵便を引受けず船に托されぬ。此の邊は南極から來る寒流の爲め未だ寒い。薄い下襯衣に冬服では少し足らない。海上全日平穩、暮近くの海水はどす黑く、氣味惡かつた。

十七日、航海第二日。氣も落ち着いた。依然平穩。唯、右舷に不毛の山脈を見る。兎角外國船に乘つた初日は體が疲れ、氣が落つかぬやうに思ふ。晩、上甲板に皎々と電燈を點じ蓄音機でダンス。

十八日、航海第三日。朝六時半、アントフアガスタ港に着いた。灰褐色の山脈の下に一里半許りの町が横たはる。町の奥は七八丁上り斜面になつてゐて、草木はない。僅かに二三ケ所だけ庭木が見えたが山は皆禿てゐる。港はなか〳〵大きく、船も多く入港してゐた。この船では少しばかりの船客が上下しただけであつた。此の町の東方の山に大きな字型が澤山印してある。京都の東山をちらと思ひ出したが周圍全く乾燥無趣。南回歸線に近く、伯國のリオと略ほ同緯度だ。港の斜面にボリヴィア國チチカカ湖邊のラパスに通ずる汽車が走つてゐる。全日硝石袋を積んで居る。此奥の平地を掘れば出

るさうだ。此の邊の港では船へ盗棒がやつて來るとブエノスの邦人から注意されてゐた。碇泊中、船員は舷門を厳戒して居たが、やはり仲仕人夫の中に紛れ込んでやつて來たものと見え、無電室の役人が上着や其他を盗まれたさうだ。晩になつて荷役がすんで、十時に出帆、故郷の二男の誕生日で赤葡萄酒の小瓶を祝ふ。

十九日、航海第四日。朝六時半、メイヨネス港着、奥深く灣入してゐる良港である。山脈は例の如く灰褐色。町は平地、草木を發見し得ない。平地の奥は相當深く、此の港の用水は百哩の山奥から、アンデスの雪解けをパイプで引いてゐるさうだ。船は岸から三町位沖に泊つてゐるから、うるさくなくて良い。今日も全日硝石袋を積む。船室のボーイが鍵を呉れてゐるので、室に錠を下し、喫煙室、社交室で讀み書きをして日を暮らす。夕七時食事頃出帆。一つの大きな

アントフアガスタ港

船に行き合つて信號をしてゐた。

南米西海岸は船の往來少く、海水は深黑で、山も町も草木なく荒涼たる景色だ。食卓で英語を話す人もあるが、著者の向側は、四十五六の紳士だつたが、英語が出來ない。英人は外國で商賣して居ながら其處の語を話さない。食卓ボーイの中たつた一人、少しばかり西語がわかるらしかつたが他のテーブル卓だつた。向側の紳士は食事を誂へるのに無茶苦茶だ。嫌ひの物を知らずに取つてやめたり、初めにチーズを註文し中途でソップを取つたり。彼氏は遂に著者の誂へた物を指示して註文する。お助したいが話が出來ぬ。ボーイもボーイだ。リオ・ブエノス間の獨逸船ボーイが西語を話せたのと大に違つてゐる。

船室ボーイに、必要な西語を何故話さぬかと訊ねると、彼曰く、將來の國際語は英語と西語とに歸著すると。この氣焔は少々矛盾らしい。親切なボーイではあつたが、上船の夕、酒は飲まぬ鑛泉をと註文すると一升瓶位のを出して呉れた。鑛泉なら一度毎に呑むだけのものと思つてゐたのに、こんな大きいのは初めてだ。それを毎晩出す、半分ばかりは我慢して飲んだが不味くてたまらぬ。しかも冷した事はなく、又出す。英人の物を無駄にしない事には感心したが、古くなつては危ないと考へ、四日目には斷つた。食卓の水も冷水ではない。全部英人で規律良く、サーヴィスも整然たること紐育ベレーム間と同じやうであつた。食事の量は少く、材料も上等でないらしいが、料理は誠に良かつた。

英船はしまり屋だが事務的には良い。

廿日、航海第五日。朝六時、イキケ港着。九時珍らしくも早く出帆したが、この港は智利で有名な港だ。依然禿げ山のみ。汽船は何隻も港口に入つて居た。朝湯に入り珈琲を飲み着衣中、戸を叩く者がある。開けたら一人の男が居て何か言つた。人夫ではなく下船客の世話をする者らしいが、この室は態々來なければならぬ横丁の奥だ。どうも怪しい。一寸失敬しようと來た所に人間が居合はせたので失敗したらしい。ボーイも、さうだらうと云つてゐた。此港で日本貨物船を見たとボーイが云つたので直く出て見たが見えなかつた。午食時は食卓が寂しくなつた。今朝早く一等客が上陸したらしい。夕方アリカ港に着くさうだ。

海岸を右舷に只管北上する。四時頃、海岸の相貌が變つて來た。灰褐色の一木も止めない岩と黒土の山ばかりだつたのが、岩石らしいのが漸次海岸に並んで、岩層の横縞がくつきりと見える。四時半頃俄かに高さ七十米もあらうと見える白い岩角が海岸に突出し、その下に白い低い島が見える。智利最北端の港アリカだ。突出岬と小島に砲臺がある。此處は智秘戰爭の際、秘露の勇士ボロネシイが勇敢なる最後を遂げた古戰場であり、又外交上有名な難問題の土地である。

間もなく船はアリカ町の沖四五丁に停泊した。五時だ。其處の醫者が臨檢して上陸者の檢診をした。

アリカ港は良く圍まれてゐない。港内に多少波があがる。積荷揚荷が始まり、前後で機械がゴーゴーやり出した。

今迄サンチヤアゴの者で、時々英語で話合つて來た人が下船するとて挨拶に來て、以前、ミスミさんと云ふ日本人を知つて居たから宜しく云つて呉れと傳言を依頼された。

町は南緯十八度北緯にすれば臺南の南百五〇邦里位に當るに拘はらず、下着は夏シャツだが上着は冬服で寒い位。ブラジルで暑さに慣れて來たが、寒さには辟易する。港に向て右方の大岩角が遠く南から見えたのだつた。町は左と後とに廣がり、奥深く自然傾斜に登つてゐる。町外の山下の丘は褐色で無草木だが、町内には處々庭木らしいのや、公園らしい大きい森も見える。近くのが低く漸次高く疊々して山脈が三つ

秘露の勇士ボロネシイの最後の地アリカの尖角

位南北に走つて居る。左の奥の高い山の頂上に少し雪が見えた。ヴァルバレイソ出帆後始めての地形の變化だ。午後おそく、眞西から射してゐる光線で寫眞を撮つた。九時出帆。此夜十四日の月が明皎々と海面を照し、船はフンボルト流に乘じ、銀波を散らして北へ北へ。

廿一日、木曜、航海第六日。朝六時祕露初めてのモイエンド港に著いた。前夜久々で雨があつたらしく、土地の色が變つて見える。港は西南に向き、後方傾斜して上り遂に山脈となつて居る。左右に岬が出て居ないから荒天には困るだらう。山は半腹以上には灌木が繁茂して見える。町は崩れかゝつた崖の上に貧弱な小さい家の群りが散在して、千戸位あるらしい。

珍らしいのは熱帶樹椰子が見えるし、こゝで英國リヴァープール宛の棉を積む樣になつた。この附近には棉は出ないが、祕露、ボリビヤの奥地から來るものだと云つた。この港はボリヴィアの爲めには重要な輸出入口だといふ。シカゴ博物館行とした大荷物が數箇搭載された。後日採集に來てゐた一動物學者の品と知つて羨しく思つた。この人と甲板上で時々話した。海水が青い原因が分らぬ、誰でも知つて居そうで知らぬ事だと著者に話した。六十歳位の半白長髪の人物で、其身分は船員が知らして呉れた。

棉積みに時間がかゝるので上陸して見度もあるが語も出來ないから船に居る。出帆以來こゝで始めて商人が船へ來た。祕露山中の奇獸アルパカの毛革を持つて來た。襟卷大のもので祕露貨八ソーレス（四圓半）襟卷になる狐の毛皮は十ソーレス（五圓）と云ふ。その他大小の毛皮、ヴィクニアの毛皮、大きな肩掛等を甲板に並べた。そんな商人が數人ゐた。出帆間際に買へば安いさうで、買ふ積りでゐた處が、社交室の書棚に發見したマコウレイ論文集の、中學時代に教はつたクライブ傳の面白さに耽讀して、さて甲板に出たところ商人はもう下船して居ない。買ひ損こなひの赤毛布だ。商人共が甲板上で著者を見た時、日本人か、支那人か、フイリピノーかと話してゐた。

船は三時に出帆した。最後の通船から一人の男が船へ上り、一人の女に強談判を初めて船員が逐つてもなか〳〵動かぬ。オフイサーが出て漸く下りたが、まだ呶鳴り足らず、通船で船の近くに頑張つて居て引返しかねまい氣勢であつた。悲劇らしかつたが眞相不明、兎に角一時は大騒だつた。

此處でも日本人によく似た人夫や商人が多く船に來た、不思議に思つたが、眼光が少し鋭い。インディオである。夜半獨り甲板を逍遙し、澄明な南半球の空を仰いで、故郷とは丸で違つて見當の付かぬ光力の強い星座を眺めやつた。見える限りの山は高く、一樹の影もなく、どす黑い海の色は夜は一層暗澹として底知れぬ恐怖感を誘ふ。この空と水とは旅人を驅つて諸々の想念に沈ませる。この夜明月であつた。この邊の海には夕刻から夜分かけて、海驢が群をなして船近く出沒する。人の頭のやうな怪談めいたその姿にはぞッとする。

廿二日、金曜日、航海第七日。昨夜から風邪氣味、アスピリンを服んで寢た。今朝は日課の朝湯を止めた。熱帶といふに未だに冬服だ。午食を室で攝る。午後三時、四五の島嶼の間に船が入つて停つた。此處はピスコ町である。南緯十四度、町は右舷一哩位の處で、珍らしくも二三里平方の平坦地を山が三方から圍んでゐる。風は少しく溫氣を帶びて來た。午前十時頃、體溫は七度二分に下つた。午後には平溫、風邪はもう退散したらしい。明廿三日愈々祕國カイヤオ港に着く。里馬はもう近い、と、何となく心が浮き立つ。

第十三章　祕露の首都里馬市滯在

一、上陸——第一夜

船會社の注意書——出迎——新鋪裝路——西海岸一のホテル・ポリヴアール——日本人建設の銅像——公使館——ドクターと日本人會長

十月廿三日、土曜。昨夜、船はピスコ町で棉積に時間を取り、十二時、漸く出帆した。早く眼覺めてカイヤオ着港を待ち遠く思つた。上陸心得書を配布された。西海岸航海中、諸港での上下船の場合に、よく〳〵警戒しないと荷物を紛失すると注意されてゐたが、心得書を吳れたのは機宜と思つた。

一、上陸。汽船ハ灣内ニ停泊スル。着船ト同時ニモーターボートガ船側ニ着スル故、旅客ハ夫ニテ上陸セラルベシ。荷物ヲ岸迄及行先迄運送ノ場合ハ、該「ボート」乘組ミノ荷物取扱人ニ命セラルベシ。船客ハ上陸階段ニ於テソノ取扱人ニ出會フヤウ用意セラレ、其處ニテ稅關吏ノ檢査ヲ受クベキ事。

二、モーターボート。汽船ト岸トノ間ノ運賃一名八十仙。

三、汽船ヨリ里馬ノ住宅又ハホテル迄ノ運賃。大トランク一個、六ソール。小トランク一個五ソール。帽函、スイトケース一個二・五ソール。手提又ハ小荷物一個〇・六〇ソール。ミラフローレス、バランコ、又ハ、コリヨス迄ノ荷物運搬ハ以上ノ賃銀ノ五割增トス。

四、自動車。里馬市公定賃銀ハ市内一名又ハ二名五〇仙。其上一名ヲ增ス毎ニ二十仙增。時間賃銀ハフオード一時間三ソーレス。其他ノ車體五ソーレス。午前一時以後ハ二倍。市外ハ別ニ契約スベキ事。

五、電車。カイヤオ里馬間一名二十仙。

船は二三の島を廻つて九時に入港した。サン・ロレンソ島の東北の蔭に當る。バルバレイソから毎日接して來た地形とは異つて、珍らしく平地で、それが左右に擴がつて居る。前面三四哩先に山が見え、その奥は山脈又山脈である。港は島影にあつて、おつとりした靜かな、大きな港である。町もかなり大きく、三階位の大きな建物も見える。船から岸までは約一哩はあらう。上陸心得書にある樣に、ランチが來て檢疫もすませ、ひと先づ船に別れを告げる。船室のボーイ、ダニエル君は、八日間の航海中實に氣持よく世話をして呉れた。荷物は、里馬のホテル・ボリヴアルに宛て、運搬を來て居た取扱人に托し、上陸客用ボートを待つ許りの處へ、有難いかな、ランチで、公使館から福島君が迎へに來て下さつた。サンチアゴから到着を知らしてあつた由。公用のランチは來るのが少し遲れるから、どれでも早く乘つて上陸しようと促がされて、商用ランチに乘込んだ。十五分許りで大きい木造の平屋建の下の棧橋に着いた。階段を上つた處に稅關があつた。福島君の骨折りで荷を解かずに濟んだ。通りに出ると公使館の自動車が來てゐた。ホテル迄運搬を托した荷物を解約して、車に積み込んだ。お蔭で此處では、ブエノス・アイレスで味づたやうな苦勞を省く事が出來た。

車は町を通り拔け、六間幅位のアスファルト道の郊外へ出て、畑を突き拔け、廢墟の樣な處をひた

走る。途中、路傍の小さい交番のやうな建物の前で、道へ踏切のやうに横木を下して車を停めようとしたが、車の御紋章を見て、すぐ横木を上げた。政府は米人に道を造らせたが金が拂へないので、通行稅を取ることにした、其の關所だと說明された、途中二ヶ所あつた。

大きな丘の斷面を角な粘土で築ぎ上げた昔の砦跡らしい處があつた。又路傍の石臺の上に、破壞した自動車が載せてある。事故豫防の警告であるさうだ。車は三十分許で里馬市に入つて、サンマルチン將軍の銅像のある廣場プラザ・サン・マルチン前のホテル・ボリヴアルに着た。

このホテルは南米西海岸第一の新式ホテルで、先年秘露獨立百年祭に各國からの參列者を泊めるに良いホテルがないので、秘露政府補助の下に新築したものであつて、著者の滯在の終頃に、補助費として約二十五萬圓程を交付せられたのを知つた。設備費も皆使つた上に、經營がうまく行かないので、缺損をきたしてゐた爲めの補助であると云ふ。此のホテルは確かに西海岸第一であらう。ホール、社交室、食堂、バアー等も相當立派であり、客室は北米式で浴室の外に小さな前室が附屬してゐる。食事もサーヴィスも相當であつた。到着の當時、經營改善のために支配人が交迭された處であつた。

室を取り旅裝を解いて日本公使館に出頭する事にした。福島君は、未だ時間があるから、途中市中の目拔きの所を一廻りしようと言はれ、四十分許りドライブし、町の樣子を大凡そ知る事が出來た。最も感激したのは、廣いマンコカパク通の十字路の中央に堂々と建てられたマンコカパク像の話で

あつた。是は在留日本人諸氏が秘露獨立百年祭に、インカ國の神と尊崇されてゐるマンコ・カパクの銅像の建設を志し、十萬圓の建設費を募り一九二二年三月十五日にレギア大統領臨場、清水公使、在留同胞の有力者が集り、盛大な礎石式を擧げ、四年の後見事に建設を遂げ、一九二六年四月五日、更に嚴肅盛大な除幕式を擧行したのである。

マンコカパク銅像（大統領と日本公使）

是迄の旅行中、在留同胞の手によつて、かくの如き立派な永久の記念物を建設し、親善に盡したのを見たことがなかつた。南米の獨立記念祭を期として他の外國移住者の手になつた記念物を見て色々考へさせられてゐた際であつたので、此のマンコ・カパク像を見、説明を聞いた時に、著者は、在留同胞が異鄉に在つて、共同共榮の精神を發揮してゐることに感激し、快哉を叫んだことであつた。

日本公使館は其處から程遠からぬ靜かな綺麗なバセオ・コロン通りにあり、清楚な建築である。鐵柵門前で二階の正面壁上に燿いた金の御紋章に、自ら頭が下つた。應接室で公使に挨拶した。來館されてゐた池田四郎ドクトル、中央日本人會長野々宮宗藏の兩君に紹介された。來祕の目的、在留同胞の現況見聞と、オロヤ熱病の見學との希望を述べた所、先づ、オロヤ熱病見學について配慮をうけることになつた。

オロヤ熱病は祕露獨特の傳染性奇病であり、媒介物も判然とは確定してゐない。その病源體は祕露の學者が發見したが、その細菌學的の培養は紐育の野口博士によつて漸く成功され、（一九二六年）學界に發展された。著者は、折よくロックフエラー研究所で、博士自身から教示され、今後世界的の研究題目となるであらうと考へた。

この病氣は高地の谿谷に發生する。昔から其の谿谷、オロヤ谷が發生地であるので斯く銘名されて居る。オロヤまでは地圖によれば鐵道があり、一日行程である。西班牙語は出來ないが、能く其他の事情を調べ、其の土地の醫者に紹介して貰つて是非一度行つて見ようと考へてゐた。

公使は夫人が歸朝中であつたので前記の方々と四人、午餐を倶樂部で頂だく事になつた。立派な倶樂部である。其處で滯在中のプログラムを大要定め、第一にオロヤ病を見學する事にした。

食後、市中見物に案内された。なか〳〵古い都である。夕刻ホテルで同伴して貰つた池田君と茶を

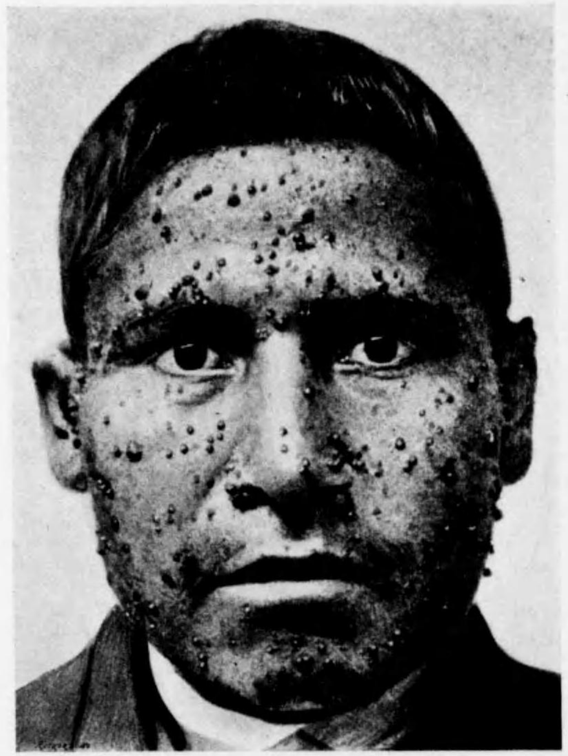
共にし、夜はホテルの食堂で晩餐し、疲勞の第一夜を早目に就寢。

二、オロヤ熱病又祕露疣病

如何にして有毒地に赴くべきや——**オロヤ熱病小史**——尊き犧牲——バルトンの病原發見——野口・パチスチニイの研究——國内分布——オロヤ鑛山——山岳病——**媒介昆蟲**フレボトマス——有難い同行申出——ロアイサ病院研究室——ドスデマヨ病院の患者——貧血、症狀——赤苺狀疣病者——日本人に似た印甸——オロヤと祕露醫學——研究成功祝賀と記念

オロヤ熱病に就ては少しく前述したが、オロヤ熱は又祕露疣病、又はカリオン病 Enfermedad de Carrion と唱へ、祕露獨特の奇病である。歐文の記述は已に一五五三年からあるが、有名になつた事歴としては、ピサロからである。ピサロは祕露を征服し、今の里馬から東方の山間を傳つてインカ帝國の都クスコまで來て、之を滅亡させたのであつて、(一五二六——一五三三) 里馬市を開き此處に政府を置いた。里馬市自慢のカテトラル及び其の向ひ側の宮殿はピサロの建てたものである。ピサロは初め巴奈馬に上陸し、陸傳ひに太平洋に出て、エクワルドのグワヤキイル灣まで船に乘り、陸路祕露に入つた。そのオロヤ谿谷にピサロの軍が到着したとき、恐るべきこの病は三分の一の兵卒を罹病せしめ、犧牲者として葬つたといふ事である。以來、有名となり、歐洲人に恐れられた。

オロヤは昔からの銅産地である。其爲めに米人は一八七〇年に祕露中央鐵道を敷設したのである



Verrugas Mulaires
オロヤ熱病患者の圖

本文三百十二頁以下參照

が、その際にも數千人の工夫が之れに罹つたと言ふ。古い記載に、『祕露には、身體顏面に疣或は小さな膿瘍狀の腫瘍が發生し、極めて惡性且危險な病氣がある。恰も痘瘡又はペストの如く恐るべきものである』とある。

發病すると間もなく著しく貧血し、關節痛、筋肉痛が强く、患者は非常に苦痛する。そして、大多數は死亡するのである。疣病の方は、初期は樂であり、貧血や痛は漸進的に起り、後になつて急に激しく苦しむのであるが、その頃――疣の形と數は病人によつて違ふが――、皮膚に實に妙な疣が發生する。最も不思議なのは、眉の所と咽の奥などに出る大豆大の、透明な赤い球狀の疣である、尤も其の赤いのは、疣の直ぐ下の組織が血管に富んでゐて、それが溢血するからであるが、時が立つと變つて來て乾き出す。皮膚に密生する場合は恰も天然痘の痘疱の樣になる。又餘り多くないのは飛び〳〵に發生し、大きいのは、小さい林檎位の大きさで實に奇妙な疣である。この疣の出來る患者は助かる者が多い。

カリオン病といふのには、右の如く症狀に二種類あり、二者同病なりとの說と、二者別であるとの說があつた。里馬の醫科大學生ダニエル・カリオンが、勇敢にも自體に試驗して其の異同を決定せんとし、一八八五年八月廿七日に疣病患者から病毒を採取して自體に注射した。廿一日間の潛伏期を經て九月十七日に發病し、オロヤの症狀が起つた。そして、十月五日に二十七歲を一期として、涙

ぐましくも、身を學術研究に捧げたのである。依是、病源は一つであり、兩者は同一であると考へる學者が多くなり、現時はもう同病であると言つて差支へない。カリオンは里馬から北に行く鐵道の終點のセロ・デ・バスコ町の醫者の息子であつた。其の尊き死によつて、里馬の醫學界は奮起し、一層本病の研究を盛んにやり出したのである。土地の多數の醫學者が研究して、立派な研究成果を擧げてゐる。オロヤ病をカリオン病とも呼ぶやうになつた由來である。

其の病源體の發見者はアルベルト・バルトン氏である。歐米の研究者も之を承認してゐる。歐米の研究者としては獨逸人、北米人であるが、其數は多くはない。新しい人では祕露人のバチスチニーと言ふ若いドクターが、紐育のロックフエラー研究所で野口博士の下に、疣病の病毒を祕露から持つて行つて、共同に研究し、初めて純粹培養に成功したのである。

本病の發生する區域は、南緯八度邊から始まつて南方十三度位まで凡そ百五〇邦里間の高地で、約十二、三ケ所である。卽ちアンデス山の海岸線『コルヂジイラ』の諸谿谷間である。オロヤは里馬市の東方に當り、同市鐵路二百十粁程上つた所で、標高三千七百米の町である。其處へ行くには途中もつと高い場所を通過せねばならぬ。チクヂヲ、ハセゼエラ間の高地で、標高四千七百八十米である。

オロヤは鑛山として祕露でも有名な所なので、よく旅行者が視察に出かける。通例、オロヤへ行く人は里馬で診察を受けて、心臟の確かである證明を得てゆくのである。或る著名の日本人數名が、視

察のため里馬から汽車で上つてオロヤ驛に著いたが、山岳病に罹つて寢臺から一歩も動かれない。折角來たけれども、其儘汽車で里馬へ引返したといふ事もある。

又或る時、日本の有名な資產家の令息達と其の會社の重役とが、里馬で健康診斷をし、心臟に對する證明書を持つて汽車でオロヤに行つた。普通ならば着いた日は休養し、翌日から視察するのであるが、この一行の人達は元氣で、山岳病何のそのと、着いた日に、西班牙語で書いた證明書を示して視察し、里馬に歸へつた。一行は皆英語は達者であつたが西語は一語も分らなかつた。里馬に歸へつてから、その證明書を示された一日本人は、讀むと大いに笑つた。檢査醫は此の一行を勞働者と見たてたらしく、證明書に記載して曰く、『この人々は心臟が丈夫であるから、直ちに勞働に耐へる』と。

であるからオロヤ地方には山岳病の危險もあるわけである。著者は鑛山は見なくてもよいが、オロヤ熱發生地で患者を見せて貰ひたいので行くことにした。山岳病はアンデス越の經驗では先づ輕い方であつたから、頭痛の藥でも用意して行く積りであつた。この地方は、雨に乏しく、山は禿山で樹木等のない事前述の如しで、山の頂きの雪が溶けて河となり、河水の利用出來る所丈に草木が生育し、町があるといふ工合である。

オロヤ熱病の發生原因は長年判らなかつた。一九一二年から翌年にかけて、北米の動物學者タウンゼント氏が、濃毒地帶であるこの鐵道沿線のサンタ・ヨジアジヤ谿谷と、マッカナと云ふ部落間を危

險を冒して調査した。その間、助手が罹病し、里馬に送つてバルトン氏の治療で全快した等の困難を經、努力の結果、有毒地方に一新種の蜥蜴が居て、その體内に病毒を貯へてゐて、一種の蚊に似た昆蟲フレボトマスが蜥蜴の血を吸つて毒を承繼し、このフレボトマスが夜間に人間を刺螫して發病せしめるとの結論に達した。これに就ては異説もあるが、タウンゼント氏の研究の努力は敬服に價する。

著者は里馬オロヤ間は僅かに二百粁だから、日還りの距離で、オロヤ鐵道は毎日發着してゐるものと思つて居た。處が里馬に着いて聞いて見ると、汽車は月水金しか出ない。しかも高地勾配を昇るので汽車も緩く、朝出て晩には着くが、病人の居る處を探すには何日かかゝる。それに通譯も要る。病毒に對して豫防はするが、若しもの時、自分は職務上であるが同伴の人に相濟まない。と云ふ次第で、人選について公使の配慮を非常に心苦しく思つてゐた處が、池田ドクターが進んで同伴を申出でられ、しかも又、著者が荒井領事を禮訪し、種々南米に對する卑見を述べて教へを乞ふと、領事は奮然として、『私も同伴しませう』と言はれたのであつた。池田ドクターは里馬在留七年、領事は南米に十七年在職であるから實によく事情に通じて居られる。著者はその學問研究に對する御熱心さに非常に感謝した。

色々の邦人に會つてオロヤ熱の噂や意見を聞いたが、今度は專門家に聞かうと、豫てプログラムにあつた醫科大學長に會ふ事にした。公使の紹介で醫科大學を訪問した。學長ガスタネータ氏は外科の

教授で、恰も手術中であつたので事務長ヴァルヂサン氏の室で待ち受けた。その間、バルヂサン氏は、嘗てオロヤ病を研究したこともあり、又患者はマツカナ部落から里馬市に持つて來て研究される事があるから、運が良ければ市内の病院にゐるかも分らないと話された。やがてガスタネータ氏が手術を終へて面會された。氏は直接にオロヤ熱に關係してゐないといふので、研究者バチスチニー氏へ照會された。この人は六十歳位、隨分活潑な人である。知友の齋藤千之君からも私の希望を聞いて居られたさうで、非常に都合が好くなつた。

バチスチニー氏は前述の如く紐育のロックフエラー研究所で研究し、一九二四年に一度秘露に歸へつて病毒の採取、純粹培養に成功した人である。今は歸國して、今年開院したばかりのオスピタル・アルソヴイスボ・ロアイサの新築病院の研究室を主宰してゐる。此の病院は玄關丈けは二階造りで他は平家建の大きい中庭のある立派な廣大な病院で、施療制度であり、女の患者許りを取扱ふ處。内部の設備、醫療器械など皆新式で歐米に劣らぬ立派な病院である。

同氏はマツカナ地方から、研究用患者を市内のドス・デ・マヨ病院に連れてきてあるから、見せると言はれた。まことに渡りに舟であつた。なほこゝで、四月に紐育で野口博士から示されたと同じ研究も見た。病原體の培養、動物試驗、又病理室のドクター・マゲニイ氏から患者屍體の標本や研究標本を見せられた。之は紐育では見なかつたものである。ドス・デ・マヨ病院に於ける患者參觀は、

豫め打合せをしなければならぬと云ふので、明後日を約して別れた。

オロヤ熱及祕露疣病患者。ドス・デ・マヨ病院のバルトン氏に打合せがあつて、約束の日に其處へ行つた。この病院は古い有名な病院であつて、西班牙式の建物で、入口や門女關等、堂々たる樣式である。

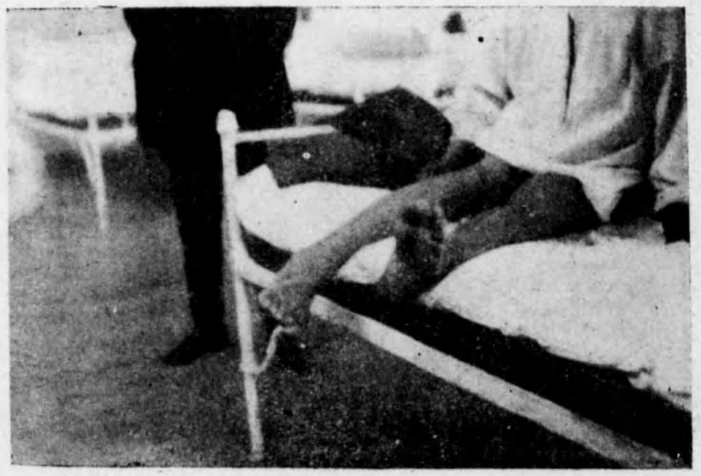
有料施療の二部があり、有料部は室内も綺麗であるが、施療部は餘り綺麗でない。バチスチニー氏は著者をオロヤ病原體の發見者バルトン氏に紹介して呉れた。同氏は助手を連れて回診中であつたが、患者を五名許り供覽して呉れた。オロヤ熱の恢復期の者一名、夫は未だ貧血著しく全身蒼白、他は新舊の疣病であつた。赤い苺樣の疣が眉の處、咽の奥に吊下つてゐたり、又全身に古くなつて平たくなつた小疣が密生し、宛然天然痘發痘の八、九日目頃のやうなのや、色々であつた。

ドス・デ・マヨ病院

犧牲者は主に山奥の土人であるが、白人も罹る。祕露の印甸には主な二種別があり、一はアスマラスと言つて、チ、カ、湖邊や山間の高地に住み、性獰猛大膽、中肉中背、強力で極寒も意とせず、脚力も亦驚く程強い。皮膚の色は銅色かオリブ褐色で好戰種族である。他は色淺く、性質從順で、體力は同樣非常に強く、女も變りないと言ふ。著者が診た患者は確かに印甸で皆男であつた。何れも病體であるし、貧血發疹し、皮膚の色も變つて居るので二種の孰れに屬するものか判別出來なかつたが、何れも日本人に酷似してゐるのには驚いた。唯眼は鋭かつた。二十四五歳の疣病患者が比較的のん氣で、獨りで起き上り、上衣を脱ぎズボンと一緒にゾボン下を脱つて診察を受けたが、尾籠な話だが、體にもゾボン下にも汚物が付いてゐたのには二度吃驚した。

祕露は南米のA・B・C外の國で、國際的地位は劣

疣病患者



つてゐる。開拓もまだ行き屆かぬらしい。併し戰勝國の智利に比較して、醫學の研究や治療の進歩は數等上である。オロヤ熱病の存在によると思ふが、兎に角、この研究には敬意を表する。土地の學者は研究費が乏しいと歎じてゐるが事實さうらしく、同情に耐へない。一九二五年、バルトン氏が大學名譽教授に昇任し、パチスチニー氏がヴエルガ病の動物試驗に成功した事を祝ふため、大學は九月八日に盛大なる式を擧げてヴエルガ研究を記念し、大學紀要に『ヴエルガ』特別號を出版して之を歐米に宣揚したのは機宜を得たものと感じた。

三、在留同胞

中央日本人會——會長野々宮邸の晩餐——日本人協會——創立十五周年記念——**初期移住者**の受難挿話——異鄕の天長節——日本人運動會——日本人小學校——**第二世教育の問題**——日本新聞雜誌——好尙團體——邦人家庭——雨降らぬ國の屋根——**邦人衞生問題**——邦人の棉作——岡田幾松君——**新棉花會社**——**コカ栽培地**——映畫見學——藥種

中央日本人會。祕露の在留同胞全體の爲めに一九一七年中央日本人會が設けられた。勿論以前から日本人の會はあつたが統一的組織に完成したのがこれである。在留同胞が島國根性を脫して、この組織を强化するならば、日本人として公正、有利な活動が容易になるものと思ふ。

到著の翌晩、會長野々宮君は自邸に會合を催して、主な會員諸君と著者とが招待された。場所はインキジション（昔宗教裁判をした處）の前で銅像と樹林のある廣場に沿うた靜かな所であつた。來會

者二十餘名。料理は夫人のお心添で數々の日本料理、賑かな愉快な一夜を送る事を得た。

日本人協會。在留同胞の有志の人々で、日本人協會といつて將來倶樂部にしようと言ふ會がある。齋藤千之君が會長で、十月廿七日に創立十五週年記念會が催され、招待されて出席した。會場は里馬で周知なアウフスチン町のブロヂ軒であつた。森本、橘谷兩君は先日祕露政府から、多年日祕親善に努力した廉で勳章を授與せらたので、其爲にも一同乾杯し、記念寫眞も撮つた。ブロヂの料理は里馬一流のコックに依る由で、なか〳〵立派な品々であつた。此機會に同胞操觚者諸君、實業家諸君の古顏の有力者始め、悉く初對面の諸君に、舊知の如き親しみを感じたのであつた。廿六年前の第一回移民以來の懷古談を聞き、移民の失敗談、苦戰奮鬪の成功談など興味あるものであつた。

嘘の樣な話もあつた。昔、或る二名の移民が祕露で暫く働いてゐたが、あまり面白くないので、勞銀の高い北米に往つて見ようと云ふ事になり、徒歩で出かけた。北を指して一ヶ月も歩き、もう北米であらうと思つて、或る日、出會つた日本人に訊ねると、まだ祕露國内であつたと云ふ。里馬から眞直に線を引いたらば、北のエクワドール國境迄二百三四十邦里はある。コロンビアの國境迄は眞直にでも四百里はあらう。徒歩では一ヶ月で國境までも辿り着けない筈である。

又或る頃、多數の移民が市外の耕地で働いた。その内の不平家は、こんな筈ではなかつた、東海岸

に行けばもつと良い所があるさうだから、山越をして行かうと、數十名一團となつて抜け出した。日本領事館では大いに驚いて、途中で皆行倒れるに定まつてゐると云ふので、馬に食糧を積んで大勢で後から追ひ付き、懇々とその無謀を説いて、容易に聞入れない連中をやつとの事で連れ歸へつたと言ふ。伯國のアマゾンに出るには里馬から山越をして、バホ河、ウカヤリ河を下ればイキトス町に著く。此處迄でも千三百哩はある。

十數年前に柔道師範前田光世君が門弟五六名を同伴し、北米中米を經て里馬に來て、大評判であつた。里馬の劇場で仕合を展覽した時、あまりの大入で二階の一角が墜落し怪我人が出來たと云ふ。

初期移住の頃には壯年の男子のみが來たので、何處も同じで、到る處で婦人問題の珍談が多かつたが、今はとうの昔で、近年は家族同伴、又は呼寄せ結婚や歸國結婚でさうした問題はないと云ふ。

兎も角、初期移住者の往昔の挿話は限りなくある。壯年氣鋭に委せて土地の事情を究めぬ失敗談は前記の如く、外にも誤解、紛擾、勞資關係、對祕國政府關係、統制等に、盡されぬ困難があつた。同胞の間に於ても、堅忍不拔、孜しとして基礎を早く得て成功の光明に惠まれた者と、一方運拙なく蹉跌して自棄し、同胞からさへ白眼視された者、此等の者が好運な同胞の迫害を企てる等、かうした狀態の永い年月を經て、受難の數々も今は昔噺とはなつたが、初期時代に於ては、成功者も失敗者も、共に一種の殉教徒として血と涙を捧げたものといはねばならぬ。

滯在中恰も十月三十一日に會し、午前十一時、日本公使館へは、外交團の禮訪があつた。公使から列席を許され、五時の在留同胞の參賀にも參列の案内をうけた。異郷に轉々しながら、郷國に在ると同樣のこの祝節に列席の光榮を得たことは何とも仕合せなことであつた。

九時野々宮君同伴、電車で約四十分のパランカ海岸の領事邸に行つた。階上で御眞影を拜し、階下で領事同令夫人に賀辭を述べ、知己の同胞と語つた。定刻までに約五十名の來賀があつて、後、餐に列つた。

領事館は裕福な某名士の邸で、その在歐二年間、その儘領事館となつたもので、諸式善美を盡してゐる。周圍の景色極めて佳く、邸は海岸岩角の上に築かれ、珍花爛漫の庭園があり、厓下は遠淺の海濱で、左方に遠く小灣端に突出した岬を望み、右は遙にカヤオの沖サン・ロレンソ島が眺められる。しかも氣候は日本の春の末位。その軟かい空氣には當に陶然たるものがある。風景は恰も逗子御用邸の邊を想はせる、松籟と富岳を缺いてゐるが。

十一時、日本公使館に參賀した。御眞影を拜し、後廣間に移つた。公使は、著者を祕露外務大臣、勸業大臣、獨逸公使等に紹介せられた。卓上に飾られた盛花は極めて美しい。里馬地方は殊に花の好適地で、薔薇其他の花瓣は殊に見事に健やからしい。芳香は或は歐洲の物に劣るかも知れないが。午後一時外交團辭去、日本公使館、領事館、在留同胞の代表者諸君は殘つて心適くまで祭の氣分に浸つた。此の日中央日本人會では『今日の日本』册子を發刊し、兩陛下の御肖像を掲げ、近時の日本を寫眞圖入りで紹介宣傳したのはいゝ記念であつた。

◇

日本人運動會。天長の佳日を卜して毎歲市端のグラウンドで日本人運動會を開催する。行つて見ると、可驚、約五千の同胞が棧敷に居た。幼兒を伴れた婦人も多かつた。小學校兒童の運動、次で青年團の競技があり、青年團は略縣によつて分團され、沖繩縣人が最も優勢だ。最後に擊劍仕合があつた。集まつた同胞は主にカヤオ及里馬の在住者と云ふ。運動會の盛大につれて、里馬の一部市民の間に多少の猜疑を抱く者があるさうで、注意を拂ふ要があると告げた人があつた。

日本人小學校。里馬市のサムジオ町に日本人小學校が有る。建物は普通の家屋を少し造作して用ひてゐるので甚だ不便らしく見受けた。兒童男女合計三百名、校長は創立以來の東京青山師範出身の横瀨五郎君で、他に邦人教師三名、祕露人女教員一名であるが、邦人は祕露の教員資格を持たねば校長になれないから、名義上に祕露人教員一名を校長としてある。

海外在住同胞の、何處でもの惱みである子供の教育方針問題は、里馬でも同樣、不徹底の狀態にあるのは同情に堪へぬ所である。里馬でも、父兄の方針が二途に分れ、一は日系祕露市民を目標に必要な教育をし度いとの考で、これは永住派の方針であつて至極當然であると思はれるが、更に第二の考があるらしい。それは兒童教育を日本的にと云ふのであつて、移住は一時的であつて、成功した曉は日本に歸り度い、その時に子供が祕露的では困るからといふのらしい。實情は、短年月に歸國する程度の成功は容易でなく、その間には子供も大きくなる、成功し、歸國しても、永い留守中には

本國の世態の變化が著く、時勢に伴ふ生活生業が出來ずに、短期間に金をなくして再び元の移住國に舞戻ると云ふのが何れの國民にも多い。この點などが最も考慮を要するのではあるまいか。

現在、語學は日本語、祕露語卽ち西班牙語半々、他の科目は總て日本教科書により、日本式に教育する狀況であつた。が、聞く所によれば、それで子供が教育せられても、實力が祕露の中等學校へ入學するに不適當であり、又日本に歸へしても尙更困難だと言ふ。結局子供自身が非常な難儀に陷るのである。是は實に遺憾な事と思ふ。

惟ふに、斷然初めから祕露流に教育し、永住を目標に、萬一歸國の場合には日本には尠い西班牙語に賴つて、近い所でそれが役に立つ南洋方面の邦人事業にでも進出することにしたらば如何か。兎に角、何處でも第二世問題は重大な難問ではある。

里馬日本人小學校の一教室に立派な一油繪像が掛つてゐた。加特力の尼僧の像であつたが目に著いた。マドレ・フランシスカと言ふ婦人で、日本人多年の恩人であつた。日本人が屢々病氣に罹つてドス・デ・マーヨ病院に入院すると、每もこの婦人が獻身的に看護に當つて吳れると言ふ事で、感慶の念にうたれた。

日本人會から望まれて、日本人小學校で一夕旅行感想談をやつた。ブラジルの感想を述べ、移住者

の成功に、多大の苦勞と忍耐とを要する事は、本國に於て見聞してゐたとは大きに相違ある事、歐米と南米との顯著な自然の相違、從つて生活の相違、文化の相違といつた點につき所感を述べ、希望として移住地に於ける生活法の向上と共に、住居衛生の向上が日本人として必要な事、平素の努力に伴ひ、日曜、祭日には充分に休養して身心の恢復を必要とするであらう事を話した。

日本人新聞雜誌。邦字新聞にアンデス時報、日祕新聞と、他に週刊の大南米誌とがあつた。天長節には夫々本國に於ける如くに陛下の御肖像を掲げて祝意を表した。土地の五大新聞も亦御肖像を掲げて敬意を表してゐた。

上記の三刊行物は、後、合同してリマ日報と云ふ日刊と、汎米と云ふ雜誌に變つたのであるが、昭和四年八月別に週三回發行の祕露時報といふのが創刊された。

序に記したいのは、マンコ・カパク銅像建設記念誌が私の滯在中の天長節に中央日本人會から出版せられた。西班牙語で書いてあるが美事な印刷物であつて、銅像建設の由來經過の外に、本國紹介の寫眞を入れてあつた。

◇

同胞の好尚團體。種々の好尚團體の一例として、あら海會の事を紹介したい。著者はその會の編輯册子を貰つて歸航船中長く感興した。その俳句集から、自然萬象が日本とは大いに趣を異にしたこの國での感興の

報に揭げられる。

所產若干を讀者の一粲に供する。會は會員の宅或ひは名所遊山の時などに催され、毎回の句作はアンデス時

盃に櫻想ふや里馬の里　山羊（橋谷）
此の頃は菊觀の宴や大八洲　同
木立あれど蟬啼かぬ國夏さびし　如夢
鹿の聲聞くや異國に月淋し　和尚（橋谷）
海拔一萬尺羊の群や雲亂る　山羊
船を追ひ船に追はれつ鷗飛ふ　西山（室野）
砂漠越し靑葉の村や寺高し　呑鈍人（石田）
日は西に高原廣し羊の群　瓢哉庵（小林）
蝙蝠飛んでアシエンダ暗きランプ哉　彩雲居（藤田）
秋晴や山紫に里の靜なる　同
パナナ園ギターに和する村娘　梧樓庵（横瀨）
故郷を想ふ夕や鳥渡る　呑鈍人
無雨國の雨千雨の價哉　彩雲居
傘ささず外套も着ず里馬の雨　西山
旅衣暮れ行く空に雁渡る　同
すき鍋を圍みて語る移民法　蒲柳（野々宮）

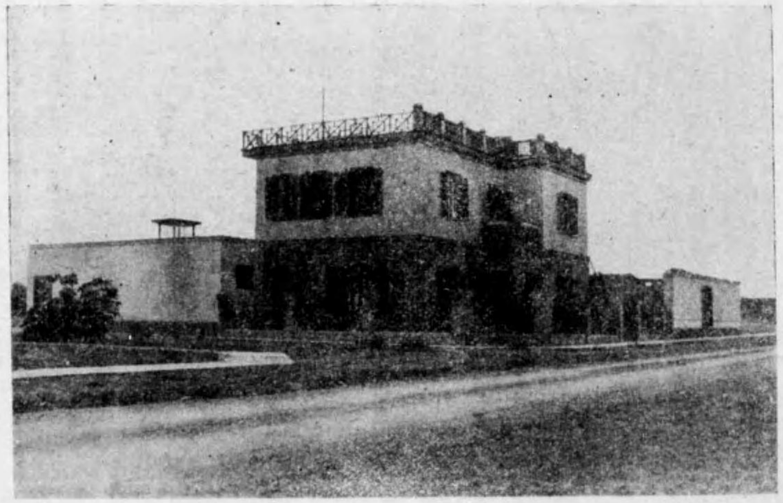
茫として涯は煙れる牧場かな　失天子（中村）
夢見つゝ古里遠き船路かな　讀人不知
枯山の月見る秋の暮の旅　同
友よ友また來ん年のまどゐかな　同
音にきく秘露の國に來て見れば荒野にはぐむ大和撫子　同

邦人家庭。 里馬の在留邦人は數千に上り、中には立派な店舗を構へてゐる人も少からずある。見學に忙がしく、唯數人を訪ね得ただけであつた。野々宮君、並に池田ドクターの居に用件で或ひは招かれて度々訪ねた外、バランカの岸君とミラフロレスの森本君の宅を各一度訪れた。邦人の店舗、會社等へも顔は出したが、店舗は客の便利を主に、奇異な點はないが、住宅の構造、間取りなどは甚だ珍らしく思つた。二階全部住宅になつてゐても、階を昇つたすぐには客間が若干あり、それから別に一つの廊下を傳つて奥に行つた處に居室や臺所が集まつてゐる。リオデジヤネイロの或る老ドクターの宅と同じであつた。里馬の某醫科大學教授の邸宅も甚だ不思議な構へであつた。通に大戸があつて、それを開くとすぐ廣い内庭があり、三方が色々の室になつてゐるが、入口の大戸のすぐ内側に階上に昇る階段があり、階上が又各室に分たれてゐた。古い建物にかうしたのが多いのださうで、里馬の日本公使館、バランコの領事館、ミラフロレスの森本君の新築住宅などは、無論皆新式の構造で、立派

で、便利で、特に變つては居ない。西班牙、葡萄牙本國に關しては通じてゐないが、南米古都の官廳病院、住宅の、かうした建築や間取の奇異に對する興味は、吾々が上方に行つて、昔ながらの舊家を尋ねた時、或は舊幕時代の門長屋構に入つて見た時のそれに似たものであつた。

ミラフロレスは市に接近した新住宅區域ではあるが、主要道路と上下水だけ出來てゐて、住宅はまだ非常に少かつた。細い徑にはペーヴメントが施してないから、自動車を道に乘り捨てゝ、森本君宅を訪問した。雇人の住居や、倉庫など凡て見せて貰ひ、見晴らしのいゝ屋上に昇つた。面白い事には里馬には殆んど全く降雨がない。前掲の句にも『傘ささず外套も著ず里馬の雨』とある。毎朝の露と霧で土地が濕り、樹木草花は灌水される。極く稀には雨があ

ミラフロレスの森本君住居



る。里馬の家には屋根がないと云ふ噂さがあるさうだがと、森本君は説明して、扨て私の家の屋根は此通りちやんと防水してあるとて、二寸位の厚さに塗られた屋上の床を指された。

この區域も遠からず繁昌するだらうと聞いた。サン・パウロで、日本人の住居衛生に對する無關心を非難されたが、里馬でも、或るドクターは、その點同樣に困つてゐる、病氣の節往診して居室や寢具の不潔に驚く事があり、若し傳染病發生等の場合は、衛生官吏がやつて來るから、自分は同胞として赤面をすると云はれた。邦人の保健の爲めには勿論、旁々面目上からも緊急考慮を要すると思ひ、日本人會長に乞ひ、二三の邦人有力者と會合してサン・パロウの例も說いて懇談した。

在留邦人の出生死亡。里馬、カイヤオに在留一萬二千。最近十年間領事館での統計によれば、出生平均毎年三百八十六人餘、人口千人に對し三二・二である。死亡は毎年二百九人餘で人口千に對し一七・四。其儘を本國に比すればズツト結果は良い。しかし年齡や職業や其の他の事情を詳かにせれば出生死亡の關係は是れだけでは遺憾ながら批評は出來ない。

日本人のよく罹る病氣はチブス、マラリアで、小兒は土地の者と異り腸炎に侵される者は少數だが、肺炎が多いといふ。赤痢はアメーバ赤痢が多いらしい。

邦人の棉作。明治卅二年、祕露に初めて日本移民が入つて以來、同國農產物の大宗である棉花事業に大成功した人に岡田幾松君がある。アマゾン調査團一行の谷口工學士と同鄕で懇意の關係があるので、谷口君同道是非にと往訪を促がされてゐた。谷口君は公用で歐羅巴に赴き意を果さず、獨り著者が愈々西海岸を巡回する事になり岡田君に通知した。紐育で良地圖だと敎へられて求めた新版ハモント地圖で、岡田君の耕地チャンカイは、里馬から程近く、汽車もある、一泊位で充分だらうと輕卒にも考へてゐた。所が、里馬で聞けば距離は其通り近くても、その先は自動車に乘らねば行けぬ。汽車も往復回數が少いので一泊位では參觀が難しいと云ふ。

當時恰も、百萬圓の邦人新會社祕露棉花會社が出來た直後で、その大部分の資產は岡田君の既成のバルバ耕地であり、岡田君は今その引繼ぎ事業の繁忙中であり、同時に植付作業中であり、また同君自身のラワカ及カキ耕地の事業に忙殺されてゐて、到底里馬では會へぬといふので、兄弟同樣の黑飛君を紹介された。耕地の事情、岡田君の近況は、黑飛君竝に會社の常務藤澤君から聞いた。

里馬では隨分飛び廻つたが、なほ日が足らず、如何にしてもチャンカイに行く日割が出來ず、日本移住農業者の主要なる事業である棉作の實況を遂に見る事が出來なかつたのは殘念至極。ペレーム同行の福原君は、壯年在米中棉花の研究をし、鐘紡では尙更その道の人であるから、同行の途次、世界棉花界の狀況、祕露、埃及、印度棉花の性質などよく敎はつて興味を持ち、船が祕露各港で積荷をする主なる物が棉花である事などを注意して居たのであつたが。

コカ栽培地。學生時代に藥理學を敎はつた時、印甸がコカの葉を嚙んで空腹疲勞を忘れ、元氣回復

すると聞いた。出發前コカの土人國に行くから、邦人唯一のコカ栽培地を有する星社長に紹介を乞ふた。里馬の齋藤、澤田兩君はその事業に關係してゐられるので聞いて見たが、往く事はとても出來なかつた。

と云ふのは里馬からセロデパスコまで汽車、それから自動車でフアヌコまで、それからコカ栽培地パンパヤークまでは馬背、里馬から汽車で先づオロヤ迄行く、途は上りで其間に一萬五千六百九十三呎のハセラ隧道を通ほる程だから隨分時間がかゝる譯である。里馬オロヤ間の距離は僅かに二百八粁、朝六時半に里馬を出て夕の五時廿四分にオロヤ驛に着く。それも毎週月水金だけ出る。オロヤからセロデパスコまでは別線に乘れるけども、オロヤまでの樣な登り線路でなく割に平らである。距離は千五十粁だけれども一日がかりである。其處から自動車は數時間で、星の出張所のあるフアヌコに着く。里馬からオロヤ及セロデパスコ經由の距離四六七基米、それから馬背で途中一泊して栽培地に着くと云ふのだから、其の爲め往復十日位見積らねばならぬ。

然し齋藤君の懇意にしてゐる英人經營の『祕露フィルム社』に、三年前に齋藤君澤田君達がコカ栽培地に行かれた際のフィルムがあり、序にオロヤ熱病者診察研究の新フィルムも其處にあるから見せるとの厚意で、伴はれて其の社を訪うた。

パンパヤーク栽培地方は里馬附近の如き、或はヴアルパレイソ港から、エクワドル海岸迄のやうな禿山に禿地ではなく、草木の生育地である。

フィルムでは、印甸が傾斜地に淺い孔を掘つて苗木を植ゑる。六七尺位となつた樹から葉をシゴキ取る。夫を廣場で乾燥し、一定の袋に詰めてタウン迄搬出して會社の人に渡す。その後で乾葉を貫つて嚙んでゐるのが寫つてゐる。地を掘つたり、苗木を植ゑたりするのは大人がやつてゐたが、葉の刈取りには子供も混つてゐた。土人の小屋、フアヌコの小タウンはアンデス海岸山脈の東側に當る所で、此處まで齋藤君、澤田君達が、或は自動車に或は馬に乘つて往復せられた場面が寫り、林間の清い溪流を馬で渡渉する所など、久々で良い景色を觀る心地がした。

フアヌコは小タウンと云つてもフアヌコ州の首都兼フアヌコ縣の首府である。此の町及び周圍の耕作地共人口僅に一萬六千、海拔二九一五米。此の邊からアマゾン上流ウカヤリ河に出、船で祕露イキスト町に下りアマゾン本流をブラジルに出る道がある。序ながら病理地理書に據れば、フアヌコ地方には狂犬病、痘瘡、赤痢及發疹チブスがあるといふが、マラリアは海拔一萬尺以上で蚊も居ないものか、揭げられてゐない。

オロヤ熱病者檢診フィルムを序に記し度い。衞生局長ドクター・ロレンテ氏が祕露中央鐵道、即ちオロヤに行く鐵道沿線のマツカナで、患者の家で醫者の診察に立會つてゐるフィルムである。數人の疣病者を寫してゐる、其邊土人生活の原始的に近い狀況や、沿線岩石よりなる禿山、斷崖の模樣なども觀える。フィルムの終にバチスチニイ氏がレイズス猿（日本の猿にも同種あり）に病毒を植ゑて疣病を起さしめ、又病原體の培養を行つてそれを種々檢査してゐる。患者の赤血球が病原體に侵入せら

れてゐる處も明瞭に觀取される。全體は隨分長いフィルムである。

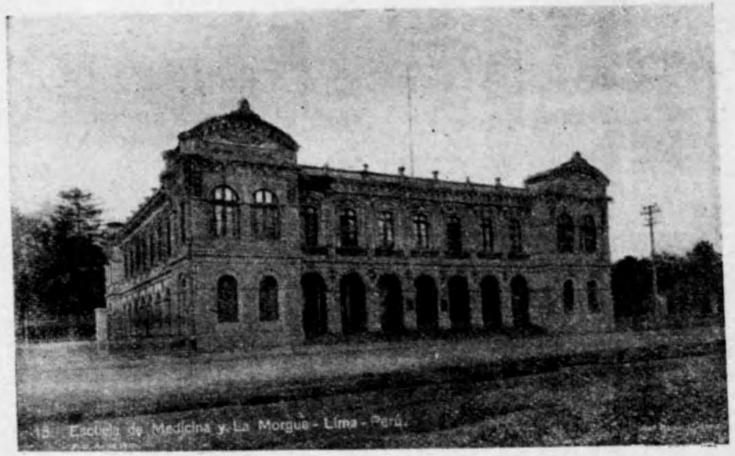
藥種類。祕露の粗製コカイン粉末は專門家の話によれば東洋產に比して良質であつて、粗製でも九十五%のコカインを含有してゐる。眞白の粉末で、百瓦だけ研究品として贈られて持ち歸つた。又昔から印甸が矢の根に用ふる毒、**クラーレ**と云ふものがある。それの精製たのを少し持ち歸つたが、專門家が試驗した結果では毒は非常に弱かつた。土人が外に出す時に弱くするのだと云ふ話がある、原料を持ち歸つた方がよかつたのだと云はれた。

四、醫事衞生事情

綜合制醫科大學＝學長ガスタネータ氏——事務長——**掠奪された圖書館**——オロヤ熱研究——バルトン教授——ストロング氏の病原體命名——オドリオソラ教授の出版——勸業省下の**衞生局**＝ロレンテ氏——局長代理ラポレリア氏——南米時間——國立種痘苗血清製造所＝**醫學及病理學地圖**——市立衞生試驗所——**醫事社會施設**＝病院——千人に十床——小兒保護施設——孤兒院——兒童保護協會——小兒外來診察所——小兒結核診療所——托兒所——配乳所——傳染病院——祕露のペスト——チブス——**マラリア豫防令**——ウタ病——コレラ・痘瘡・黃熱——寄生虫病——結核と小兒死亡——海港檢疫——移民檢疫——要屆出諸病——文盲統計——上下水

醫科大學。綜合大學制である。Universidad mayor de San marcos と云ふ。醫科の本館建物は大

して古くはない。各層が高い立派な二階建である。南米東海岸の醫科大學に比すれば勿論比較にならぬけれど、智利のよりは大きい。里馬では一六三八年以來、醫學教育を起したと云ふが、高等教育程度の醫學施設は、有名な醫者イポリト・ウナヌエ氏の一八〇八年のサン・フエルナンド內外科高等醫學校の設立に始まり、一八五六年に醫科大學に昇格しシカテヤノ・エレダ氏が第一代學長になつたと云ふ。大學の內庭に同氏の銅像がある。



リマ醫科大學本館

參觀時に學生が組織學の演習中であつたが、智利よりは進んでゐる。教授缺員中で助手が實習を手傳つてゐた。案內者の醫科大學事務長が、日本の醫科大學生の共產思想は如何かと訊いたから、自然科學方面の學生には極く稀だと答へた。彼氏は此處の學生は共產主義にかぶれて困ると云つてゐた。里馬醫科大學は元は齒科及藥學教育共に負擔してゐたが、現今はそれを分立せしめたと

云ふ。

圖書室は大きいが割合に書册が少い。一萬二千册ある。昔は隨分澤山蒐集してゐたが今かく貧弱なのは、一八八一年に智利軍が掠めて去つた爲めで、しかも彼等は中途で持て餘して、貴重な書籍を破棄したのは野蠻極はまると館員は憤慨してゐた。尙、先樣から一九二三年東京震災の話をして、帝大圖書館が燒けて氣の毒だが贈呈する書册がないと云つて呉れた。

同伴の同胞に智利との比較を話しながら案内されてゐたが、同伴の邦人はこの人にも話を聞かしてやつて呉れと冀望されるので、醫科大學や醫學研究の事を比較して話したら喜んでゐた。實際南米ではA、B、C國と聞いてゐたが、醫科大學、醫學研究、醫學的社會施設などはサンチアゴよりは里馬の方が數等上だと觀察した。有力な醫學者が輩出した結果でもあらう。

醫學的研究としては前述オロヤ熱、祕露疣病が古來存在するため、昔から夫に就いて研究して來てゐるし、近年何人も臨床方面、病理方面、病原方面の研究をしてゐる。近年は、少數ではあるが歐米學者の研究があるからその刺戟もあると思ふ。獨逸ハムブルグの熱帶病研究所の人や、北米ハアヴアードの熱帶病學者、加之、既述のバチスチニイは紐育ロックフエラー研究所で野口博士と共に病原研究をし、歸國後は醫科大學研究部長として同病々原研究をロアイサ病院でやつてゐる。まだ若いが、研究の重要なる點から重んぜられてゐるやうに見受けた。

一九二五年十月に里馬醫科大學ではオロヤ熱病發見者アルベルト・バルトン氏が大學名譽教授になつたのと、バチスチニイ氏が病原の動物試驗に成功した——『レイズス』猿に病原を移植して同病症を起さしめ得た記念に、大學で盛大な祝賀會と、嚴肅な式を行ひ、醫科大學紀要の特別號『ヴエルガ』號を出版した事は前記の通り。この特別號を事務長バチシチニ氏が著者に贈られた時に付言して、歐米人はペルーの學者が『ヴエルガ』病の研究を努めてゐる事を知らないから、かうして編纂出版物で外國に知らせ度い考なのだと云はれた。

バルトン氏はアルゼンチン人ださうだが、既に多年里馬大學にゐる。『ヴエルガ』の研究は一九〇一年頃已にやつてゐるが、病原發見は一九〇五年で、患者の赤血球内に桿狀體があると云ひ出した。それ以後の研究もあつて内外の學者がそれを承認するに至つた。人物は悠揚たる態度の學者であつた。

バチスチニイ氏は初めロックフエラー研究所で野口博士の許に留學し、オロヤ熱病々原を研究する事となり、ペルーから病毒を携へて研究所に歸り、野口博士と共に研究したのである。最初の研究報告は、連名で一九二六年二月米國で發表した。然し、どうした事情か里馬では博士と共同研究の話は聞かないし、右の研究號にも其事は揭げてない。オロヤ熱病々原體はハアヴアート大學のストロング氏がバルトン氏の名を取つてバルトネラ・バシリフオルミスと命名してゐる。

里馬大學教授エルネスト・オドリオソラ氏は、以前この病氣を研究し、醫學的記載を單行本に纒め、巴里

で一八年かに『カリオン病一名祕露疣病』と言ふ書名で出版してゐるが、立派な參考書である。同氏は一九二一年物故した學者だ。兎に角、この病氣に關する研究、調査の報告書は二百位出てゐるのを見ても、ペルーではその研究に努めて來た事が頷かれる。

ペルーに獨特の病氣は、此病氣だけであるが、他に熱帶病が種々ある。大學の教授でアルセ・モンヘ、エスコメル・ワイス諸氏はそれ等の研究者である。

祕露で『ウタ』と稱する病氣が澤山ある。之は世界一般に『ライシユマニア』病と云はれてゐるものである。里馬にはそれを研究してゐる學者もある。

衞生局。醫科大學の近所にある。興味ある事は、官制上、勸業省 Ministerio de Fomento に屬してゐる點である。隣國智利では衞生社會省が出來てゐたが、祕露でも衞生慈善及勞働省新設の意見があつて、バス・ゾルダン氏などは之を首唱してゐる。衞生局長セバスチアン・ロレンテ氏は知名の醫家ださうだが、北米出張中で、局長代理のダニエル・ラヴオレリア氏が度々應接して呉れ、ペスト病院其他に案内して呉れた。

衞生局は新しい建物ではあるが、室割が餘り事務的でなく、廣い室を衝立で仕切つて事務を取つてゐる室が何個かあつた。局長室だけは立派で應接室も付いてゐた。統計課で新しい統計表を貰ふや

うに賴んだが、その課長も醫學士であつた。印刷物は南米東海岸に比すれば種類、紙質、印刷など貧弱、統計もそれ程よくは取れてゐない。地理的、地勢的の關係が東海岸諸國とは大に違つてゐて、調査は甚だ困難な爲と思はれるが、智利に比すれば、より良く調べてゐる。

興味ある挿話は南米時間の事で、或る日、局長代理が衞生試驗所痘苗製造所の案内を午後三時と約束した。三時五分前に日本公使館へ衞生局から電話で『待つてゐる』と來た。著者は驚いて、『里馬は時間が正確だ』と云つたら、公使館では『イヤ、平素はさうでないが、外國からの來客に對しては時間を特に注意して居るのだ』と。

國立痘苗及血清治療研究所。ラボレリア氏の案内で見た。國立ではあるが小さい。しかし痘苗の外に免疫血清も作つてゐて、免疫馬の注射を見せて呉れた。研究は多少やつて居た。所長はラウル・フロレス・コルドヴアと云ふ若い學者で、著者に熱心に大統領レギア氏に面談するやう勸めて呉れた。又、自分が主として編輯した國内疾病の地理的分布調査報告書の説明をして、その出版物を呉れたのには感謝した。この國の樣に突飛な地理的狀態では、かうした調査が無ければ分布狀態を外國人が知る事は容易でない。この調査は、日本でも漸く一部分編纂を企てられてゐるに過ぎない。之は非常に難有く頂戴した。

衛生試驗所。之も簡單なもので、牛乳や水の檢査程度の仕事のやうであつた。

醫事的社會施設。里馬醫科大學衛生學教授カロス・エンリケ・バス・ゾルダン氏は國際聯盟へも出席し、汎米的の醫學的會合にも祕露を代表して出る。里馬では社會衛生施設に關與して有力なる學者である。サンチアゴで衛生社會省顧問米人ジョン・ローグ氏からの紹介を以て訪ねた。そして氏の關係した小兒保護施設慈善施設等を案内して貰つた。

バスゾルダン氏と池田ドクター

ドス・デ・マーヨ病院　即ちオロヤ熱病者を見た病院は、元來慈善病院の男子部であるが、有料もある。病床は六百六十二を備へた各專門科のある一般病院で、ロアイサ病院はその女子部で、同じく一般病院で、當時建築は立派に完成してゐたが、内部の裝飾的設備は出來上つたのと未完成のとあり、全部はまだ整つてゐなかつた。しかし

入院患者若干あり、外來も受付けてゐた。研究室に行く途中の廊子に、女子と小兒とが多勢診察を待つてゐた。隨分不潔な著物で、臭氣がひどく、御免々々と、急いで身を避はし乍ら通つた。この病院は病床を整へたらば五百人は充分に入れられる。開院來半歲だつたが檢診や治療器具は全く新式のものを米國から輸入してゐた。以前から同名の病院があつたさうだが、新に町端の廣い土地に建築移轉したのである。

ロアイサ病院正門とパチスチニ氏

里馬では此二つが大病院である。市外ミラフロレスに精神病院があり收容力六六一名。又外國病院としては伊太利亞病院、病床一〇〇。佛蘭西病院五五があり、この二院は市内に在る。

其他サンタ・アナ病院、病床四四七。傳染病院、病床一五二もある。在留日本人も病院設立の議があつて、池田ドクターによつて設計は出來たさうだが、まだ前述の如く實現に至らない。

人口二十萬の里馬市に病床が約二千以上もある。一九二〇年の調査で、人口一七三・〇〇〇、内、外國人一二・二七七。故に患者收容力は充分で、卽ち人口千人に對し十床以上であると大學の人が云つてゐた。愉快に感ずるのは病院の各病室の名稱である。例ばドス・デ・マヨ病院では、サン・ペドロ室、サンタ・アナ室、サンタ・ロサ室(外科)、或はヴエルガ研究者の名を取つてエルネスト・オドリオソラ室などの如く、他の病院の病室も皆かういつた風である。

小兒施設。ゾルダンスの案内で同氏關係の小兒に對する施設に就き、最初に見たのが孤兒院の乳兒部であつた。これは一七四八年の創立で、建物は古いがやはり西班牙式で、內庭の廊下に柱が列んでゐて、加特力の禮拜神壇が設けてある。藥局の設けもある。現在收容兒數三百十二名と聞いた。牛乳の消毒法などは勿論現代式方法でやつてゐた。說明をして呉れた所長は佛蘭西婦人で、例の加特力の黑衣白帽で、氣高い人柄であつた。この婦人は、此處に二十五年一日の如くに勤務してゐると、ゾルタン氏から聞いて、その精進さに敬意を表した。市內に市立浴場が三ケ所ある。二十萬の市に市費浴場三ケ所を設備して居るなら、東京市には市費浴場三十はあつてもいゝ筈だ。產院も見たが、異色はなかつた。

又兒童保護協會が設立した小兒外來診察所が市內に五ケ所あつて、無料診察をしてゐる。設備は簡單であるが、診察、治療、準備等の小室があり、主に內科的の仕事であつて、醫師一名に看護婦二名

宛居た。

他に特に小兒結核診療所を一ケ所、同協會が設けてゐる。それには興味を感じた。外科的手術室、消毒室の設備もしてゐた。少數のベッドも備へてある。此處は小兒結核豫防の目的を以て設立したものであると。

托兒所が幾個所かある。その一つは、他の建物を利用したもので、變つてゐた。卽ち市立市場の建物の二階の廻廊——中央部は階上なく、天窓の硝子から下の市場が照らされてゐる——を仕切つて使用してゐる。本務の事務員は二名しか居ないが、市內の會員の夫人令孃等が交代に來て執務して居る。托兒時間は朝の七時から夕方の五時までで、會員の篤志執務は八時から五時迄である。此處では子供を預かるに必要な衣服、食物、遊戲の設備など、事務の帳簿なども示して呉れた。篤志婦人は、往つた折に三人ゐたが、皆氣品のある婦人達で、ゾルダン博士には敬意を表してゐた。

も一つ配乳所へ案內された。配乳所は他に二ケ所もあるさうだ。何處も皆醫師の監督の下に置かれてゐる。兒童保護協會本部に行つて休憩して印刷物を貰つた。

斯うした施設に就いての所感は、アマゾンのベレーム——人口十四萬、然もバラ州全體が日本の

約三倍あつて人口僅かに九十萬しかない、其首都――でさへ慈善的施設があり、祕露全國の大さが日本の三倍半あつて人口五百萬、その首都人口二十萬の里馬でさへもこの程度の施設がある。一等國を以つて任ずる吾國大都市の施設と對比して、甚だ奇異なものでもある。

詳しく述べないが、一言せば、日本は南米にさへ劣るとも云へる。然し翻つて考ると、それは皮相の見でもある。新しい南米ではあるが、野蠻人が建てた國ではない。希臘羅馬から傳統進化して來た歐洲人が征服して建てた國だ。移住當時は貧弱であつても、文化的には本國の傳統があつた。都を造る時には本國で發達したものを新しい國で興すのである。斯樣な施設も出來得る所以であらう。

著者は南米の古い都市で、土地の氣候風土に副はない家屋を到る處に見た。しかし新らしく建てられる家は明らかにそれらの條件が考慮されてゐる。之も亦初めは本國其の儘を移したので、ベレームでも、バイヤでも、リオでも、サムバウロでも、ブエノスでも、サンチアゴでも、里馬巴奈馬でも、さうである。新らしく開いた都市、伯國ナタールや、ペルナムブコを見た時は驚いた。全然新樣式の市街である。古い都會ではバイヤやリオは黃熱に懲り、又ブエノスでは黃熱ではないが、國力發展の爲めに舊市區を改め、新式な建築が出來つゝある。

傳染病院。衞生局長代理ラボレリア氏の案内で、日本公使と領事、池田ドクターも同行せられた。

本來 Lazareto de Guia と云ふのださうである。市端にあつて附近は東京三河島と云つた風な所、構内一萬五千坪位に建物が幾つもある。事務所のある本館は門に近く稍立派な建物である。醫務室藥局、試驗室等一通りは備はつてゐる。病棟はそれから百米突も離れて數棟ある。天井の高い木造の平屋で、此處はペスト、コレラ、痘瘡を主として收容する隔離病院である。

傳染病院門内

病床百五十二となつてゐるが、もつと入れ得る。現在は唯ペスト患者一名を收容してゐた。參觀の時には病院から醫員と事務員と例のカトリックの看護婦が案内した。

ペスト患者の病棟に入る時、公使も領事も病床にまで來られさうなので、入口に御待ち下さいと賴んだが、領事は不構付いて來られた。奥の隅のベッドに臥てゐた患者の掛毛布をめくつて見せて呉れた。此の人は日本人だらうと訊ねた所、ラボレリア氏は土地の者だと云はれた。三十歳位の男で、顏貌面

色は凡で日本人だが、印甸であつたのである。右の鼠蹊腺の部が握り拳大に腫れ上つて、中央が赤くなつてゐる。痛いと云つてゐた。まだ熱がある。日誌を見ればもう下り坂で助かるらしい。

治療は血清療法を施してゐた。すぐ側に昇汞水の手洗が置いてあつた。壁には素朴な聖母の像がかけてある。ラボレリア氏は云ふ、患者はこの邊の者で、町の良い所に住む者は罹らない、日本人も稀に罹つて入院した事があると云ふ。

傳染病院病室

序に移住者の參考までにペスト病の事を附記したい。

祕露には元來ペスト病はなかつた。一九〇三年四月始めてペストがピスコ及カイヤオ港に入つて來た。この病氣は剿滅に全力を要する。病菌を持ち搬ぶ鼠族の撲滅が困難だからである。日本でも度々苦い經驗の後、近年漸く速に撲滅し得るやうになつた。祕

露では毎年ペスト患者が出る。訪問した年の一月から九月迄に五九五名發生し、里馬市には三十四名あつた。患者中死亡した者が二五六名、死亡率は四三%である

既往の發生數は

一九〇三年——一九〇八年	五、二九六
一九〇九年——一九一三年	四、四一九
一九一四年——一九一八年	二、九二六
一九一九年——一九二三年	三、九九〇
一九二四年	一八六

右表の如く二十年間に一萬六千八百十七人の發生を見てゐる。毎年約八百餘名の平均になり、連年絶えないのである。日本では主に秋末、年暮、春の末に流行するが、祕露では十月から引續き四月にかけて頻發する。最も多い月は一月二月三月、此國の夏の央から末に頻出する。年中存在し、五月から九月までも絶えない。日本ではペスト流行に際して死亡率が八〇パアセントを下らぬが、祕露ではそれが五〇パアセントに止まる。それで人が餘り恐れないのであらうと思ふ。種類は常に腺ペストである。里馬、カイヤオで日本人が稀にペストに罹ると云ふのは、住居衞生の良くないためと思ふ。

他の病氣に就いては、里馬市にチフスやマラリヤ患者が絶えない。日本の大都市も同樣ではあるが、一國の首都としては衞生の行屆かない證據である。それにしても、毎年の東京に於けるチフス患者率よりは少い。

里馬市チフス患者數

年次	治癒	死亡	合計	各種病者入院總數
一九一九年	一五五	四九(二四・〇%)	二〇四	一七・三四五
一九二〇	二五四	六五(二〇・三%)	三一九	一六・六九五
一九二一	二六六	五一(一六・〇%)	三一七	一七・六七一
一九二二	一七三	四二(一九・五%)	二一七	九・六二九
一九二三	一七六	四四(二〇・〇%)	二二〇	二二・三六八

里馬のマラリア。日本では臺灣に惡性のがあるけれども、內地には良性の三日熱ばかりで、死亡者は統計上極稀である。里馬のマラリアは良性のもあるが惡性のがあり、爲めに死亡者が少くないらしい。醫科大學教授ゾルダン氏の一九二四年衞生學教課程中から、里馬市のマラリア統計を摘錄して見る。

一九一三——二〇年里馬市マラリア患者及死亡表

年次	患者數	死亡數	百分比
一九一三年	四三、〇八〇	一三二	〇・二六
一九一四	五八、三一六	一一〇	〇・一八
一九一五	四一、二三六	一一七	〇・二八
一九一六	二三、二〇四	一〇五	〇・四五
一九一七	三四、〇一六	一一二	〇・三二
一九一八	三一、二六〇	二六六	〇・八五
一九一九	二四、八八八	二〇四	〇・八二
一九二〇	二四、二八八	一三七	〇・八五

又マラリア患者の、入院して死亡した者

年次	總數	死亡數	百分比
一九一三年	二、〇四五	二二	一・〇七
一九一四	二、一一七	一六	〇・七五
一九一五	一、八五九	二一	一・一三
一九一六	二、二一〇	四〇	一・八一
一九一七	二、二一一	三三	一・四九
一九一八	三、七三二	一二七	三・四〇

一九一九	三、〇五〇	一〇〇	三・三一
一九二〇	一、九〇六	四三	二・二〇

右表の如く可なり多く市内住民のマラリアがある。死亡原因に就て、より詳細な記載はなく、單にマラリア死亡とだけで、三日熱か、熱帶熱型かが不分明であるが、直接原因をなした場合の統計であらう。惡性マラリアの存在は確實である。惡性マラリアの死亡率は土地によつて大に異り、患者の一乃至二五%である。

マラリア豫防令。マラリアの慘害豫防の爲め法令第二三六四號で、二十七ヶ條からなる規程が發布された。それ程マラリアは祕露に於て重要視されてゐる風土病である。

日本人も屢々チフスやマラリアに罹つてゐる。日本の外務省には公使館附醫官の制度がないが、かかる流行病の絶えない國に駐在する役人保護の爲めに、この制度の要を感ずる。里馬で普通日本人が罹病入院の必要ある場合には、前述ドス・デ・マーヨ病院に入ると聞いた。

祕露國内に廣汎に發生するウタと云ふ病氣がある。此のウタと云ふ名は祕露では殆んど誰でもが知つて居るやうである。リオに居た頃、祕露の外交官から獨特のウタ病があるから是非見るやうにと注意された。餘程古くから知られてゐる病氣であつて、掘出した陶器の、人の顔面に罹患狀態を表現

したのがある。鼻を侵されたのは恰も梅毒の如き觀があるが、顔ばかりではなく他の個所をも侵す。實は祕露獨特のものではなく、他の熱帶國にも多くあるライシュマニア病の事である。祕露國内では主に里馬州から北方、東北方に多いらしい。祕露のアマゾナス州卽ちアマゾン上流地方にもあり、里馬に近い處ではカンタ縣内諸處に發生する。南方ではクスコ地方の如き山地にも、海岸の一州アレキパにもあつて、殆んど全國的に存在する。里馬ドス・デ・マーヨ病院でその患者を見た。里馬ではその研究、治療法の研究もしてゐる。

又古くから有名な病氣で、ボシオ又はコト（土語）と云ふ甲狀腺肥大病がある。昔から土人印甸が罹ると云はれ、クスコ州やアンカス州の印甸に多いさうだ。馬、犬、山羊にも同病があると云ふ。ピンタ又の名カラ（土語）と云つて、皮膚に斑紋が生じ、その部分の表皮が剝脫する病氣が海岸地帶に多く有名である。印甸の褐色の皮膚が所々白く、又淡紅或は暗黑になつてゐて、極めて奇異の觀を呈する。原因に就いては色々說があつて不明の病氣だとされてゐる。之は單に皮膚病ではなく、全身的に種々の症狀が現はれる。これ等祕露で有名な病氣はドス・デ・マーヨで見學する事が出來る。

癩もある。再歸熱もある。發疹チフスもある。虎列刺の最も猛烈だつたのは一八六八年里馬の流行で、患者三千を出したと云ふ。近年では一九二一年エクワドル國グワヤキールから病毒が北部祕露に入り發生した。其後はない。

天然痘は古くからあつた。一八〇六年に痘苗が初めて里馬に到着した。牛痘苗を作り得るやうになつたのはずつと後の事であるが、現在の國立痘苗製造所は一八九五年創立と云ふ事である。種痘は國法で行はれ、この製造所の痘苗製造及種痘施行の爲め、國費年額二萬リブラ以上を支出すると云ふ。一九二二年の種痘員數は八萬人以上である。

黄熱病は一八五二年に初めて侵入し、一八五四年里馬市で二千五百人の犧牲者を出した。最後の發生はバイタに一名で、絶滅した。

普通何處にもある傳染病、例へば猩紅熱、痲疹などは勿論祕露にもある。腸寄生蟲病は氣候風土の關係上か、想像外に少いやうに見られる。祕露の東部地方に十二指腸蟲病が甚だ多いと云ふが。

病氣の話の終りに國民衛生の標準ともなるべき結核と小兒死亡の二點に付いて云へば、歐米文明國では結核豫防施設發達の爲め、國民全部に亘る結核が漸減した。近時の各國結核の數の比較は、そのまゝ衛生文化の比較となる。結核豫防施設は容易なものではない。一國文化の各方面が調和し進歩するのでなければ徹底し難い。であるから結核の減少には、直接豫防施設の發達ばかりでなく國の各方面の施設の進歩がこれに平行してゐる譯である。南米諸國は、まだ直接の豫防施設は固より、一般の衛生文化が進んでゐないから結核も多いのである。

里馬市の十年間の結核死亡統計

年次	肺結核 實數	肺結核 人口千人ニツキ	其他ノ結核 實數	其他ノ結核 人口千人ニツキ
一九一四年	七一五	四・五五	二二八	一・四五
一九一五	六六八	四・一八	二三二	一・四五
一九一六	八三四	五・一四	二〇九	一・三五
一九一七	七六〇	四・六〇	二七七	一・六七
一九一八	九二九	五・五三	二一六	一・二八
一九一九	八八九	五・三〇	二八二	一・六九
一九二〇	七五五	四・三三	二一五	一・二三
一九二一	七九六	四・四九	二一九	一・二三
一九二二	七四五	四・一三	一六〇	〇・八八
一九二三	八〇二	四・三七	一四二	〇・七七

最後の二年は減少を示してゐるが、それにしても結核性死亡が相當多い事を示してゐる。首都の里馬にして然り、衛生施設の行屆き難い地方の都市のそれは勿論と思ふ。夫で祕露では結核の診斷、重症者の入院、サナトリウム及海濱轉養部落、外氣學校、豫防教育、其他の直接施設は漸次興りつゝある。

結核に對する高地氣候の效果は周知の事である。祕露には有名なハウハ・サナトリウムがある。初期結核は必ず癒るとさへ云はれてゐる。此處は中央鐵道の沿線で、里馬から二八七粁の距離にあり、オロヤより八千粁先きになつてゐる。海拔一萬九百九十呎で、アンデスの海岸山脈を東に越した所に在る。

小兒死亡の多寡も亦國衛生文化の一標準であること結核死亡と同樣であらう。祕露でも小兒死亡が多い。

里馬市の小兒死亡統計（人口一〇〇〇に就き）

年次	出生	總死亡	小兒死亡	小兒死亡
一九一一年	二六・六六	二八・三一	七・〇二	二六三
一九一二	二五・六六	二九・二〇	七・六八	二九六
一九一三	二五・七一	三〇・六五	七・一七	二七八
一九一四	二六・五九	二六・八五	六・四五	二四四
一九一五	三二・〇六	二五・六六	七・〇九	二二〇
一九一六	三六・五八	二九・三七	七・六〇	一九〇
一九一七	三三・九八	二七・六七	六・九四	二一八
一九一八	三七・五一	三三・八八	七・八一	二〇八
一九一九	三七・三五	三〇・三七	七・〇八	一八九
一九二〇	三九・五五	二九・二〇	七・七七	一九八

里馬市　〇歳より一歳までの乳兒死亡實數

一九一八年	一、三一二人
一九一九	一、二〇九
一九二〇	一、三五二
一九二一	一、三三八

人口千につき七・五の死亡率である。日本の大都市の、平均四人三分よりは遙かに多い。最近に至り里馬市の出生は人口千につき約四十に上るが、全死亡は尙ほ約三十である。その中小兒死亡の原因の約半數は下痢及腸炎で、次は單純腦膜炎、氣管支炎、マラリア、流行性感冒、肺結核、先天梅毒の順序で、痲疹、百日咳、ヂフテリア、及猩紅熱等の小兒傳染病死は、案外少數であるが、小兒の搐搦死（小分類八〇病名）に於ては、南米第一の多數國で、祕露小兒科衛生家の注意する所である。日本は人口十萬に十一人である。里馬は三十五人、リオ二十一人、サンチアゴ十二人、サンパウロ九人、ブエノス九人、（ボストン十一人、シカゴ三人、ワシントン一人餘）である。玆に擧げた數は、一九二二年の例である。兎に角、小兒死亡の多い國で、醫者は熱心に小兒保護施設運動をしてゐる。里

馬市に一大新病院 El Hospital del niño の計畫があり、實現も遠くないであらう。

海港檢疫。 海港衞生事務は衞生局の管下にあり、カイヤオの埠頭近い所に檢疫事務所があり、檢疫港は、最北バイタ（南緯五度）、中央カイヤオ、南方イヨ（南緯十七度半）の三個所にある。カイヤオには檢疫醫二名、他は一名宛と云ふ。著者が訪問の際は、衞生局よりの通知で、檢疫醫であるロアイサ病院病理研究者ダニエル・マツケニイ氏が來てゐて呉れた。今一人の檢疫醫にも紹介され、近くの郵船會社支店からも太田長三君が來會せられた。平常、檢疫上重きを置くのは、虎列刺、黃熱、腺ペストであるが、その他癩、ヂフテリア、腸チフス、猩紅熱、痘瘡、痲疹、脚氣である。近頃はさうした病氣は這入らず、惡性傳染病は大抵北か南の外國から來ると云つてゐた。海港檢疫法は一九一〇年三月十一日發布規程に依り、此國でも檢疫には旅券に種痘證明が入用である。著者は訪問には豫め衞生局から傳染病豫防規程を貰つて夫を見て置いた。

祕露では脚氣を傳染病としてゐる。マツケニイ氏に其の根據を質問した。氏はその規程には關與しないから知らない、それに古い規程だと云つたが、一九二四年九月十六日改正になつたものである。マツケニイ氏は邦船の檢疫に際しても、至極公正な取扱をして呉れ、學者肌の人格者だと邦人は賞めてゐる。

十月廿九日に銀洋丸が着く。近頃在留同胞は若干の代表者をカイヤオに送つて上陸する同胞の世話をする。以後は大勢迎へに出たのだが、却つて混雜を來すのでかう改めたさうだ。近頃は日本人會は郵船會社や檢疫所と良く連絡を取つて、上陸者を整然と離船させると云ふ。祕露への移民の檢疫に就いて邦人の話によれば、トラホーム、脚氣、腦膜炎、疥癬に對しては嚴格だと云ふ。腸寄生蟲の事は八釜敷云はぬ由。檢疫史中最も困惑した出來事は、一九一八年の安洋丸移民中、腦膜炎が七八名發生し、カイヤオで上陸を禁ぜられ、船は巴奈馬に引返したが、運河地帶の北米官憲が患者を引受けて呉れたので大助りであつたと。著者もランチに乘つて沖掛りの同船を訪問して船長船醫に面會し、船内を見物した。南米西海岸航路の安洋、樂洋、銀洋何れかに一度乘つて見度いと思つたが、日程の都合が惡く、一度も邦船を利用出來なかつた。

序に、念の爲め傳染病規程中、屆出義務のある病名を列記する。

コレラ、黃熱、腺ペスト、發疹チフス、痘瘡、ヂフテリア、腦脊髓膜炎、小兒麻痺、癩、ベリベリ、腸チフス、パラチフス、再歸熱、赤痢、膿漏眼炎、肺又は喉頭結核、流行感冒、マラリア、ライシュマニア及トリパノソーマ病、嗜眠性腦炎、以上。

傳染病法令二三四八號は、一九二四年改正にかゝるものである。マラリアを屆出傳染病に加へてるのは、祕露では意義あるものと信ずる。一九一六年マラリヤ豫防法の公布があつたのは前記の通

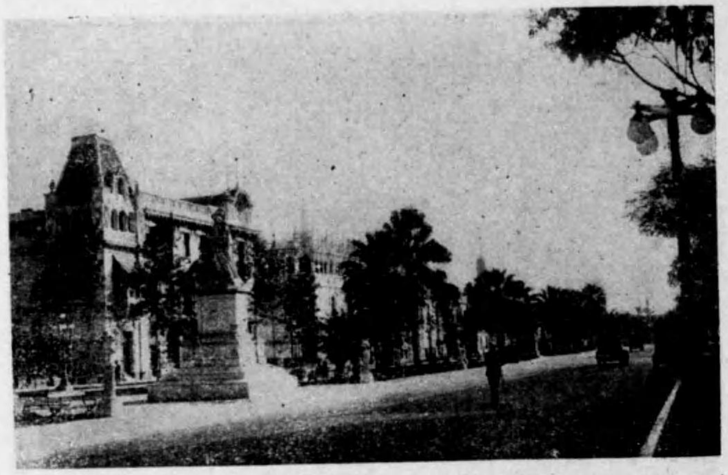
り。

文盲統計。南米諸國で、日本の就學率は九十九パーセントだと說明すると有識者は皆驚く。里馬縣全人口二十二萬八千七百人中、文盲二千二百四人、千人に就き十五人との統計があげてある（一九二〇年調査）

里馬市上下水道。上水はリマク川の上流から引き、貯水場と濾過床とを設備してゐる。給水量一千萬立方リットル、計量器はなくて毎月四・八〇ソレスを支拂ふと森本氏の話であつた。計量器は漸次普及の方針で、既に設備した部分もあると。下水は里馬市下方二哩マグダレナで海に放流する。

五、里馬市雜觀　土地・風俗——國立博物館＝インカ出土品——穿顱術——勇士ボロネシイ——大學陳列所＝出土品樣々——ラ・プンタ——珍奇人骨發掘——料理——潮流と氣候——外人耕地——ゾルダン氏——多過ぎる醫師——旅の煩雜事項

里馬市の一瞥。リマ市はリマク川の名から生れた都であると云ふ。アンデスの海岸山脈の東西に走る皺谷に融け落ちる雪水が川となり、雨の降らぬ不毛のデザートを流れる。その川に依つて沿岸に草



リマ市新設街路

木も生き耕地も開け、里馬市も開發された譯である。市は一五三〇年フランシスコ・ピサロが建てた都である。一九二〇年の調査では、人口十七萬三千七人であつた。近時は二十萬と云つてゐる。

バシリカ寺院

バシリカ寺院は昔のピサロの宮殿と相對し、其の間が廣場

になつて、之が街衢の中心になつてゐる。餘り幅廣くはないが自動車の往來に差支はない。建物は高層ではない。裏の方には狹い道があり、市の端の方に新設の廣い大通りが出來てゐる。日本人の建てたマンコ・カパクの像の所在などは、町の端だけれども道幅は廣い。又新築の建物は當世式で立派なのが多い。社會政策的の施設を見學の爲め、貧民區域を廻つて見た。平屋許りで道も悪く、餘り綺麗でなかつた。避病院も見た。

バシリカは近年カテドラルから昇格改名したと聞いた。外人の旅行記には大抵此寫眞が掲げてある。里馬自慢の堂々たる堂宇である。無論加持力で、内部も立派で確かに自慢されて良いものである。堂宇の内に、祕露を征服し、後之を統治したピサロの遺骸が硝子張の棺に納められて立派な臺に安置されてゐる。一五四二年に暗殺されたので之は本物でないと云ふ説もあるとか。お寺の右に接續してアーチ・ビショップの宮殿があつた。

バシリカ内部

或る案内書に婦人の外出にかつぎを被つてゐるやうに書いてあつた。サンチアゴでは少數見かけたが里馬では平日は見なかつたが、日曜日のお寺詣りにはヴエール樣の物を被いでゐる。上品なもので、黑色の絹紗の如く見えた。以前は本絹であつたが、近頃は人絹が多くなつたとの事。知合の婦人にはなくて撮れなかつた。スカートも北米よりは少し長いやうだ。滯在中二度日曜日に會つたが、ほかに十一月一日は『トドス・ロス・サントス』と云ふ祭日の墓參日であつた。かつぎは兎も角も西海岸南米情緒をそゝるものであるが、この風俗も追々廢れて行くらしい。

國立博物館。日本公使館から程遠からぬ所に在り、二つの廣い通に面した白堊塗の可なり大きい氣持の良い二階建である。しかし内部容積の大きいに拘らず、割合に陳列品の少ないのを奇異に思つたが、之も一八八一年智利との敗戰に目星しいものを持ち去られた爲

パシイカ廣場よりピサロ宮殿を望む

めだと云つてゐた。智利のサンチャゴの博物館が、所狹いまで内容充實してゐたのと、參照される譯だ。

顯著なのはインカ時代の物、發掘陶器、人骨殊に頭蓋骨に所謂穿顱術を施したもの、それに彼の不可思議な、縮小した人間の乾物が澤山ある。紐育の博物館で既に見たものではあるが、祕露ではインカ時代に穿顱術を行つてゐた。掘出した骨に、周緣の鋭利な切り口が判然とわかるのは、手術は成功したが間もなく死亡したものであり、又周緣の鈍になつてゐるのは手術後長く生存し、切取つた周緣の骨組織が更に成育したものと云ふ。どうして斯樣な手術をされた頭骨が澤山出るのか、如何な器械で手術したのかは不明であるとの事。今一ッは、頭髪の長い、顔は確かに大人らしい人體全部の縮小乾物とも見える一體である。今でも五百圓も出せば山奥の土人から買取つて來られると云つてゐたが、兎に角奇態な代物ではある。その他、生前に頭部を緊縛し、頭蓋を人工的に變形したもの等も珍らしい物である。

愛國的武勇談の象徴たる、祕軍大佐フランシスコ・ボロネシの大油繪肖像が一枚懸かつてゐた。一八八〇年智・祕戰爭に、アリカ港附近で祕軍敗戰の際、智利軍に軍旗を奪取せられざらん爲め、港を抱擁する高い突角の巖上から、軍旗を掲げ將に馬を跳らして海中に乘込まんとする、如何にも勇ましい場面であつた。豫てその事蹟を聞てゐた著者は、この繪畫の前に感奮して敬意を表した。

大學陳列所。之は時計臺のある法科大學の横にある。三ッばかりの餘り大きくはない室や、廊下にも陳列してある。インカ時代の發掘物が順序よく所狹いまでに陳列してある。此處には穿顱した頭骨の種類が博物館よりも澤山あるし、又陶器類——それは主としてボッテリ——の形色共完全なものが澤山ある。これ等は現今國外持出禁止だといふ。動物は剝製ではあるが珍らしい種類を澤山見た。その方面の知識がないから興味あるものを摘錄し難いのを惜む。法科大學も西班牙樣式の建物で、二階建で、中庭の廊下には例の見事な柱列がある。

ラ・プンタ。見學と訪問に多忙で、サン・クリストバール——市の背後の高丘で、其處の高竿は遠方からも望まれる——へは遂に登り得なかつた。船がカイヤオを離れる時にも殘り惜しかつたものゝ一つである。ラ・プンタは檢疫所行の歸りに郵船の太田君に連れられて行つたのと、或る日曜日に公使の招待で清遊した。カイヤオからは電車で十分許、里馬から電車で三十分程の距離にある。海濱の砂地で、海は非常に清澄、水際に打寄せる波の碎ける光景、近くの島の眺めを濱邊の椅子に腰打ちかけて樂む。夏は海水浴が盛なさうだが、折しも十月の末で、合著の程よい季節だつた。公園には種々の草花が咲き亂れ、就中、薔薇は見事であつた。リヴエラ・バレース・ホテルと云ふホテルがあり、その夏向な食堂は合著でも涼し過ぎた。食事は非常に美味。ラ・プンタには小さいながら海軍兵學校がある。